

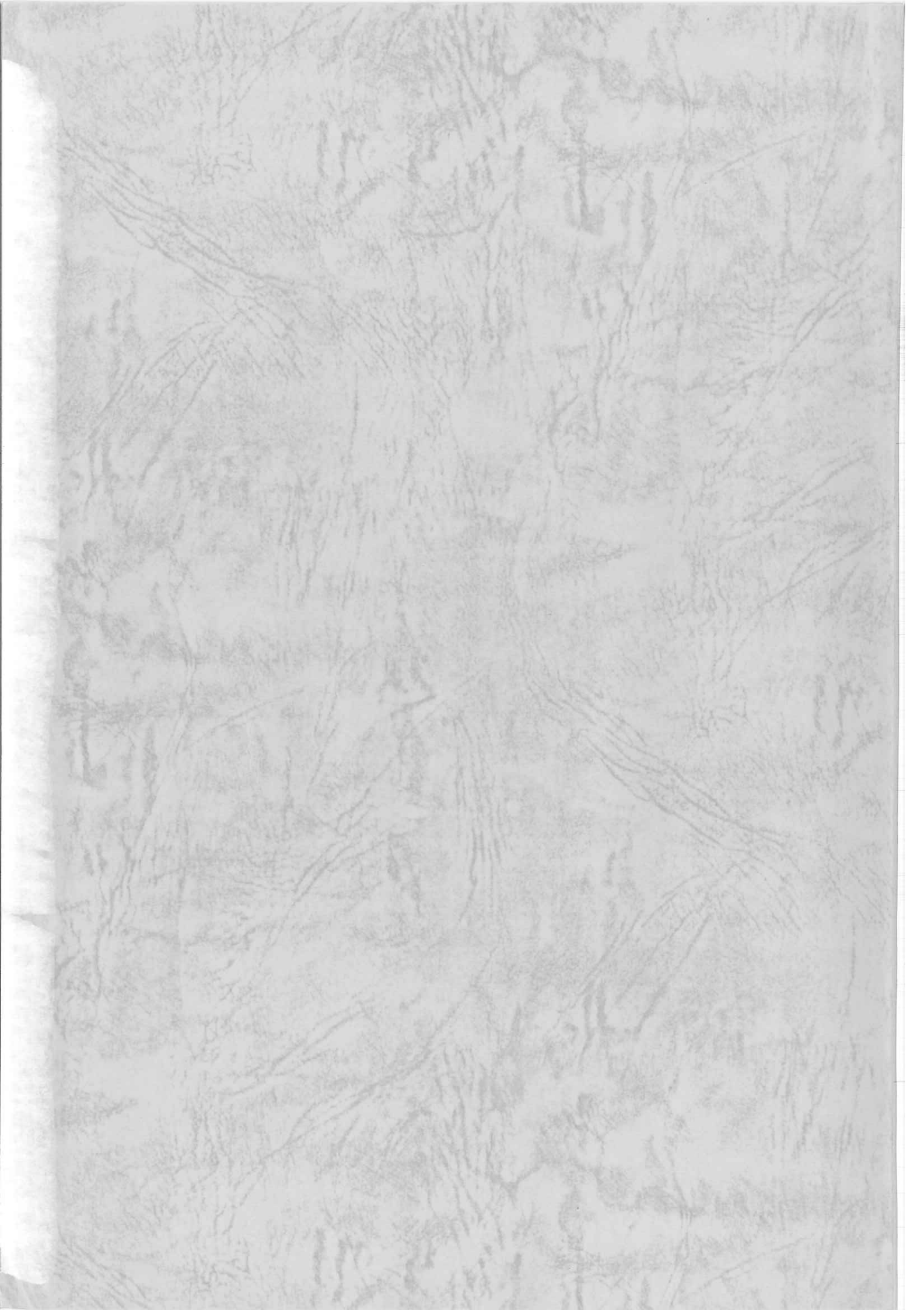
岱明町文化財調査報告 第1集

# 玉名平野条里跡・下河原

下河原土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2004年

熊本県玉名郡岱明町教育委員会



## 序 文

私たちの岱明町には、幾世代もの人々が生活してきたことを示す数多くの文化財が点在しています。これらの文化遺産に接するとき、永年の歴史を想起すると同時に、「文化財に学ぶ」ことの大切さを感じます。

このたび、下河原土地区画整理事業に伴い、区域内の埋蔵文化財の発掘調査を平成14年度に熊本県教育庁文化課と岱明町教育委員会で実施しました。

調査の結果、条里制遺構は確認できませんでしたが、中世・近世の水田畦畦、水田に伴うと考えられる木杭列、最下層からの木杭、古墳時代・平安から鎌倉期の溝状遺構2条が確認されました。また、遺物も少量ではありますが、特に、縄文時代前期から晩期にかけての土器、弥生時代の土器、土師器、須恵器や石器等も出土しました。

下河原は、当時の人々の生産の重要な場所と、岱明町の歴史の一端を知る貴重な資料を提供してくれました。

この調査報告書 第1集が、広く教育の場や学術研究の進展にいささかでも役立ち、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深めていくための一助となれば幸いに存じます。

なお、本調査を実施するにあたり、ご理解とご協力を賜りました地権者の方々や区画整理組合の関係者、炎天下から雪の降る時期までの発掘調査で、ご苦勞をおかけしました皆様方、ともに調査協力をいただきました熊本県教育庁文化課、そして、玉名地域振興局土木部工務課、岱明町役場建設課の関係機関及び、ご指導・ご助言をいただきました諸先生方に対して厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月31日



岱明町教育長 高村 正矢

## 例 言

- 1 本書は、熊本県玉名郡岱明町の下河原土地区画整理事業区域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、熊本県教育庁文化課による現地の確認調査の報告をもとに、平成 14 年 8 月 19 日から平成 15 年 2 月 28 日にかけて、熊本県教育庁文化課と岱明町教育委員会の合同で行った。
- 3 整理・報告は、平成 15 年度に行なった。
- 4 現地での実測・写真撮影は、中尾健照が行なった。
- 5 遺物の整理と土器・石器の 1 部の実測、製図は、中尾・上土井朋美が行い、木器・石器・土器の 1 部の実測、製図については、(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。土器の拓本と遺構製図は、中尾が行なった。
- 6 遺物の写真撮影は、竹下写真館に委託した。
- 7 出土した木材の樹種同定の分析は、(株)古環境研究所に委託した。
- 8 遺物観察表は、中尾が作成した。
- 9 本書の執筆は、中尾が行なった。
- 10 本書の編集は、岱明町社会教育課で行い、境 順一・中尾が担当した。
- 11 出土遺物は、岱明町中央公民館の倉庫に保管している。

## 凡 例

- 1 遺構の方位は、すべて磁北で示した。
- 2 遺構番号は、単独の杭だけ、下層からの通し番号とし、その他の遺構は、確認した順に番号を振り、それぞれ頭に記号を付して以下に表した。

SW (単独の杭)	SD (溝状遺構)	SX	┌ 上層水田面 (畦畔・稻株痕) ├ 下層水田面 (畦畔・土手状遺構) └ 杭列、矢板列
- 3 出土遺物は、すべて通し番号とした。
- 4 土器の図については、復元可能なものは全て反転復元し、不可能なものは、断面に拓本を付した。
- 5 木製品の図については、腐食部分を  のスクリントーンで示した。
- 6 石器の図については、磨面部分を  のスクリントーンで示した。

# 本文目次

## 序文

## 例言・凡例

## 第I章 調査の経緯

- 1. 調査に至る経緯 ..... 1
- 2. 調査の組織 ..... 1

## 第II章 遺跡の概要

- 1. 遺跡の位置・環境 ..... 2
- 2. 周辺の遺跡と歴史 ..... 2

## 第III章 発掘調査の概要

- 1. 調査の方法と経過 ..... 9
- 2. 遺跡の基本層位 ..... 11

## 第IV章 調査の成果

### 第1節 遺構と遺物

- 1. XII 層遺構 ..... 13
- 2. XI 層遺構 ..... 13
- 3. XII 層、XI 層の遺物 ..... 16
- 4. XI 層、X 層の遺物 ..... 18
- 5. XII 層の遺物 ..... 26
- 6. XI 層、X 層の遺物 ..... 26
- 7. IX 層遺構 ..... 26
- 8. IX 層の遺物 ..... 30
- 9. VIII 層遺構 ..... 34
- 10. VII 層遺構 ..... 42
- 11. VIII 層、VII 層、VI 層の遺物 ..... 47
- 12. VII 層の遺物 ..... 55
- 13. IV 層遺構 ..... 55
- 14. III 層遺構 ..... 59
- 15. V 層、IV 層、III 層の遺物 ..... 59

## 第V章 まとめ ..... 63

### 付編 自然科学分析

- 1. 放射性炭素年代測定 (熊本県)
- 2. プラント・オパール分析 (熊本県)
- 3. 木杭樹種同定 (岱明町)

### 写真図版

## 表 目 次

第 1 表(1) 玉名平野条里跡・下河原 周辺遺跡一覽 .....	7
第 1 表(2) 玉名平野条里跡・下河原 周辺遺跡一覽 .....	8
第 2 表(1) 土器觀察表 .....	6 6
第 2 表(2) 土器觀察表 .....	6 7
第 2 表(3) 土器觀察表 .....	6 8
第 2 表(4) 土器觀察表 .....	6 9
第 3 表(1) 木製品觀察表 .....	7 0
第 3 表(2) 木製品觀察表 .....	7 1
第 4 表 石器觀察表 .....	7 2

## 挿 図 目 次

第 1 図 玉名平野条里跡・下河原 位置図 .....	4
第 2 図 遺跡周辺地形図 (「高瀬」2 万分 1 地形図、明治 35 年発行) .....	5
第 3 図 周辺遺跡分布図 .....	6
第 4 図 基本土層図 .....	1 1
第 5 図 XII 層、XI 層、IX 層遺構配置図 .....	1 4
第 6 図 XII 層、XI 層 SW-01~06 実測図 .....	1 5
第 7 図 SW-01~06 出土杭実測図 (001~006) .....	1 7
第 8 図 XII 層、XI 層出土土器実測図 (007~018) .....	1 9
第 9 図 XII 層出土土器実測図 (019~023) .....	2 0
第 10 図 XI 層、X 層出土土器実測図 (024~038) .....	2 2
第 11 図 XI 層、X 層出土土器実測図 (039~049) .....	2 3
第 12 図 XI 層、X 層出土土器実測図 (050~058) .....	2 5
第 13 図 XI 層、X 層、釜場出土土器実測図 (059~070) .....	2 7
第 14 図 XII 層出土石器実測図 (071, 072) .....	2 8
第 15 図 XI 層、X 層出土石器実測図 (073, 074) .....	2 9
第 16 図 X 層出土石器実測図 (075~079) .....	3 1
第 17 図 IX 層 SD-02、流木 (木製品) 実測図 .....	3 2
第 18 図 IX 層出土木製品実測図 (080, 081) .....	3 3
第 19 図 IX 層出土土師器、石器実測図 (082~088) .....	3 5
第 20 図 VIII 層、VII 層遺構配置図 .....	3 6
第 21 図 VIII 層 SX-04 実測図 .....	3 7
第 22 図 SX-04 出土杭実測図 (089~094) .....	3 9

第 23 図	SX-04 出土杭実測図 (095~100)	4 0
第 24 図	SX-04 出土杭実測図 (101~103)	4 1
第 25 図	Ⅷ層 SX-05、SW-07 実測図	4 3
第 26 図	SX-05 出土杭実測図 (104~109)	4 4
第 27 図	SX-05 出土杭実測図 (110~115)	4 5
第 28 図	SX-05 出土杭 (116)、SW-07 出土杭 (117) 実測図	4 6
第 29 図	Ⅶ層 SD-01 実測図	4 8
第 30 図	Ⅶ層 SD-01、SW-08 実測図	4 9
第 31 図	SD-01 出土遺物実測図 (118~122)	5 0
第 32 図	SD-01 出土木製品 (123)、SW-08 出土杭 (124) 実測図	5 1
第 33 図	Ⅶ層水田面 SX-02、SX-03 実測図	5 2
第 34 図	Ⅷ層、Ⅶ層出土土器実測図 (125~133)	5 4
第 35 図	Ⅶ層出土遺物実測図 (134~147)	5 6
第 36 図	Ⅶ層、Ⅵ層出土遺物実測図 (148~158)	5 7
第 37 図	Ⅶ層出土石器実測図 (159~163)	5 8
第 38 図	Ⅳ層、Ⅲ層遺構配置図	6 0
第 39 図	Ⅲ層水田面稻株痕、足跡実測図	6 1
第 40 図	V層、V層、Ⅲ層出土遺物実測図 (164~171)	6 2

## 図版目次

- 図版 1 調査区全景、表土剥ぎ後杭打ち風景、作業風景
- 図版 2 西側XII層検出状況、XII層杭周辺検出状況、SW-01 半載状況
- 図版 3 SW-02 半載状況、SW-03 半載状況、SW-04 半載状況
- 図版 4 SW-05、06 半載状況、XII層石皿出土状況、SD-02 検出状況
- 図版 5 SD-02 土層断面、流木（木製品）出土状況、IX層土師器出土状況
- 図版 6 SX-04 半載状況、SX-04 近景 1、SX-04 近景 2
- 図版 7 SX-04 近景 3、SX-05 半載状況、SX-05 近景 1
- 図版 8 SX-05 近景 2、SX-05 近景 3、SW-07 半載状況
- 図版 9 SD-01 全景、SD-01 完掘状況、SD-01 木製品出土状況
- 図版 10 SD-01、SX-02、03 遠景、SX-02 完掘状況、SW-08 半載状況
- 図版 11 VII 層土器出土状況、SX-01 全景、稲株痕、足跡完掘状況
- 図版 12 縄文土器、縄文土器
- 図版 13 縄文土器、縄文土器
- 図版 14 縄文土器、縄文土器
- 図版 15 石匙、削器、石皿
- 図版 16 磨石、礫器
- 図版 17 磨石、石皿、砥石
- 図版 18 石錘、弥生土器
- 図版 19 弥生土器、弥生土器
- 図版 20 弥生土器、弥生土器
- 図版 21 弥生土器、弥生土器、縄文土器
- 図版 22 土師器、須恵器、黒色土器、土錘
- 図版 23 甗、土師器、須恵器
- 図版 24 土師器、瓦器、白磁
- 図版 25 須恵質土器、瓦質土器、土師器、青磁、染付







# 第 I 章 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

岱明町は、熊本県北西部に位置し、総面積 22.81 km<sup>2</sup>、人口 15,000 人の町である。東は、玉名市、西は、長洲町と接している。町の東西を流れる境川、行末川、南北に走る 501 号線・208 号線の国道に面して立地し、中央に JR 鹿児島本線が通り、大野下駅がある。

現在、岱明町の野口字下河原において、土地区画整理事業が進行中でありそれに伴って、工事区域内が、県遺跡地図上で、記載されている「玉名平野条里跡」として、周知の埋蔵文化財包蔵地である。

そこで、県文化課では、現地の確認調査を実施した。確認調査の結果については、室町時代から戦国時代以前と思われる水田区画 3 面、出土遺物は、土師器の坏片、須恵器の甕片が出土している。

これらの経緯を踏まえ、町としてはその対応が求められ、県文化課と岱明町教育委員会の合同による現地の発掘調査を実施した。

調査は、平成 14 年 8 月より土地区画整理事業の計画に従い、都市計画道路の側道部分を岱明町で、新境川橋（橋梁改築）部分を県文化課で、行なった。

なお、遺跡周辺は、盛土造成される予定である。

## 2 調査の組織

事業主体	岱明町 建設課
調査主体	岱明町教育委員会
調査責任者	高村 正矢（岱明町教育長）
調査総括	前田 義雄（岱明町社会教育課長）
調査事務	境 順一（岱明町社会教育係長）
調査担当	中尾 健照（岱明町社会教育課臨時職員）
調査作業員	境 エミ子 佐方 直美 竹内 得益 安田 健一郎 林 國子 萩尾 毅 本田 重雄 田上 ハツエ 平野 洋子 村井 正 沼田 義海 高津 千尋
県調査担当	後藤 喜美子（熊本県教育庁 文化課主事） 西 慶喜（熊本県教育庁 文化課嘱託）
整理協力者	山口 譲治（福岡市埋蔵文化財センター所長、木製品の指導・助言） 末永 崇（玉名市教育委員会） 黒田 裕司（三加和町教育委員会） 益永 浩仁（菊水町教育委員会）

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 1. 遺跡の位置・環境

玉名平野条里跡・下河原は、熊本県玉名郡岱明町野口字下河原に所在する。岱明町の東部、境川の右岸に位置し、標高4m程度の地点にあり、周囲は水田が広がっている。本遺跡は、菊池川下流域に広がった肥沃な沖積平野に立地し、岱明町でも初めて確認された低湿地遺跡である。

加藤清正時代より進められてきた菊池川治水干拓事業により、西側の行末川・境川は東南に湾曲した流れを本来の北東方向に掘替えられている。

菊池川は、阿蘇西外輪山に源を発し、本流の全長71km、その流れを緩やかに変えて、菊鹿盆地を抜け、緩やかな山地の間をやや蛇行しながら玉名平野を横切り、行末川・境川とともに、有明海に注ぎこんでいる。有明海側は、干拓地が広がり、その先には雲仙普賢岳を望む。北に位置する標高501mの小代山筒ヶ岳は、山裾まで急傾斜し、洪積台地から低丘陵地へ、さらに、本遺跡へと緩やかに続いている。

この地域は、近世には、坂下手永に属し、野口村と称していた。明治22年には、大野村の区域となり、大野村・睦合村・鍋村・高道村の4ヶ村が同一行政区画となる。

昭和30年の町村合併を経て、昭和40年4月1日に「岱明町」として現在に至っている。

### 2. 周辺の遺跡と歴史

#### 旧石器

岱明町では、旧石器時代より連綿と人々の生活が営まれている。この時代の遺跡としては、今泉遺跡、年の神遺跡、備中遺跡の3遺跡からナイフ形石器が確認されているが、いずれも表面採集の遺跡で確認されたものである。

#### 縄文

縄文時代になると、沿岸の小高い丘陵上と貝塚を中心として台地の縁辺部付近に分布している。目倉尾遺跡から、押型文土器（山形文）、尾崎貝塚、荘司貝塚、古閑原貝塚、浜田貝塚から阿高式土器が、中土西・山下西遺跡では、後・晩期の土器が確認されている。

また、玉名市の繁根木貝塚、長洲町の腹赤貝塚、横島町のピナワラ貝塚・キャアガラワラ貝塚が知られている。本遺跡からも、縄文早期前半（釜場表採）、前期・中期・後晩期の土器片資料が少量出土している。

## 弥生

弥生時代の周辺遺跡は、低い台地上に、住居跡、土壙墓、甕棺墓、支石墓や沖積平野の微高地にも貝塚が分布を示す。弥生前期中の道貝塚、中期の塚原遺跡、中期～後期の年の神遺跡、後期の山下遺跡、中期～終末期の下前原遺跡、後期以降～古墳初頭期の大原遺跡などが発掘調査で確認されている。その中でも、年の神遺跡からは、玉名郡で3例の1つ銅矛が出土している。

下前原遺跡では、溝をめぐらした集落跡の中に、竪穴住居27戸のうち12戸が発掘（高床倉庫2戸、作業小屋3戸、住居7戸）された。水田耕作を拡大し、長い間集落があったことがわかっている。遺跡からは、前期・中期・後期の土器片が出土している。

## 古墳

古墳時代の菊池川下流域での古墳は、4世紀末～5世紀初頭の前方後円墳の院塚古墳跡（昭和39年の発掘調査した後に、九州松下工場の敷地となり、消滅している）、5世紀頃の前方後円墳の藤光寺古墳、6世紀頃の前方後円墳ともされる弁財天古墳、円墳で現在は消滅している今泉古墳跡が確認されている。流域でも古い前方後円墳としては、玉名市の4世紀末の山下古墳が知られる。その後続く、院塚古墳跡は、今はその雄姿を仰ぐことはできないが、全長78m、後円部に4基の舟形石棺を納め、その内の1基からは、画文体神獸鏡、多数の玉類のほか、鉄製の直刀が出土している。古墳参考地としては、塚山古墳、池田古墳、西照寺古墳、浜田西原古墳が、台地から縁辺部付近まで分布している。

遺跡からは、土師器の甕、須恵器の坏身、坏蓋の破片等が出土している。

## 古代

奈良～平安期の遺跡では、馬不向遺跡から青磁皿、土鈴、土師器を伴う住居跡が、簾布遺跡の集落跡からも青磁碗、土師器が確認されている。

遺跡からは、甌の破片、須恵器の坏蓋の片等が出土している。

## 中世

中世の城跡では、大野別府の地頭であった大野氏の日嶽城跡、その支えの城に古城跡、出城に高道城跡、上村城跡がある。そして、下村城跡も知られる。

紀政幸は、正平13年（1358）2月9日に、「尾崎河原西」に1町1反の田地を高瀬・繁根木・寿福寺の末寺長福寺護摩堂に寄進している。

境川の右岸一帯を、紀氏が所領し、ある程度の水田化が進んでいたと推定される。

遺跡からは、青磁の碗、瓦器の椀、土師器の皿の破片等が出土している。

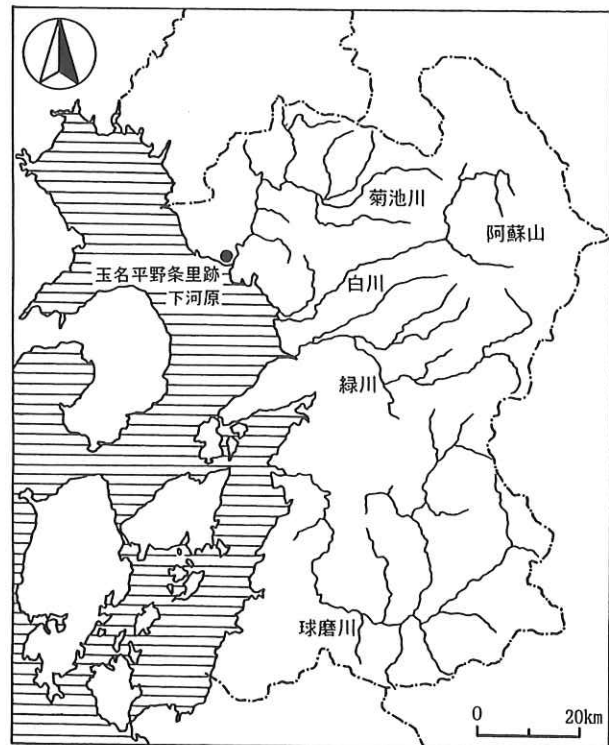
館跡では、陣館跡、築地次郎国秀館跡、中土屋敷跡（現、土塁・濠は消滅）、扇崎要害の森館跡（現、荒木氏宅）、徳王丸屋敷跡が知られる。正平21年（1366）在銘の陣屋敷五輪塔、大原五輪塔や、寺院跡も数多く知られている。

## 近世

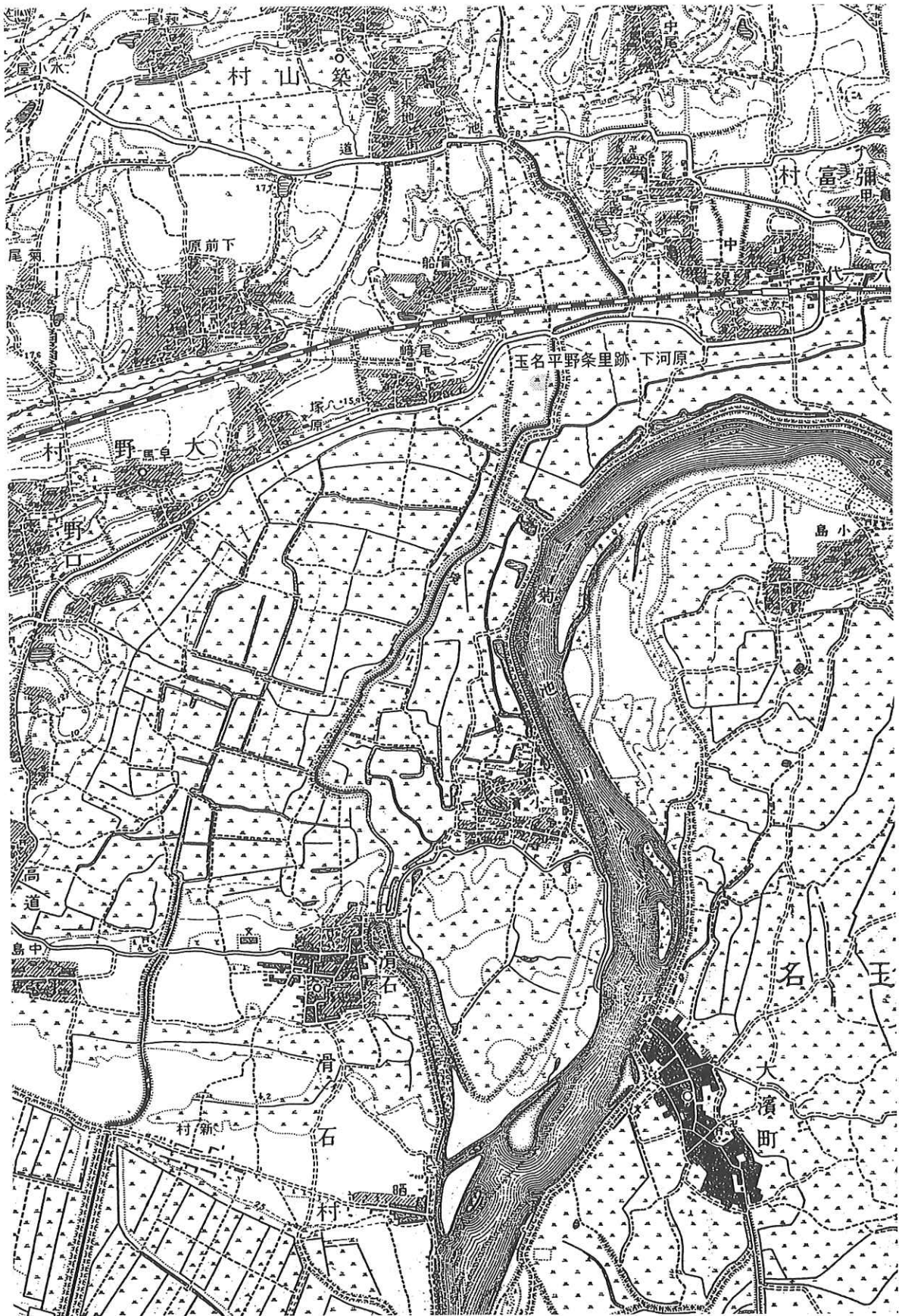
清正公の治水工事以来、海外貿易港として栄えた高瀬津（港）や永徳寺敷地跡の御蔵に貢納する、菊鹿盆地や、玉名平野の米の集積地として、高瀬周辺は経済の一中心となっていた。

菊池川は、川平田舟が上下し、物資輸送の大動脈であった。文化～天保（1800～1830）年頃、菊池川の川底が浅くなり、高瀬港へ大型船の出入は困難となり、下流の大浜港が外港として役割を果たしていた。大浜港の外には、文政 12（1829）年の開港と伝える長洲港、その後で、上・下沖洲境の新川港ができていった。

寛政 4（1792）年の雲仙普賢岳の大噴火によって打ち寄せた 3 度の大津波で、未曾有の犠牲となった多数の人々を弔うために、扇崎千人塚が、その当時につくられている。現在も、地元の人達によって犠牲者の供養が、営まれている。



第 1 図 玉名平野条里跡・下河原位置図



第2図 遺跡周辺地形図(「高瀬」2万分-1地形図、明治35年発行)



第3図 周辺遺跡分布図



第1表(1) 玉名平野条里跡・下河原 周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	キャアガラワラ貝塚	横島 外平	縄文	貝塚		縄文
2	ピナワラ貝塚	横島 外平	縄文	貝塚		縄文
3	外平貝塚	横島 外平	弥生・中世	貝塚		主に土師器
4	大園貝塚	大園 大園	弥生	貝塚		弥生土器・石斧
5	城ヶ崎貝塚	伊倉北方 五社下	弥生	貝塚		町北端舌状台地上、南裾一帯弥生貝層出土多量
6	玉名平野条里跡	玉名、迫間ほか	古代・中世	生産		
7	繁根木貝塚	繁根木 馬場	縄文	貝塚		八幡宮境内全域、町筋南側、JR線路
8	岩崎原	岩崎(通称岩崎原)	弥生～中世	包蔵地		玉名女子高構内全、弥生土器多量、住居跡
9	下立願寺	立願寺 西の段	縄文～中世	集落		単式壙棺、弥生土器片散布
10	玉名郡倉跡	立願寺 西の段	古代	包蔵地	市	礎石7個配列
11	玉名郡家跡	立願寺 石丸	古代	包蔵地		上立願寺部落北辺、布目瓦多量散布
12	山田山口	山田 山口	古墳～平安	包蔵地		土師器多量出土
13	高岡原	山田 高岡原	弥生・古墳	包蔵地		土師器・須恵器・弥生土器片散布
14	ホカンヤカタ	中	中世	包蔵地		
15	馬場遺跡	中	中世	包蔵地		
16	玉名高校々庭	中 楳林	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器包含、石斧も出土
17	南出	中 内田	弥生	包蔵地		弥生壙棺、合口壙棺。青磁碗、玉名高校蔵
18	田島	中 田島	古墳	包蔵地		瓦器3脚・碗・土師器片・開元通宝・布目瓦出土
19	春出	中 陣内	古墳	包蔵地		須恵器・土師器・弥生土器
20	古閑	築地 古閑	弥生～中世	包蔵地		合口壙9基出土、弥生土器散布、鉄器・弥生壙棺
21	築地東	築地 東	弥生	包蔵地		石蓋土坑
22	八段	築地 八段	古墳	包蔵地		土師器・須恵器少量
23	築地那木野	築地 那木野	古墳	包蔵地		須恵器・土師器類を包含する
24	狐ん路	築地 前畑	縄文～中世	包蔵地		平畑遺跡と一連
25	今見堂	築地 今見堂	古代・中世	包蔵地		土葬人骨1、五輪塔片、宋銭、青磁、土師器皿
26	南大門	築地 南大門	古代	埋葬		付近一帯弥生後晩期土器包含
27	浄光寺蓮華院境内	築地 南大門	中世	包蔵地		本堂地下約1.5m住居跡、弥生後期土器、蓮華遺跡
28	俊教坊跡	山田 上馬場	中世	寺社		宝篋印塔・三重塔・宝塔
29	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
30	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
31	玉名平野条里跡・下河原	野口 下河原	古代・中世	生産		県・町調査 水田跡 (中世・近世)
32	尾崎貝塚	野口 尾崎	縄文	貝塚		専大玉名高校庭、阿高式
33	尾崎	野口 尾崎	弥生後晩期	包蔵地		須恵器類、完形出土
34	貴船東	野口 貴船	弥生	包蔵地		弥生土器片の1群出土
35	貴船地下式土坑墓	野口 貴船	弥生	埋葬		1基発見
36	大原五輪塔	野口 大原	中世	塔碑		空風輪を失う、水輪に像あり
37	北尾崎	野口 北尾崎	弥生	包蔵地		弥生晩期土器・貨銭出土、A・B区
38	大原	野口 大原	古墳	包蔵地		住居跡4戸確認、箱式石棺につづく
39	大原箱式石棺群	野口 大原	古墳	埋葬		安山岩箱式石棺13出土、12移復元
40	貴船西	野口 貴船	弥生	包蔵地		弥生後晩期土器少量
41	下前原	下前原 正林	弥生	包蔵地		昭和32年発掘調査、鉄器をもつ
42	塚原	野口 塚原	弥生	埋葬		中期、須玖系3基
43	塚原箱式石棺群	野口 塚原	弥生	埋葬		弥生土器、須恵器少量
44	塚原石蓋土坑墓群	野口 塚原	弥生	埋葬		石蓋土、2基出土した
45	塚原古墳	野口 塚原	古墳	古墳		円墳、完形封土箱式石棺
46	築地次郎国秀館跡	下前原 中	中世	館跡		大野庄領主居住陣内屋敷と称される
47	浄幸寺跡	下前原 西	中世	寺院跡		薬師堂あり
48	下前原西	下前原 石町	古墳	包蔵地		須恵器片多数
49	年の神	野口 平	弥生後期	包蔵地		壙棺、住居跡、貝塚、年の神西平遺跡、年の神遺跡
50	年の神支石墓	野口 早馬	弥生	埋葬	町	2ヶ所、貝輪7個入り

第1表(2) 玉名平野条里跡・下河原 周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
51	年の神小児壘棺群	野口 北平	弥生	埋葬		合口壘形棺数基
52	年の神壘棺群(A)	野口 早馬	弥生中期	埋葬		大型3基
53	年の神壘棺群(B)	野口 早馬	弥生	埋葬		3個接合を中心とする
54	山下	山下 木佐貫	弥生	集落		完形多数出土
55	下野口	野口 西原	弥生	包蔵地		弥生土器類包含
56	下野口石蓋土坑墓群	野口 西原	弥生	埋葬		1基発見
57	年の神平	野口 平	弥生	住居跡		弥生後期竪穴住居址
58	山下前畑	山下 前畑	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器
59	中道	山下 天神木	弥生	包蔵地		米出土、弥生前期貝塚あり
60	荏司貝塚	山下 庄司	縄文中期	貝塚		阿高式
61	古閑原貝塚	山下 久々牟田	縄文中期	貝塚		炭化米、出土品多
62	高道城跡	高道 城内	古墳	城跡		本丸跡に天満宮を祭る、北側に水溝あり
63	弁財天古墳	高道 石橋	古墳	古墳	町	円墳、舟方石棺中に弁財天を祀る
64	イッチャンサン	高道 久々牟田	弥生	包蔵地		野辺田式土器多量出土
65	石橋	高道 石橋	弥生	集落		野辺田式土器包含、貝塚あり
66	藤光寺古墳	高道 大馬場	古墳	古墳		前方後円墳、前方部に天満宮あり
67	浜田貝塚	浜田 西原	縄文	貝塚		縄文土器片、石鏃出土
68	浜田西原古墳(参考地)	浜田 西原	古墳	古墳		石材を残す、古塔碑あり
69	浜田西原	浜田 西原	古墳	包蔵地		主に須恵器・土師器
70	幸長寺原	高道 幸長寺原	弥生後期	包蔵地		須恵器・土師器散布
71	山下西	山下 北原・久保	縄文	包蔵地		縄文後期以後
72	中土西	中土 西分・大跡	縄文	包蔵地		御領式中心
73	下村城	大野下 内野	中世	城跡		土塁、天土台、水溝の一部残す
74	中土西宮の前	中土 四郎丸	古墳	包蔵地		完形土師器2個
75	中土楢の尾	中土 楢ノ尾ほか	縄文	包蔵地		縄文後期～弥生後期
76	中土屋敷跡	中土 天神木	中世	屋敷跡		土塁、濠、中塚、現在消滅して 駐車場
77	岱明町総合グラウンド	中土 天神木	弥生	埋葬		壘棺・合口壘棺
78	松浦	庄山 松浦、中山	弥生	包蔵地		弥生後・晩期少量
79	旗布	庄山 旗布	奈良～平安	集落跡		青磁碗・土師器出土
80	陣館跡	三崎 陣 堂の前	中世	館跡		北に300mに上村城跡、五輪塔残片散在
81	陣の五輪塔	三崎 陣	塔碑	中世		五輪塔雑組、岱明町最古の在銘 正平21年(1366)
82	上村城跡	上 馬場原	城跡	中世		物見台、土塁、周溝に野樟を残す 五輪塔残片多数あり
83	徳王丸屋敷跡	古閑 古閑原	中世	屋敷跡		五輪・宝塔の残片散在、北側に空堀・土塁跡あり
84	古閑	古閑 西市井川、上 西松 手	包含地	縄文		磨製石斧数個・土器・石鏃
85	今泉	上 今泉 市井川	弥生期	包蔵地		有孔石包丁、土器多量
86	今泉古墳	上 今泉	古墳	古墳		円墳現在消滅
87	馬不向	開田 不馬向	住居跡	平安		青磁皿・土鈴・土師器出土
88	池田古墳	開田 池田	古墳	古墳		土人宝物埋蔵地といふはこのことか
89	院塚古墳跡	開田 京塚	古墳	古墳		前方後円墳、昭和39年除去、工場建設
90	塚山古墳(参考地)	開田 寺内	古墳	古墳		前方後円墳と思われる
91	西照寺古墳(参考地)	西照寺 迎田	古墳	古墳		現西照寺氏神、八幡社地全体
92	備中	西照寺 備中原	包蔵地	旧石器		ナイフ形尖頭器出土
93	中尾崎	大野下 中尾崎	弥生	包蔵地		弥生後期
94	目倉尾	大野下 目倉尾、神次郎丸	縄文	包蔵地		穀粒、山形連続押形文土器
95	上鍋	鍋 小路	縄文	包蔵地		縄文期・蛇紋岩半磨石器
96	鍋野中	鍋 中西、野中	古墳	包蔵地		土師器・須恵器土器片
97	扇崎要害の森	扇崎 明神尾	中世	屋敷跡		土塁・周溝をめぐらす、現荒木氏宅
98	扇崎千人塚	扇崎 鬼除	近世	墳墓		寛政4年弱死者の供養塔
99	扇崎	扇崎 本村	古墳	包蔵地		土師器・須恵器土器片
100	日嶽城跡	開田 小代	中世	城跡		大野氏の本城、天正9年頃落城
101	古城跡	開田 箱崎	中世	城跡		92mの山上、日嶽城の支城
102	腹赤貝塚	長洲町 腹赤新町	縄文	貝塚		押型文 轟式、阿高、御領、西平

## 第三章 調査の概要

### 1. 調査の方法と経過

調査は、一帯が盛土されることもあり、都市計画道路部分の面積 1,550 m<sup>2</sup>を行なった。調査地が低湿地遺跡であるから、安全性を高め円滑に進めるため調査区全体を止水鋼の矢板で囲む工事から実施した。矢板の工事は、平成 14 年 8 月 3 日～8 月 13 日までの期間に設置された。調査は 8 月 19 日より開始した。重機による表土除去ののち、浸透水を排水する排水溝と深掘して、水をためて排水する（釜場）を 2ヶ所設置した。調査区には、測量の基準となる調査用グリッド（区画）を 5m×5m で設置した。4 級基準点とメッシュ杭の作業は（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。グリッドは西から東へ 1～12 のローマ数字、北から南へ A～G のローマ字で表した。県文化課の調査区は、C、D、E-1～12 グリッド、岱明町の調査区は、A、B、F、G-1～12 グリッドと分割した。

調査区を分割しているが、県文化課の調査員の指導、協力を仰ぎながらの合同調査となった。土層観察（通路用ベルト）を残しながら、区画（5m×5m）ごとに人力で掘下げて層位を確認しながら調査を進めた。調査区で掘下げていった時に染み込んでくる水と雨水のために度々作業を中止し、水中ポンプを使って常に排水作業も続けなければならなかった。又、排土用にベルトコンベヤーを設置し、そこまで掘下げた水分を多く含む粘質土、砂を一輪車で運ぶ作業でもあった。釜場、排水溝、通路用ベルト、ベルトコンベヤー付近を除くため、実調査面積はさらに減少している。

本調査の段階で、調査予定の地層（地表下約 1m 付近）のさらに約 50cm～60cm 下の地層（排水用溝）から、弥生前期の土器片が出土した。この事から当初予定よりもっと下に掘下げる必要があると判断し、調査期間も、約 2ヶ月延長となった。近世の水田面と近代の水田面の稲株痕、足跡を確認した後、県調査区のトレンチ（試掘坑）から VII 層直上で流路が確認された。そこで、V・VI 層の地層は 30cm～40cm と深く、全調査区この 2 層を人力で掘下げるには、時間と労働力もかなりかかる。下位層の遺構を重視する観点から、重機で矢板際から届く範囲の町調査区部分の層を確認しながら、慎重に VII 層上面までの土層剥ぎを行なった。排水溝、釜場もさらに深掘りし、整地した。この 2 回目の土層剥ぎを行ないながら、県調査区の掘下げと精査を進めた。釜場から縄文の押型文土器 1 点を取り上げた。VII 層で、溝状遺構、土手状遺構、水田 2 枚を確認した。溝状遺構の埋土から、平安時代頃の土器片が、ごく少量出土した。

VIII 層では、小区画水田に伴うものと考えられる、木杭列を 2 列と単独の木杭を確認し、遺構出土遺物はない。

IX 層直上では、溝状遺構を確認し、調査区西側の IX 層から流木に混ざって杭状加工品、X 層から縄文、後晩期、弥生の土器片、石器も出始めた。そこで、西側を中心に掘下げ、精査を行なった。

XII 層直上の旧地形の比較的短期間に流れていた浅い流水の跡付近から、単独の杭 6 本と県調査区からも多数の杭が出土した。

XI、XII層から、縄文前期、中期、後晩期、弥生前期の土器片、石器が出土した。

遺構も少なく、遺構内出土遺物も溝状遺構からだけで、各遺構の時期を決定するのに非常に困難であった。又、遺物も縄文から近世までとかなり幅広く、各層の遺物も混在しての出土である。

遺構は、50分の1で実測図を作成し、杭列・単独の杭等は10分の1で作成した。出土した遺物は、層位ごとに取り上げ、調査時の写真撮影はモノクロ、カラーズライドによる撮影を行なった。

県文化課で、(株)古環境研究所に委託した自然科学分析結果の資料提供を得て、F-3 グリッドのIX層下位の層の木材の年代測定の分析と稲のプラント・オパール土壌分析については、抜粋して掲載している。

県文化課の協力を得て、現場作業員の方々の忍耐と笑顔に支えられ、平成15年2月28日に発掘調査を終了することができた。

## 2. 遺跡の基本層位

遺跡の基本層序は次のとおりである。

- I 層 表土、盛土
- II 層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)  
粒子は粗く、砂にやや近い。  
酸化鉄、マンガンを柱状に含む。  
現代の水田耕作土。
- IIIa 層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)  
粒子は粗く、締まりがある。  
IV層との層理面に沈殿層がみとめられるが層として分離できない。
- IIIb 層 灰黄色粘質土 (10YR4/2)  
粒子は細かく、しまりがある。  
粒状の酸化鉄、マンガンを少し含む。  
近代の稲株痕、足跡検出。(水田面)
- IIIc 層 にぶい黄橙色粗砂 (10YR7/3)  
IV層上面にみられる稲株痕等の埋土  
青磁、磁器(染付)を含む。
- IVa 層 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)  
粒子はきめ細かく、よく締まる。  
II層と同程度、柱状の酸化鉄を含む。  
マンガンを多く含む。  
直上は近世の水田面
- IVb 層 褐色粘質土 (7.5YR4/4)  
粒子はきめ細かく、よく締まる。
- IV a 層 直上の水田面からの酸化鉄  
沈殿層。
- V 層 褐灰色粘質土 (10YR4/1)  
粒子はきめ細かく、よく締まる。  
柱状の酸化鉄を少し含む。(IV層より少なめ)  
水田耕作土の可能性が有る。
- VIa 層 褐灰色シルト (7.5YR5/1)  
若干酸化鉄、マンガンが粒状に入る。  
稲株痕等がみられる。
- VIb 層 褐灰色細砂 (7.5YR5/1)  
若干酸化鉄が粒状に入り、炭化物多量に含む。  
黄橙色細砂 (10YR8/6) が混じる (流水によるもの)

I 層
II 層
IIIa 層
IIIb 層
IIIc 層
IVa 層
IVb 層
V 層
VIa 層
VIb 層
VIc 層
VIc 層
VI d 層
VII 層
VIII 層
IX 層
X 層
XI 層
XII 層

第4図 基本土層図

- VIc 層 灰色細砂層 (N5/)  
黄橙色細砂 (10YR 8/6) が混じる。(流水によるもの)
- VI d 層 灰色シルト (N4/)  
VI層の中で最も締まる  
稲株痕等が部分的にみられる。  
瓦器を含む。  
VIb～VI d は、比較的短期間に堆積したと思われる。
- VII層 灰白色シルト (N7/)  
黄橙色細砂 (10YR 8/6) が混じる。  
SD-01 から(須恵器、黒色土器、土錘)出土  
弥生の土器、須恵器、土師器(皿)、瓦器、白磁を含む。  
直上は、中世の水田面。
- VIII層 褐灰色シルト (7.5YR6/1)  
灰白色砂 (2.5GY8/1) を部分的に含む。(流水によるもの)  
縄文晩期、弥生の土器を含む。
- IX層 緑灰色シルト (5G8/1)  
下層で灰白色砂 (2.5GY8/1) を部分的に含む。(流水によるもの)  
カシ類の実や大小の流木がみられ、木製品を含む。  
土師器類が主体で、石器も含む。  
SD-02 検出。
- X層 灰黄色粗砂 (2.5Y7/2)  
下層に行くにつれ、砂が粗くなる。下層の粗砂は灰黄色 (10YR5/2)  
大規模な流水による堆積層。  
縄文後・晩期、弥生前期～後期の土器、磨石等を含む。
- XI層 灰白色細砂 (10YR8/1)  
流水による堆積層。  
縄文前期～後晩期、弥生前期の土器、石器を含む。
- XII層 暗緑灰色粘砂質土 (10G4/1)  
シルトベースで砂が混じる。  
木葉がみられる。  
縄文中期、後期の土器、石皿を含む。

## 第IV章 調査の成果

### 第1節 遺構と遺物

最下層（XII層）から上層への各層ごとの遺構、遺物の掲載とし、遺物は器種ごとに分けている。又、低湿地遺跡での遺物の量は少なく、流れ込みや水的作用による磨耗等のためか、小さなものも多い。本書には、実測しうるものについてのみ図化した。なお、遺物の計測値および観察結果については、「土器、木製品、石器の観察表」（第2表(1)～第4表）にまとめている。

#### 1. XII層遺構（第6図）

##### SW-01、02、03、04

F-1グリッドで、XII層から単独の杭4本を確認した。SW-01、02、03の確認水平レベルは、LH=2,400m、SW-04はLH=2,200mである。4本の杭、確認面からの最大深度は95cmを測る。SW-01、02、04は垂直、03はやや斜めの打ち込みである。

SW-01、02は、木取りや規格の比較的同じ大型の杭で、分布も列として並びそうであるが、間隔が1.40mとかなり離れている。又、同時期に打ち込まれ、流水の際に、増水、浸食されるおそれのある部分の補強に土中深く打ち込む必要があったと推定される。SW-03、04も、護岸のための杭と考えることができる。

XII層から縄文中期、後期の土器片が少量出土しているが、いずれも遺構からの出土遺物ではない。土器資料を伴わない事から時期分類は不明瞭であるが、IX層下位砂層の木材の年代値が2430±40年（BC770～440年）縄文晩期頃の測定結果がでていいる。この事から、杭4本の打ち込まれた時期は、弥生時代から古墳時代までの範囲内と考える事ができそうである。特に、SW-01、02の杭の年代測定の分析を将来に託すことにしたい。

#### 出土遺物（第7図）

001～004の加工具は、鉄製とも考えられるが、明確でない。

001、002は大型木の蜜柑割材の割杭あるいは板状杭である。001は上部を1部欠損し、杭先端部の木肌面を粗雑に鈍く削る。002の杭先端部は、欠損している。01、02も樹皮が残存している。001の樹種は、ツブラジイである。

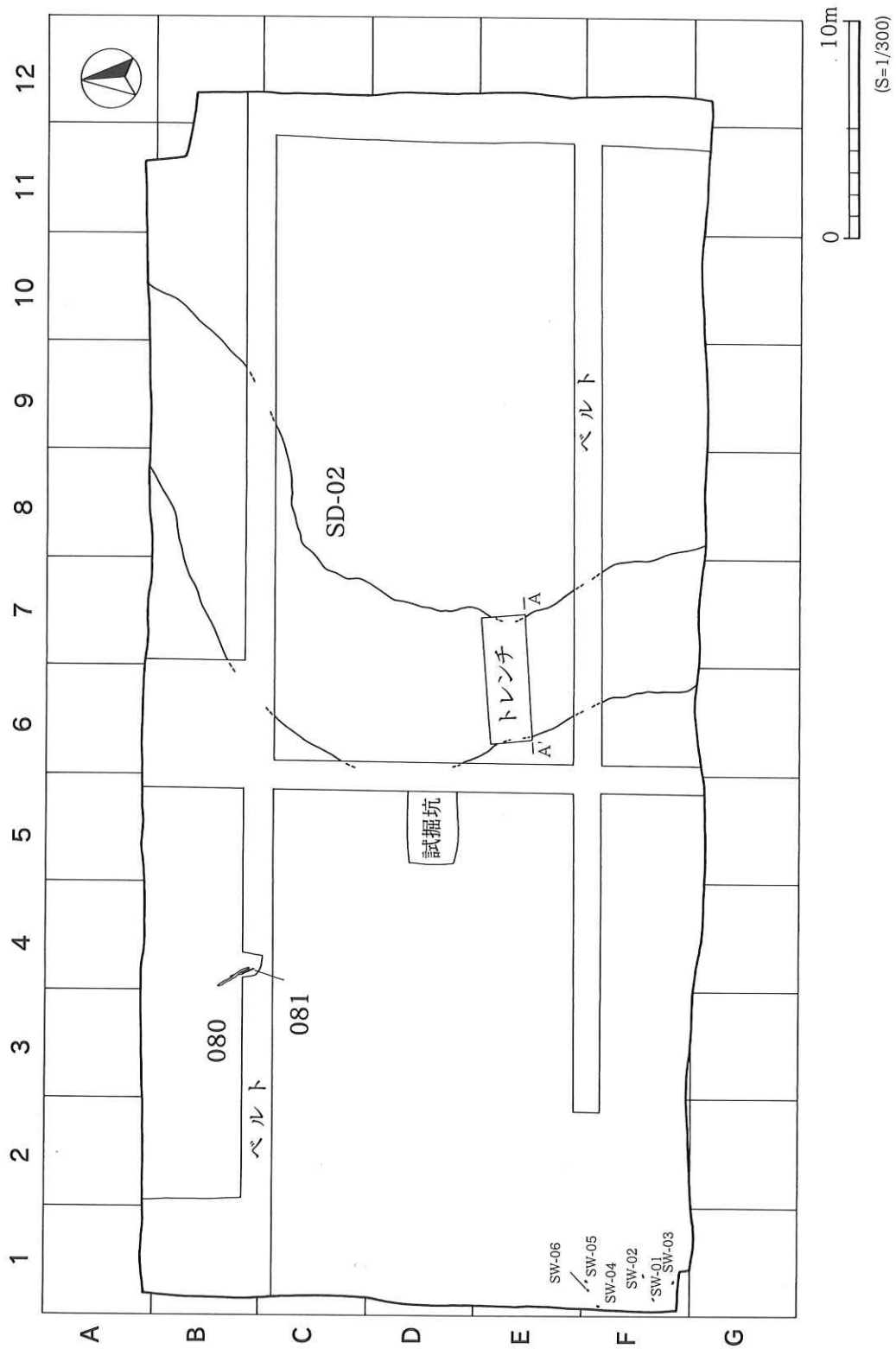
003は、丸杭で先端部の片面を単一に非常に鈍く削っている。杭上部は欠損している。

004は、蜜柑割材の割杭で杭上部、先端部ともに欠損している。

#### 2. XI層遺構

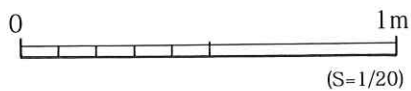
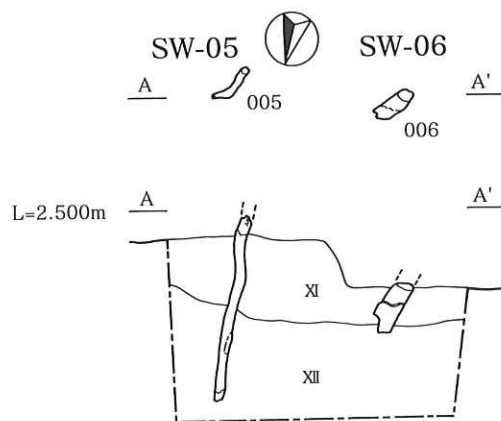
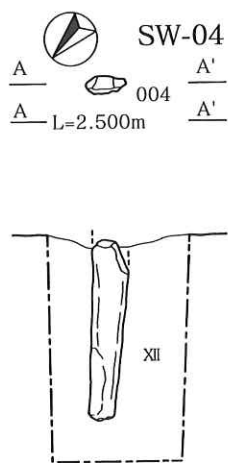
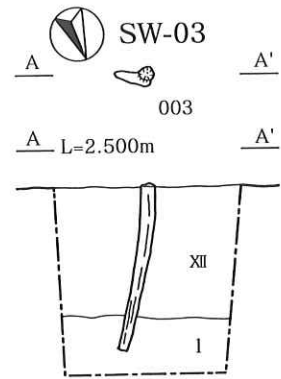
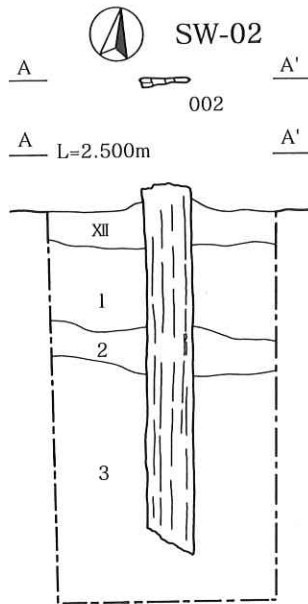
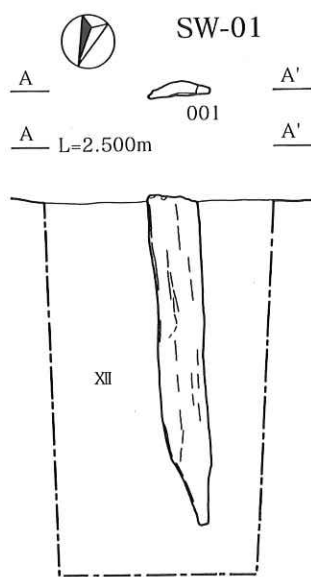
##### SW-05、06（第6図）

SW-05、06は、F-1グリッド南西側のSW-04にほぼ接する位置のXI層から杭2本を確認した。規格の違う丸材を使用し、分布の間隔も40cmを測りほぼ並んでいる。しかし、県の調査区の出土杭と列を配していないし、2本だけの杭では杭列と考えていない。



第5図 XII層、XI層、IX層遺構 配置図





SW-02.03 土層説明

1. 灰色粗砂(7.5Y 5/1) と灰色粘土(7.5Y 4/1)の混合層。
2. オリーブ黒砂質土(7.5Y 3/1)やや粘性を有し、わずかに粘土を含む。
3. オリーブ黒粘土 (7.5Y 3/1)2より粘性が強く、粗砂を少し含む。

第6図 XII層、XI層 SW-01~06 実測図

基本層序XI層からXII層への打ち込みで、杭2本の角度は東側にやや傾いている。護岸のための杭と考えられる。杭2本の打ち込みの時期は、明確ではないが、弥生から古墳時代までの範囲内と思われる。

### 出土遺物（第7図）

005、006の加工具は不明である。

005は丸杭で、土層の圧力を受けて折れ曲がっている。先端部のみ加工し、やや片面を数回粗雑に鈍く削る。

006は半載丸杭で、上部付近しか残っていない。

### 3. XII層、XI層の遺物（第8図～第9図）

007～012、014、015、017、018は、縄文時代中期に属すると考えられる深鉢型土器である。

013、016は、縄文時代後期前葉の深鉢型土器と思われる。

007、011、013、016、017は、XII層からの出土遺物である。

008、009、010、012、014、015、018は、XI層からの出土遺物である。

007は口縁部からの復元で、直口する口縁を呈している。内面の調整は指頭圧痕が残る。外面は口縁下位に、文様も幅広の指頭によると思われる横直線と曲線の凹線文と押点文を施す。口唇には、ヘラ状工具による沈線状の窪みが認められる。

008はやや肥厚する直口口縁で、口唇は、棒状工具による連続押圧で、波状の刻目の突起をもつ。入組文とヘラ書きした沈線文の組み合わせ文が施される。胎土中に多量の滑石が混入しているために、撫でるとつるつるした手触りがある。

009は胴部からやや内傾し直口する口縁をもつ。器面は、荒れが著しく磨耗しているため、明瞭ではないが、渦巻状の凹線文が施される。口唇は、棒状工具による押圧で波状となる。

010は、直立しながら弱く内傾する口縁をもつ。斜め方向の凹線文を施す。口唇は連続押圧で波状になっている。器面はナデ調整を施す。

011はやや肥厚する直口口縁をもつ。口縁やや下に短い曲線と平行凹線と押点文を施す。口唇やや内側に連続押圧で波状になる。

012はやや肥厚な直立した口縁をもつ。器面の荒れが著しく部分的に表面が剥離しているが、入組状の凹線文の痕跡が残る。口唇は、押圧で波状となる。

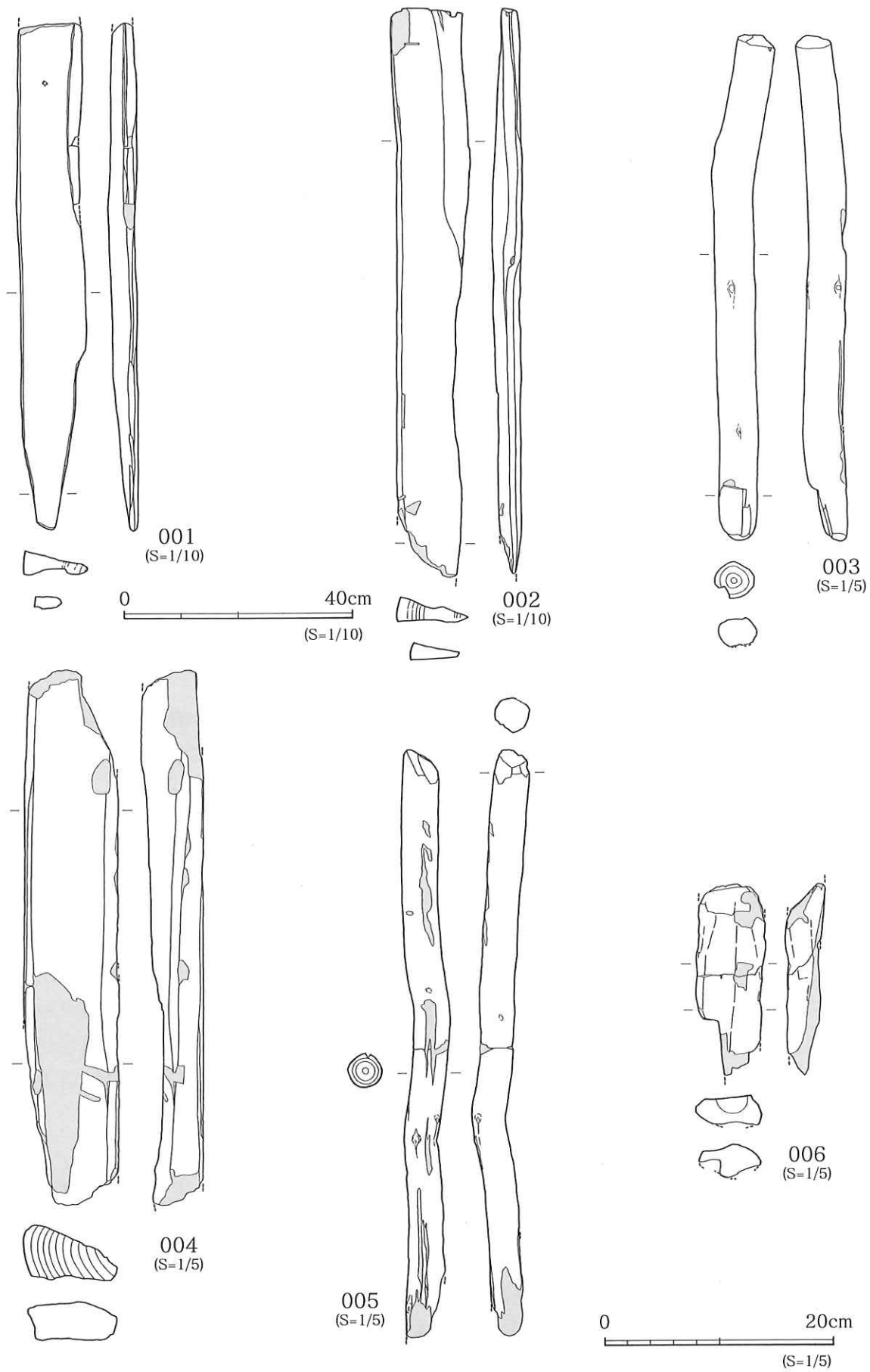
013は直立する口縁をもつ。粘土ヒモで波状突起を施す。器面は、粗いナデ調整を施している。014はやや外反する口縁をもつ。文様も入組状の凹線文を施している。

口唇はやや磨耗しているが、押圧で波状になっている。

015は直立する口縁をもつ。押点文を施し、口唇は押圧で波状になる。器面は粗いナデ調整を施している。

016、017は口縁部にやや近い胴部の破片と思われる。016は器面が荒れているが、細い丸棒状工具によるものと思われる。縦、横直線の沈線に近い凹線文と押点文が施される。

017は、入組状の浅い凹線文を施文する。胎土中の滑石混入は少量ではあるが、撫でると



第7图 SW-01~06出土 杭 実測図(001~006)

つるつるした手触りである。

018 は、胴部片でやや細い丸棒状工具による縦方向の深い凹線文が認められる。器面はナデ調整を施す。焼成も良く焼きしまっている。

019～023 は、XII 層から出土した深鉢型土器の底部である。

019、020 は、底部端が強く張り出す。019 の調整は、内面に横方向の粗いナデ、外面に指圧痕が残る。底面には、製作台として使った鯨の脊椎骨と見られる圧痕が認められる。阿高式に属すると思われる。

020 は底面が平底気味である。内外面に、粗いナデ調整を施す。

021、022 は外反する胴部からほぼ垂直に底部端へと連なる。021 の調整は、内面に粗いナデ、外面に縦方向のナデが施される。022 は底面が平底気味である。外面は指ナデ調整が施されるが、器面の荒れが著しく特に内面では表面がかなり剥落している。

023 は底部端が欠損している。内面に不定方向のナデ調整を施す。胎土中に少量の滑石が含まれている。底面に一部鯨の脊椎骨の圧痕が残されていると思うが、明瞭ではない。

#### 4. XI層、X層の遺物（第10図～第13図）

025～033 は、縄文時代後、晩期に属すると考えられる土器である。

024、026、027、031、032、035、036 はXI層からの出土遺物である。

025、028、029、030、033、034、037、038 はX層からの出土遺物である。

024、026～032 は深鉢型土器、025、033 は浅鉢型土器と思われる。

024 は、縄文前期（轟B式）系の深鉢型土器とみられる。口縁部の破片で、器面は荒れて磨耗しているが、口唇部には刻目が観察できる。口縁下位に平行する4条の隆起帯を貼り付けた後、断面三角に整えるために指によるつまみ痕跡が残されている。

内面の調整は、不明瞭である。

025 は、外に開く頸部から直立気味に立ち上がり、口縁部はやや肥厚している。口唇部は平坦面を呈し、口縁下位に3条の平行沈線を施文する。器面は幾分荒れているが内面に横方向のナデ調整を施している。

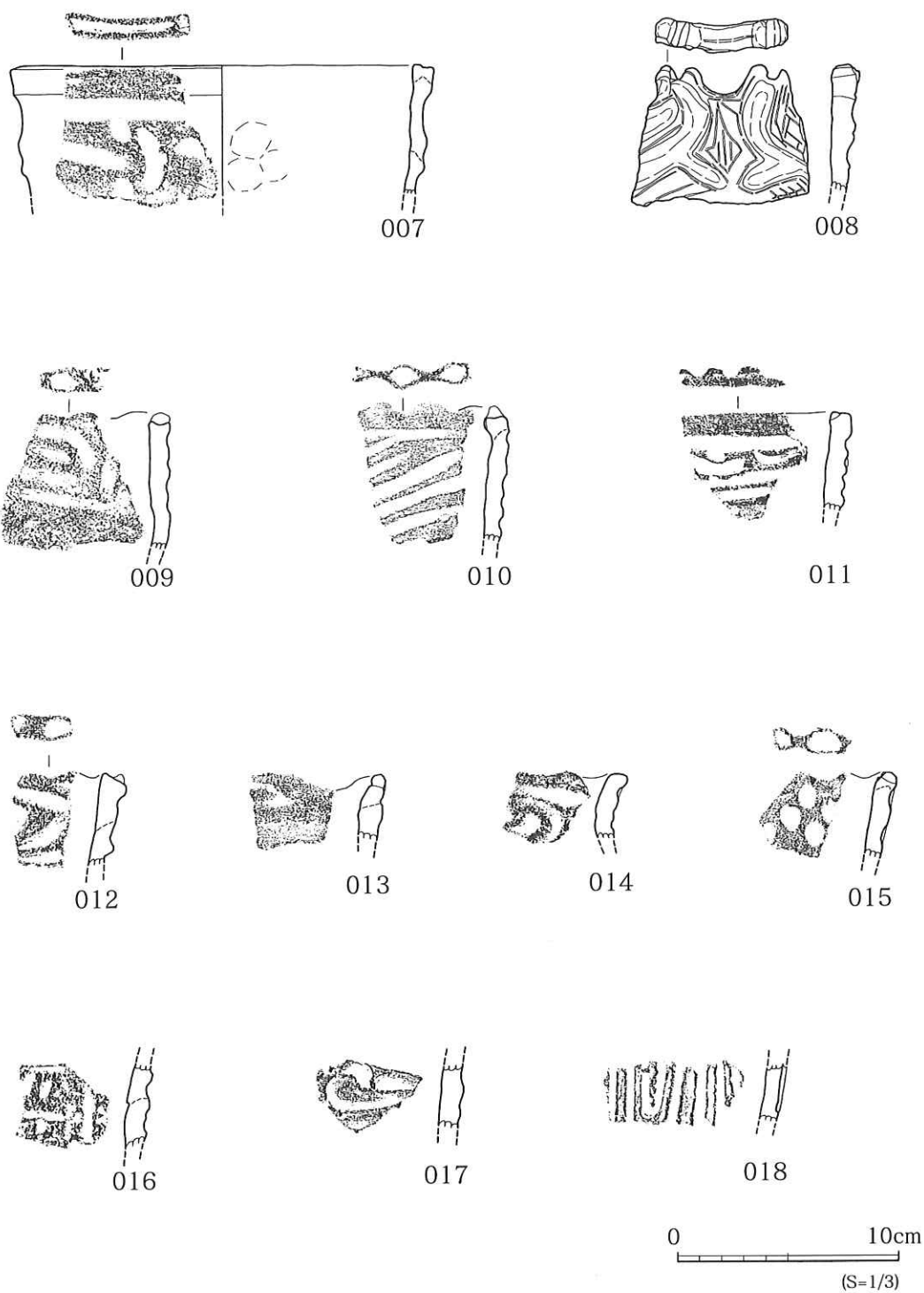
026 は、外反する頸部から内傾気味の幅の短い口縁部へと続き、口唇部は丸みをもつ。口縁直下には、やや粗い2条の平行沈線文を巡らせている。器面の調整は、内外面ともに、ヘラ磨きを施す。焼成は良好である。027、029、031、033 は、口縁部をやや肥厚させている。ほとんどが粗製である。内面は横方向のナデ調整、外面は横、斜め方向の粗い条痕調整を施している。027、029 は、二次的焼成を受けて煤も付着している。

028 は、口縁部が弱く外反する。内外面ともに粗いナデ調整を施している。

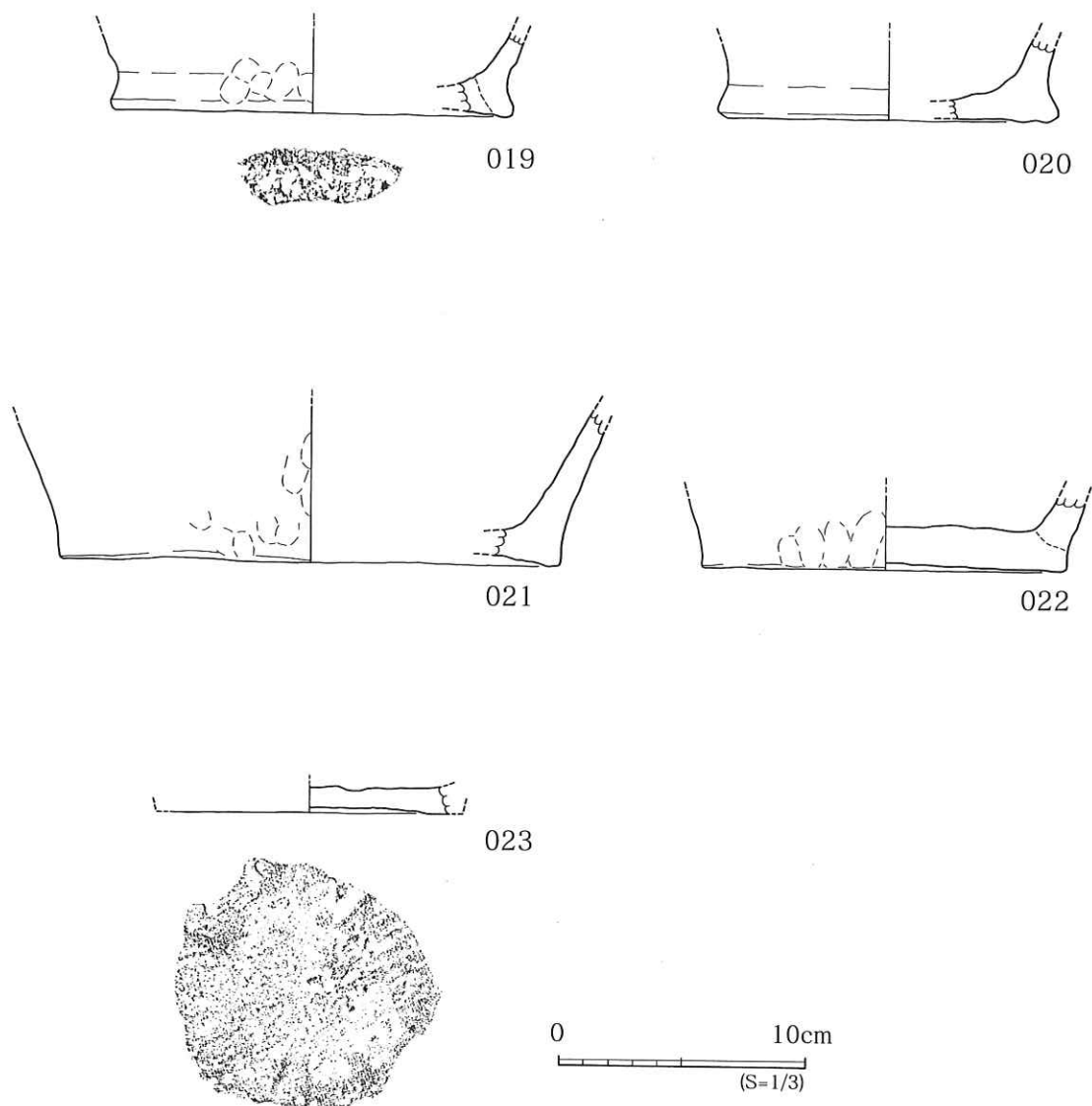
030 は、胴部の破片である。外面は、入組渦文状の沈線を施文し、丁寧なナデ調整を施している。内面は指頭圧痕が残る。

032 は、胴部の破片で、内面はナデ調整、外面は縦方向の細い条痕調整を施す。

034 は、深鉢形土器の底部で胴部が外反しほぼ垂直に底部端に連なる。底部端が弱く張出し、平底気味である。底部端に指頭圧痕が残る。035 は、鉢型土器の底部とみられる。



第8图 XII層、XI層出土 土器 実測図(007~018)



第9図 XII層出土 土器 実測図(019~023)

器面の荒れは激しく磨耗し、明確ではないが外面の底部端に磨きの痕跡とナデ調整を施した部分が一部認められる。

036 は、浅鉢の丸底の底部と思われる。調整は、内面にナデ後磨き、底面に不定方向のナデを施している。

037、038 は鉢型土器の底部と思われる。ともに低い高台状の底部をもち、立ち上がりが直線的である。2点とも表面が磨耗しており、調整は不明である。

039～044、049 は、縄文晩期（夜臼式）系と思われる。045～047 は、弥生前期（板付式）系と思われる。

043、044、045、046、047、048 は、XI層からの出土遺物である。

039、040、041、042、049 は、X層からの出土遺物である。

039、040、041、042 は、甕型土器である。

039 は、口縁部が弱く内傾する。口唇部は刻目を施さず、低い小突帯だけを貼り付けている。胴部中位には、直接刻目の突帯を巡らしている。内外面ともに、横方向の貝殻条痕による器面調整を施している。

040 は、口縁部が弱く外傾する。口唇部は磨耗しているために刻目が1部認められる。胴部も磨耗しているが、断面三角の突帯を貼り付けた後に刻目を施している。調整は、器面の荒れが著しいものの口唇下位に指頭圧痕が観察できる。

041 は胴部片である。断面三角の突帯を貼り付けて○字の刻目を施している。内外面ともに、斜め方向の貝殻条痕の調整で仕上げる。

042 は胴部片である。口縁部は、弱く屈曲すると思われる。胴部に直接刻目を施す。内面はナデ調整と外面は、炭化物付着しているために調整は不明瞭である。

043、044、045、046、047 は、壺型土器である。

043 は中型壺で、頸部は上にすぼまりながら、口縁部で僅かに外反し、口唇部は平坦面で、端部をつまみあげる。頸部と肩部の境に段を巡らせ、胴部は徐々に張り出していく。器面の調整は、内外面に条痕を施した後、横、斜め方向の丁寧なヘラ磨きで仕上げる。

044 は中型壺の胴部である。肩に段を巡らせ、胴部中位に復元最大径 28.2cm を測り、丸く膨らむ球形をもつ。短胴系と思われる。調整は内外面ともに、横、斜め方向の非常に丁寧なヘラ磨きで光沢がある。

045 は小型壺の口縁部で、口唇部が大きく外反し、端部も弱く屈曲している。胴部は徐々に大きく張り出すと思われる。内面の調整は、縦方向のナデと外面に横方向のナデを施す。

046、047 は頸部と胴部である。肩には 3.4 条の沈線を巡らし、胴部は丸く膨らむと思われる。046 は、内面を縦方向の指ナデ、外面を斜め方向のヘラ磨き調整を施す。

047 は内外面ともに、横、斜め方向のヘラ磨きを施す。

048 は、弥生の甕もしくは壺の胴部片と思われる。低い小突帯を 2 条貼り付けている。器面が荒れて磨耗しており、調整は不明瞭であるが外面に磨きの痕跡が一部認められる。

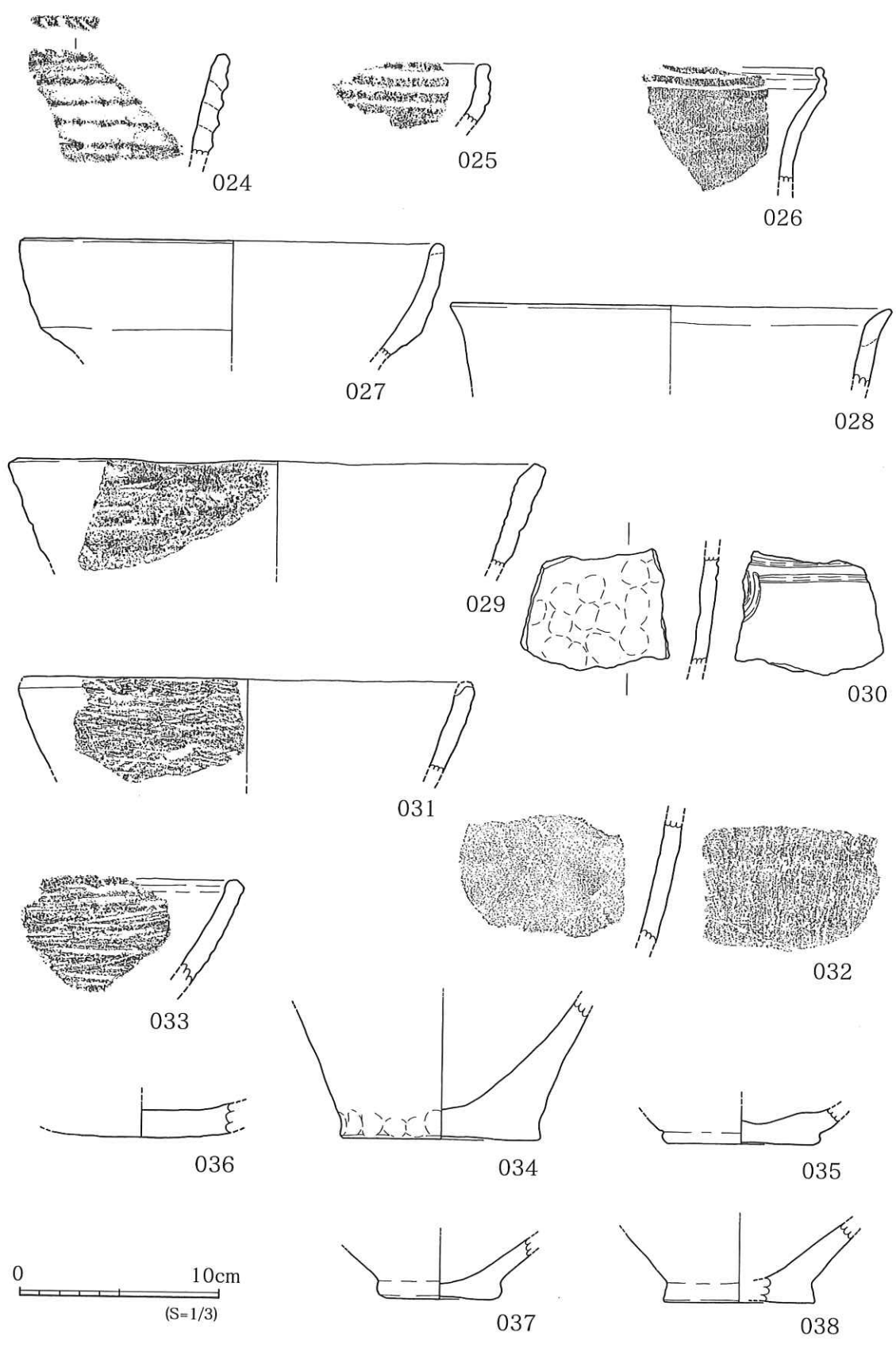
049 は浅鉢である。胴部から口縁部にかけて逆「く」字状を呈し、口縁端部と肩が外側に突帯状に張り出している。調整は、内外面に、横・斜め方向の緻密なヘラ磨きが施される。

050～058 は弥生前期の甕型土器と思われる。050、056～058 は板付式系当、051～055 は、亀ノ甲系当の様相がみられる。

050、053、054、055 はXI層からの出土遺物である。

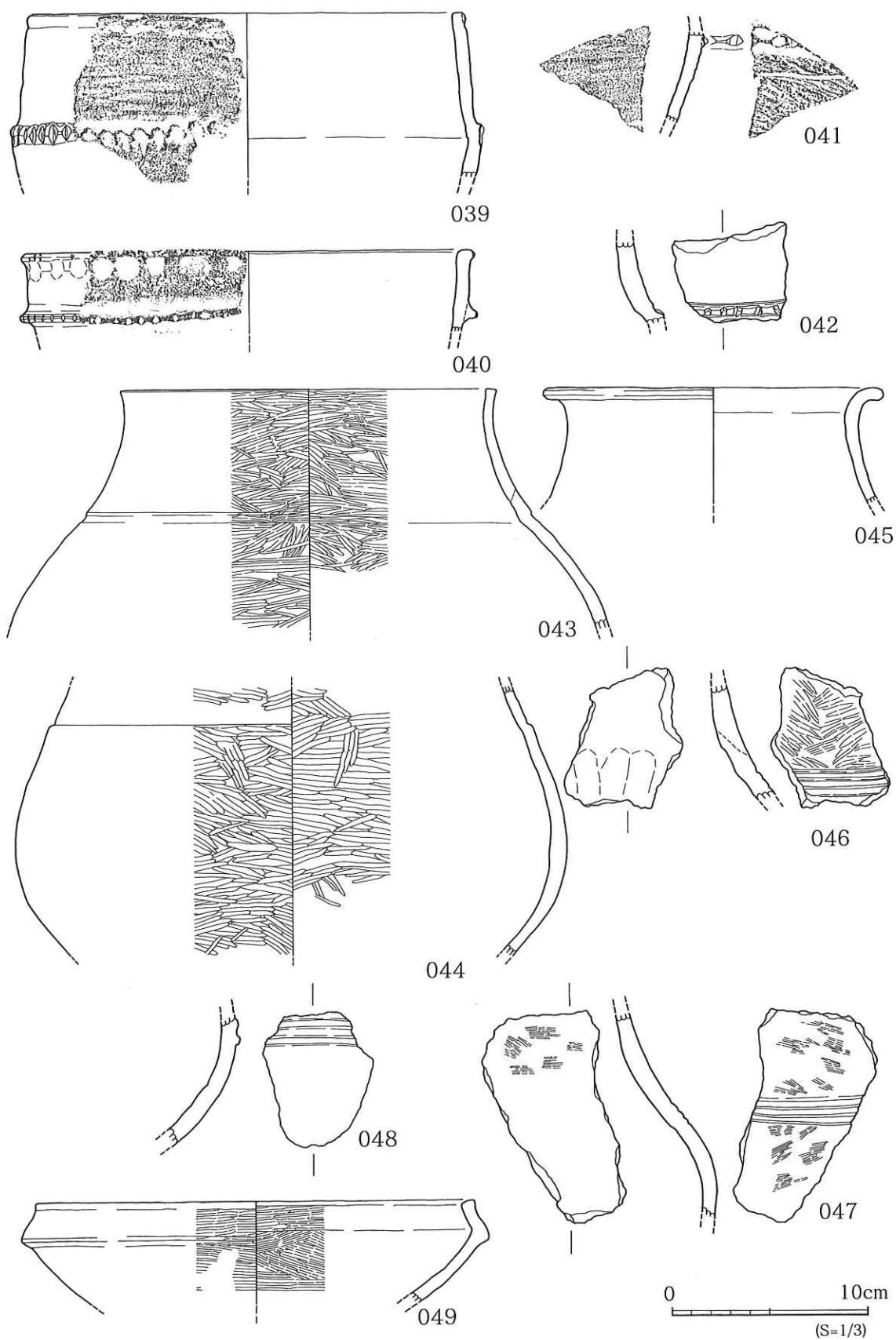
051、052、056、057、058 はX層からの出土遺物である。

050 は、外反する如意形状の口縁を呈し、突出した口唇部にV字の刻目を施している。胴部には、突帯を貼り付け、断面を三角形に整えた後V字の刻目を施す。器面の調整は内外面に磨耗と剥離が著しいために明確ではないが、内面に指頭圧痕と外面にナデ調整の痕跡が一部認めら



第10図 XI層、X層出土 土器 実測図(024~038)





第11图 XI層、X層出土 土器 実測図(039~049)

れる。

051、052 は、胴部の張りがなく直線的である。口唇部に接する位置と胴部に1条ずつ断面が三角やコの字状の突帯を貼り付けた後、V字もしくは○字の刻目を施している。口縁は、低い逆「L」字状を呈しているが、一部下がりぎみの部分がある。051 は、器面が荒れているが、内外面にナデ調整の痕跡が残る。052 の内面は、ナデ調整、外面は、炭化物が付着しているが、丁寧なナデ調整痕が観察される。

053 は、口縁部がほぼ直立に立ちあがる。口唇部に接する位置と胴部に2条のやや丸い突帯を貼り付けて、刻目を施している。器面の荒れが激しいために調整は不明である。054 は、口縁部が弱く屈曲し胴部の張りが少ない。口縁部がに接して細い突帯を貼り付けて、刻目を施していない。胴部は、刻目だけを巡らしている。器面の荒れが激しく磨滅しているために調整は不明である。

055、056 は胴部上位からの欠損のため、突帯の有無は不明である。

055 は、口縁部が弱く内傾すると思われ、低い逆「L」字状を呈している。口唇部に接する位置に断面コの字状の突帯を貼り付けて、刻目を施している。器面の荒れが激しく磨耗しているために調整は不明である。056 は、外反する如意形状の口縁部の口唇にV字の浅い刻目を施している。胴部は、少し張り出す傾向にあると思われる。内外面に横方向のナデ調整が施される。057 は、胴部から弱く外傾しながら、口縁部は緩やかに直立気味に立ち上がる。口唇部に接して、断面三角の突帯を貼り付けた後V字の刻目を施している。内面は、ナデ調整である。外面は、二次的焼成を受けてススと剥離で荒れているが、一部横ナデ調整痕が認められる。058 は胴部の張りがなく直線的で口唇部はやや平坦面を呈し、内側は低く突出する。つまみ上げ風に仕上げている。口唇部に接して、小さめの突帯を貼り付けて、○字の刻目を施している。内面は、横方向のナデ調整、外面はナデ調整を施す。突帯付近に煤が付着している。

059、063、068、069 は、XI層からの出土遺物である。

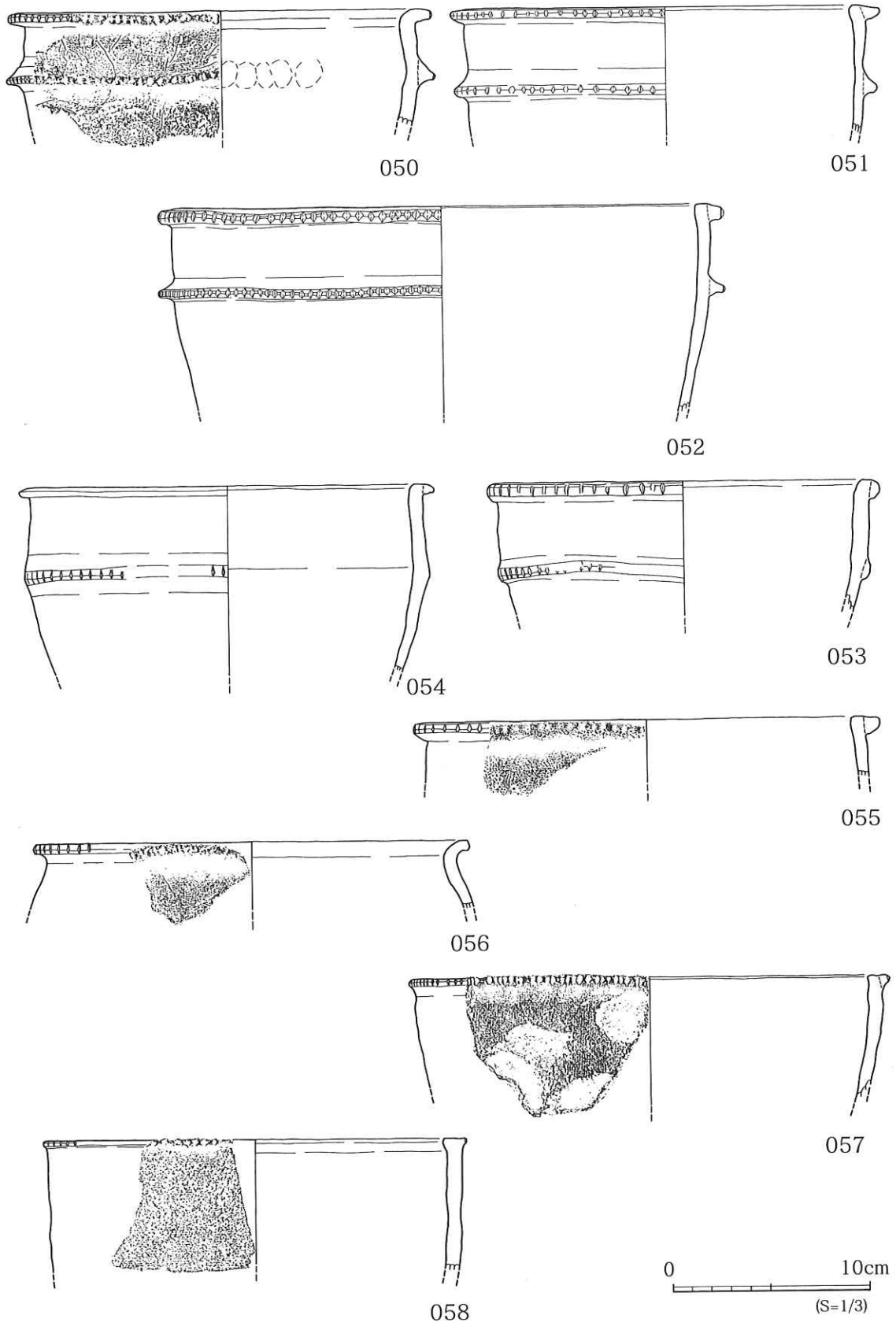
060、061、062、064、065、066、067 は、X層からの出土遺物である。

059 は弥生前期の板付式系の中型の壺形土器である。胴部は徐々に張り出していく長胴系と考えられる。肩には段があり、3条の沈線と重弧文を巡らせる。頸部は緩やかに上にすぼまりながら、口唇部で朝顔状に大きく外反するタイプである。内面は荒れが著しく磨耗しているため調整は不明であるが、口唇部付近に、横方向の磨きが一部観察できる。外面は横、斜め方向の非常に丁寧なヘラ磨きを施している。

060 は頸部から短く立ち上がり、弱く外傾する口縁部をもつ。短頸壺と思われる。内外面の調整は、横方向の粗いナデで仕上げる。

061 は、ほぼ全形が復元できた資料で、弥生の台付状の鉢形土器と思われる。体部は弱く丸みを帯び平底で底部端は外に張り出している。厚い底部から外に開きながら立ち上がる。内面は指頭圧痕が残り、外面は丁寧なナデ調整で仕上げる。

062 は弥生中期の黒髪式系の甕形土器である。口縁部外側の突帯が「U」字型に長く伸び、上面に窪みがあり内側に張り出しをもつ。内外面ともに横方向のナデ調整を施す。



第12図 XI層、X層出土 土器 実測図(050~058)

063 は体部の上半部と下半部の同一個体の弥生後期の鉢形土器である。口縁部は「く」字形を呈し、球形の胴部上位に復元最大径 19.4cm を測る。底部は平底である。内外面に横方向のナデ調整を施している。064 は弥生後期の甕形土器とみられる。甕の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部は張りが少なく、胴部下位付近に最大径をもつ。頸部で一度「く」の字状にくびれ、口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部をやや丸く仕上げる。調整は内面のヘラ削りがあまく、器壁が厚い。外面はハケ目後横方向のナデ調整を施す。

065、066、068、069 は、胴部が外反し、ほぼ垂直に底部端に連なる。底面の形状から 065、066 は平底で、068、069 はやや上げ底気味である。067 は、底部端がやや外に張り出している。平底とみられる。070 は、2 回目の土層剥ぎの際、深堀した F、G-1 グリッドの釜場からの一括資料である。縄文時代早期前半の押型文土器である。胴部片で外面に横方向の楕円文が施文される。内面は、磨耗しているために調整は不明である。

## 5. XII 層の遺物 (第 14 図)

071、072 は XII 層から出土した石器である。

071 は砥石の破片である。石材は砂岩製で片面に研磨痕が残り、やや窪みもみられ、かなり長く使用されていた可能性がある。

072 は砂岩製の石皿、台皿である。両面に研磨痕が残り、071 と同様にやや窪みも見られ長期間使用されていたと思われる。重さ 11.6kg を削り、遺跡内では大型の石製品である。縄文時代の遺物とみられる。

## 6. XI 層、X 層の遺物 (第 15 図～第 16 図)

074 は XI 層、073 は X 層から出土した縄文時代の石器である。

073 は、横型の石匙の未加工品として扱った。調整が一部に止まっており、剥片の剥離面と原石面をかなり残している。石材は安山岩製である。

074 は削器として扱った。剥片の側縁部に連続的に調整を加えて、刃部を作りだしている。全体的に素材からの剥離面を良く残している。石材は安山岩を利用している。

075～079 は、X 層から出土した石器である。

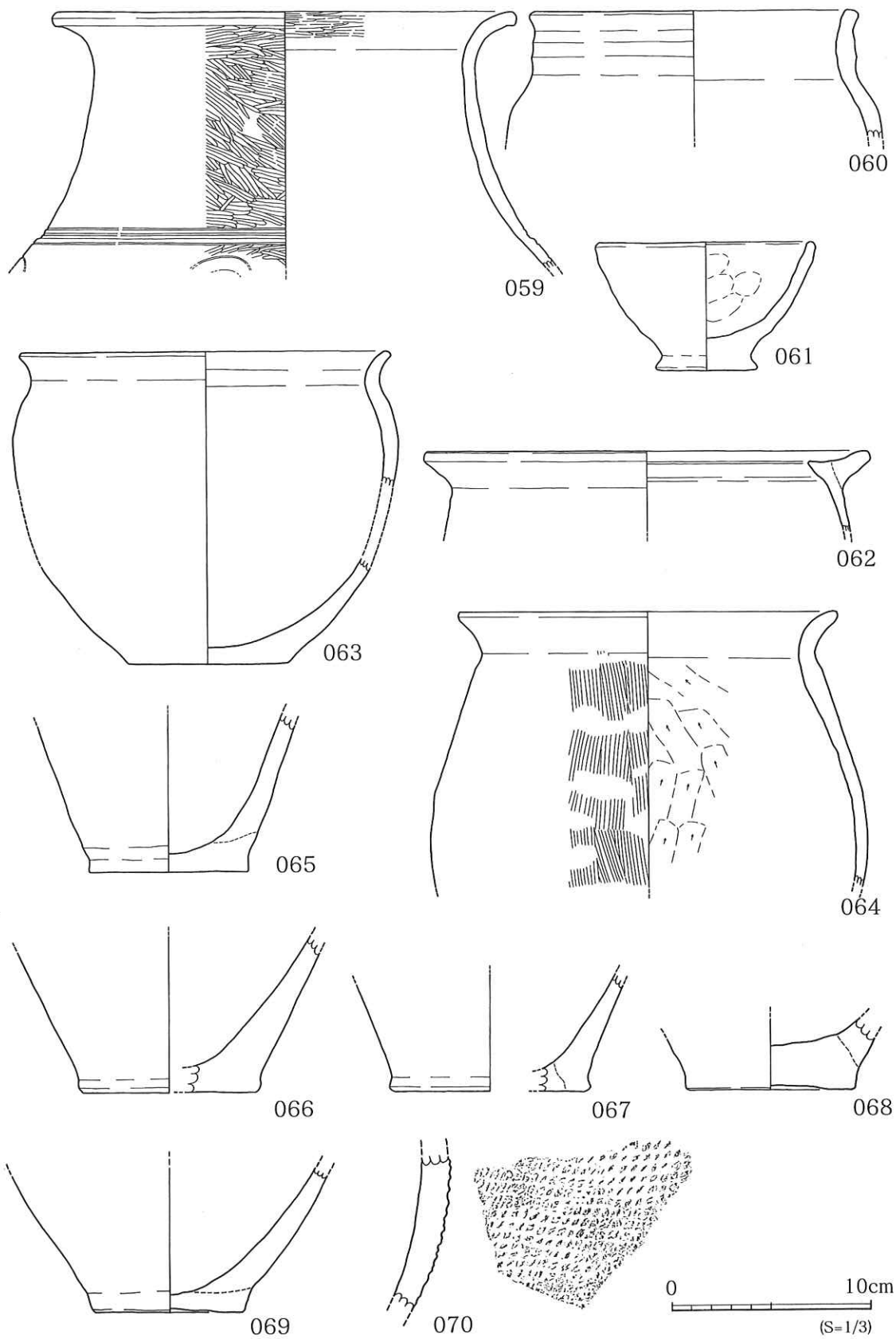
075～078 は縄文時代の遺物と思われる。075 は磨石である。窪みのある自然石の砂岩を利用したもので、片面に研磨痕跡が観察できる。片面の使用が多いようである。敲打痕はみられない。076、077、078 は磨石、敲石に利用されたもので、078 は下半部欠損している。

形状的には、3 点ともに楕円形を呈し、石材は砂岩製である。076 は片面、077、078 には両面に磨いた痕跡が残る。077、078 は側面に明確な敲打痕が認められる。077 はあまり明確ではないが、頭頂部に敲いた痕跡を 1 部残している。079 は平砥石の破片である。石材は砂岩製を利用している。片面と側面 1 部は、研磨によって表面がつるつるしている。

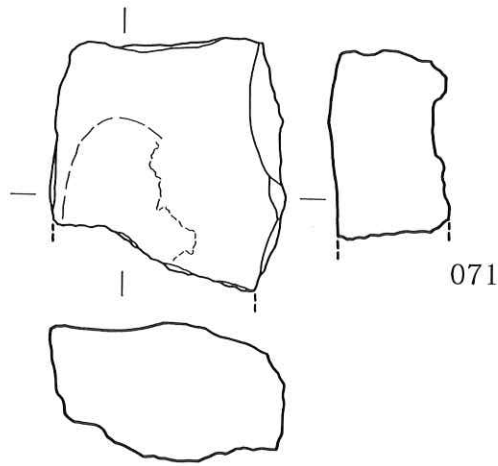
## 7. IX 層遺構 (第 17 図)

SD-02

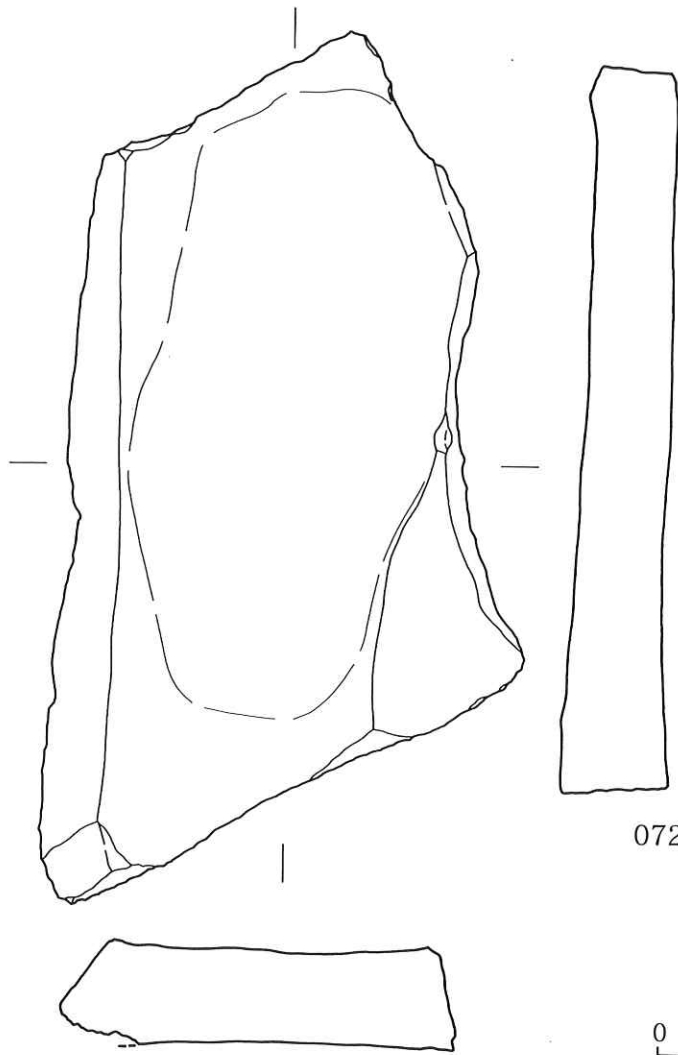
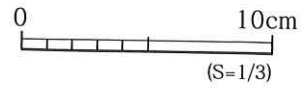
SD-02 は調査区東半分 IX 層直上で検出した。溝状遺構である。C-6、7 グリッド付近で大きく



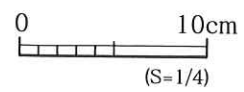
第13図 XI層、X層、釜場出土 土器 実測図(059~070)



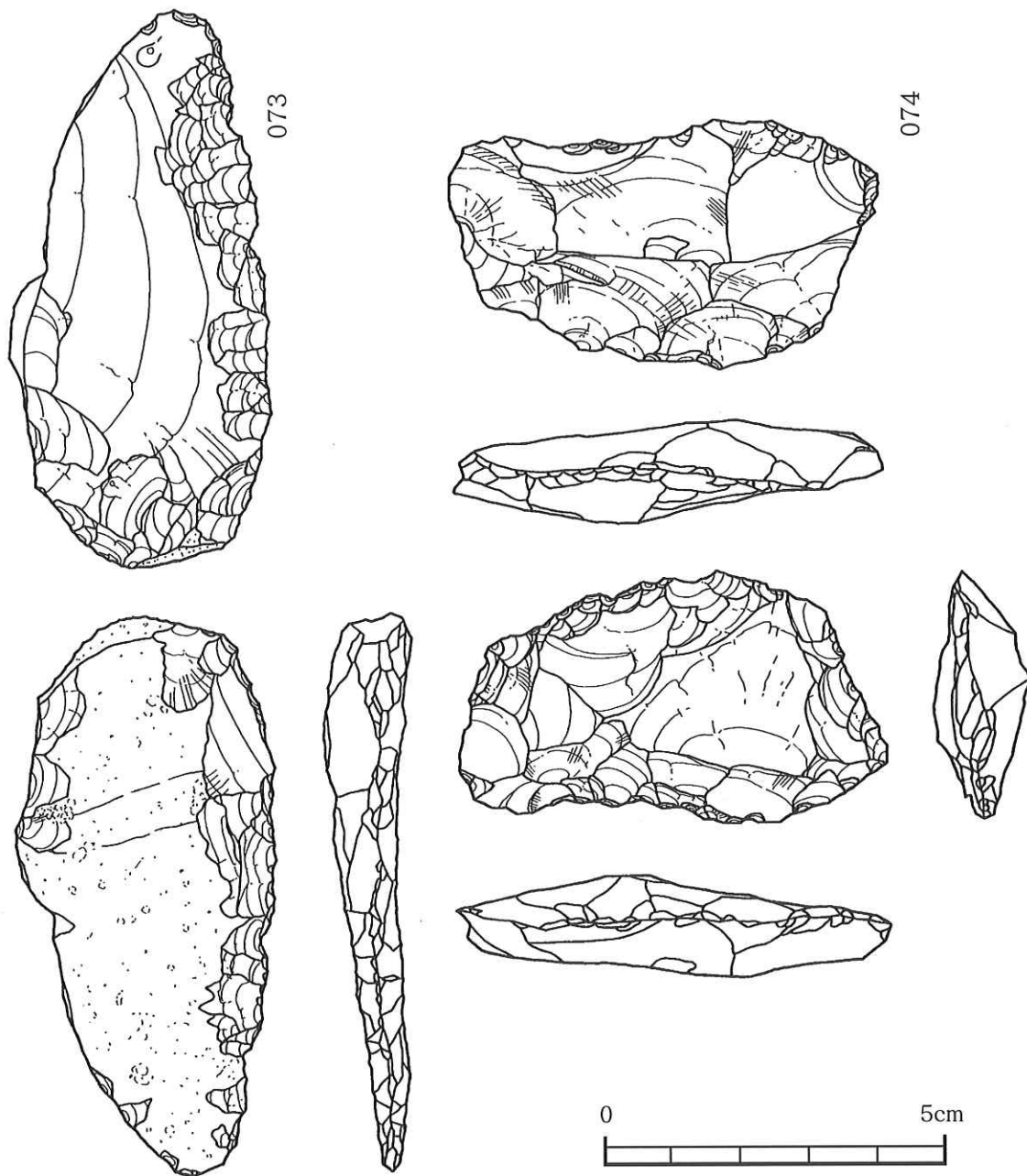
071



072



第14図 XII層出土 石器 実測図(071、072)



第15图 XI層、X層出土土器 実測図(073、074)

湾曲し、北東端、南端は排水溝で削平されている。この溝は、長さ 27m 以上を有し、IX 層はシルトと砂を含む混合層のため、人力での掘削では崩れやすく、下層からの水も予測される。それで、危険防止の観点から重機で掘削し 1ヶ所設定したトレンチの土層断面の確認とした。断面は、比較的緩やかな逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。溝幅 5.70m、深さ 1.20m を測る。埋土の状況も 6 層に区分される。トレンチから土師器片が少量出土している。埋没の時期は古墳時代頃と考えられる。

## 8. IX 層の遺物（第 18 図～第 19 図）

080、081 は B-4 グリッドのベルト側 IX 層から、流木に混ざった杭状加工品と考えられる丸材 2 点出土した。北西方向から流木によって押し流されたものと思われる。

080 は大型木で全長 168.3cm を測り、丸木芯持材である。二又に分かれた枝部分を残している事から、柱材にも利用された可能性がある。先端は少し欠損しているが、長いやや鋭角な削り痕がみられる。削り面には、一部数センチ幅の連続する削りが残る。加工具に手斧が使用されたとも考えられる。

081 は全長 127.0cm を測り、大型木の丸木芯持材の杭状加工品である。先端の加工は片面を数回削りやや鋭角にしている。加工具も 080 と同様に、手斧が考えられる。

082～086 は IX 層から出土した古墳時代の土師器の甕、壺である。

082 は甕の口縁部片である。頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は大きく外反する。口縁端部は平坦面に仕上げる。調整は、頸部内面のヘラ削りと横方向のナデの境に明瞭な稜を形成している。外面は、横方向のナデ調整を施し、煤も付着している。

083、084、085、086 は頸部のくびれが明瞭な壺である。083 は、口縁部を内湾気味に立ち上げ、端部を丸く仕上げる。口縁部内面に、横方向のナデ調整、胴部内面にヘラ削りを施す。外面は横方向のナデ調整が残る。084 は僅かに外湾しながらもほぼ直線気味に立ちあがる口縁をもち、端部を丸く仕上げる。胴部は大きく球形状に膨らみ、胴部中位付近に最大径をもち、器壁がやや薄い。口縁部内面にハケ目後ナデ調整、頸部から胴部にかけてヘラ削り後ハケ目調整を施している。外面はハケ目後ナデ調整で仕上げる。

085 は、口縁部に僅かに段を有し、やや外反しながら立ち上がり口縁端部を内側につまみ上げている。内面はヘラ削り、外面は横方向のナデ調整を施している。

全体的に丁寧なつくりである。

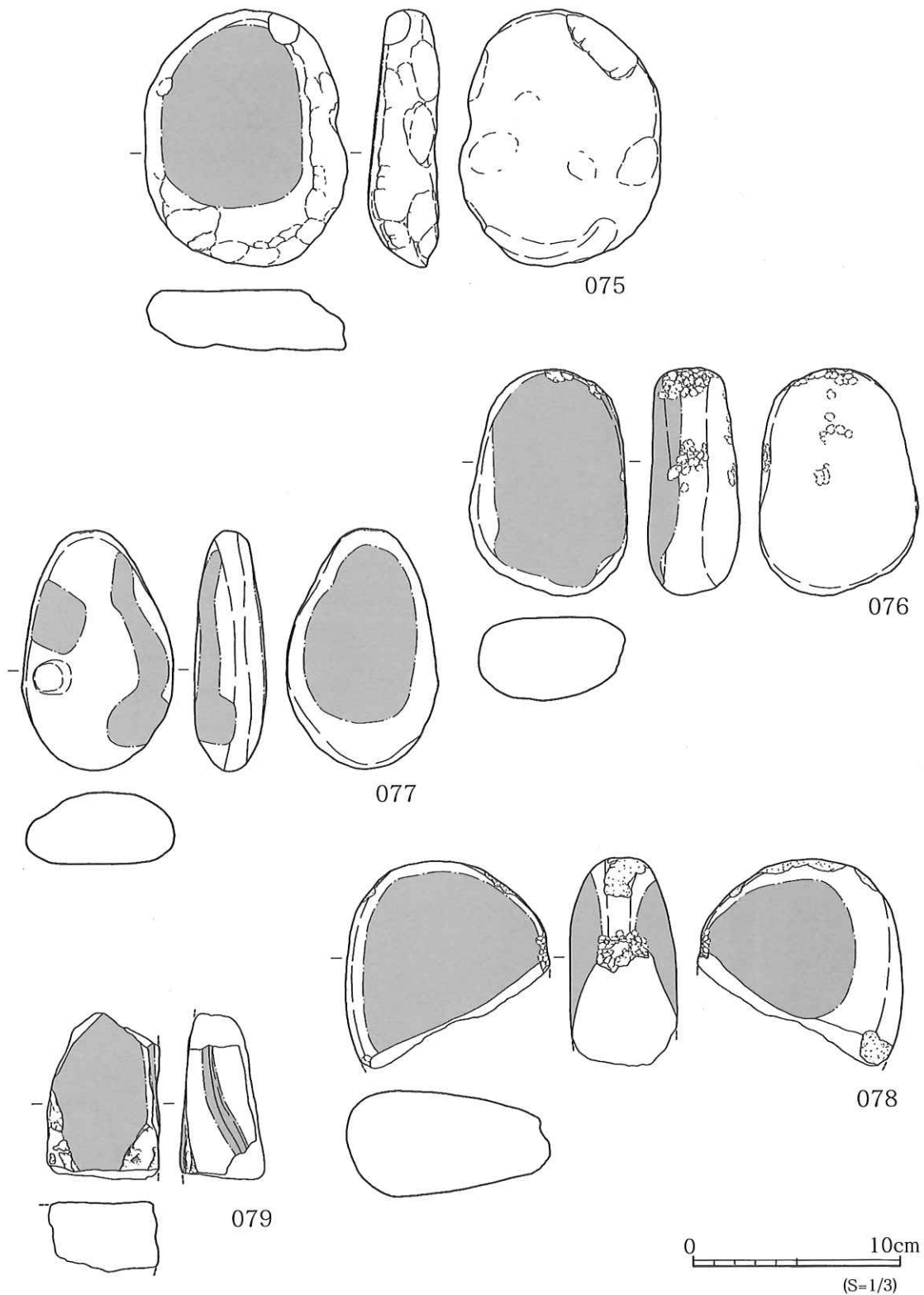
086 は口縁端部を上方につまみ上げ、くびれ部の内側は明瞭に稜をなし、胴部の張りが小さい。口縁部内部にハケ目後ナデ調整、外側には横方向のナデ調整で仕上げる。

087、088 は、IX 層から出土した縄文時代の石器（礫器）である。

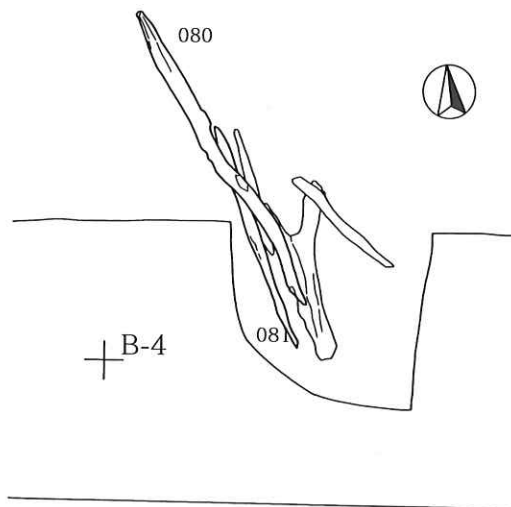
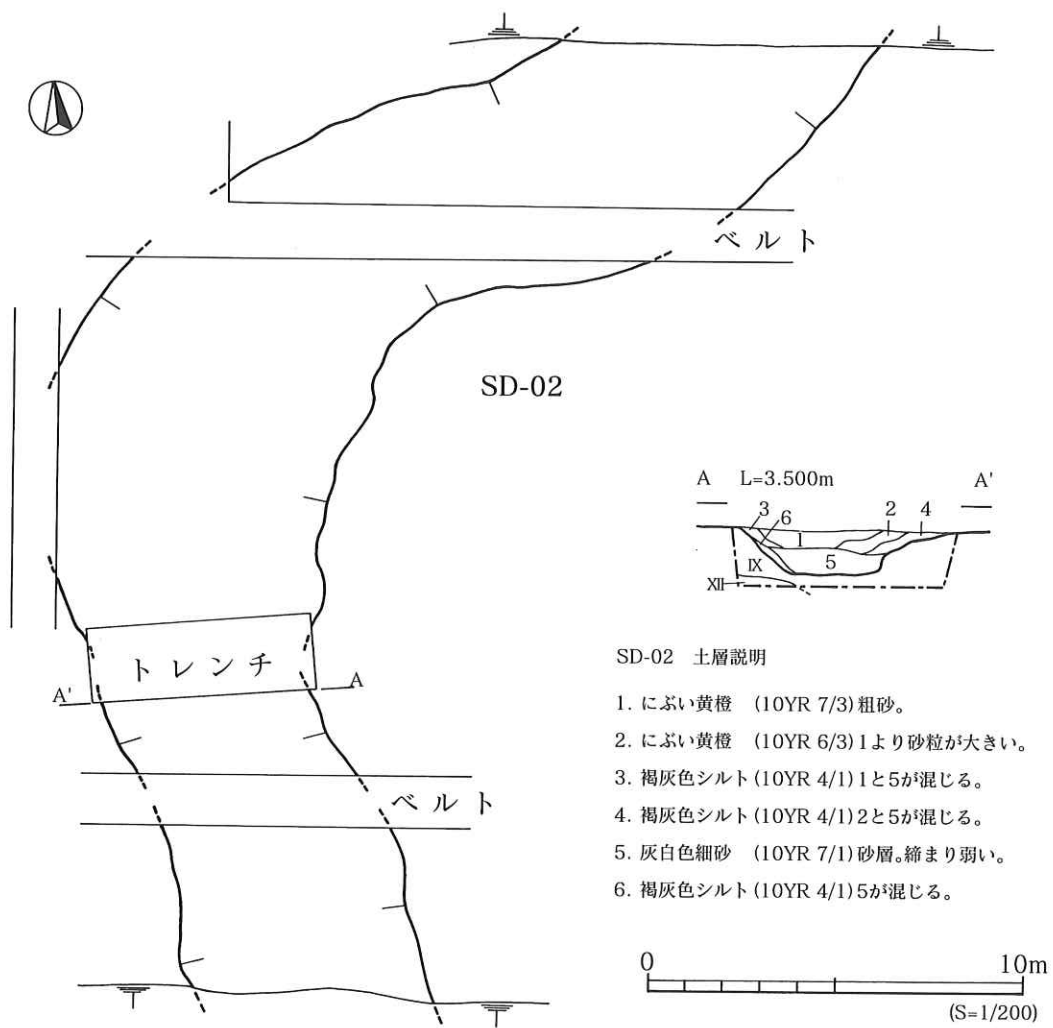
087 は、双頭型あるいは靴型を有し、扁平な自然礫を利用して粗雑な調整加工を施している。二辺の頂部の縁周辺は、敲打痕によって潰れている。

088 は、三角型の扁平な礫を利用して、片面と縁周辺 1 部に粗い調整加工を施している。三角の突出した頂部に敲打痕が認められる。

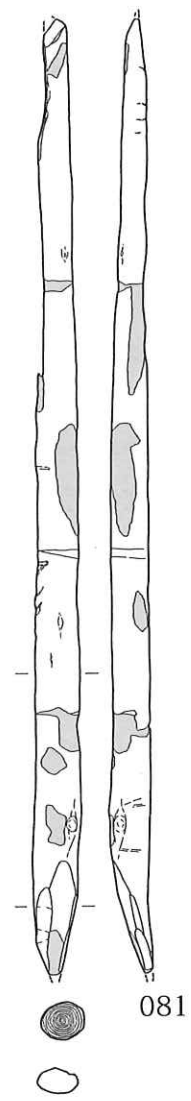
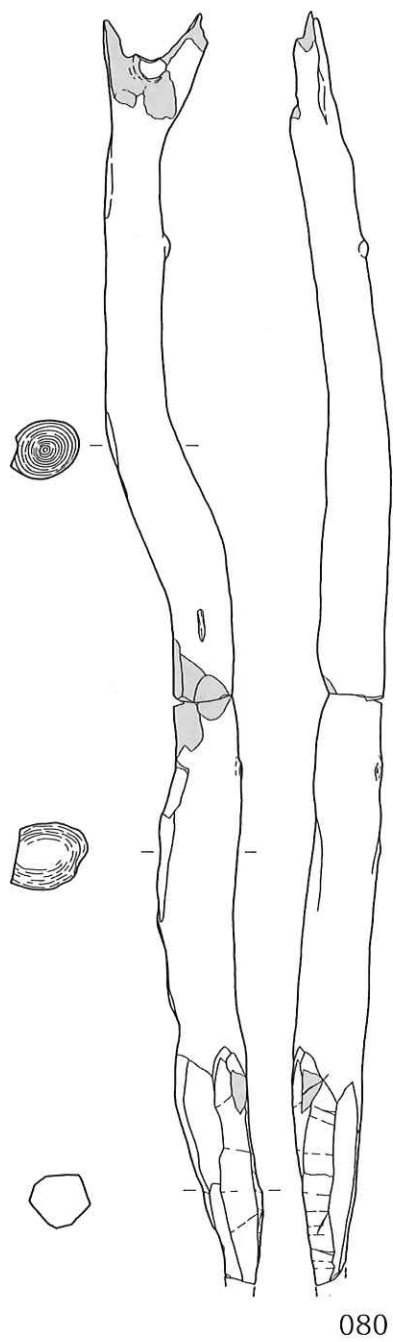




第16図 X層出土 石器 実測図(075~079)



第17図 IX層 SD-02、流木(木製品)実測図



0 10cm  
(S=1/10)

第18図 IX層出土 木製品 実測図(080・081)

## 9. VIII層遺構（第21図・第25図）

SX-04、SX-05、SW-07は、VIII層の遺構である。

SX-04は、調査区北西隅B-2グリッドのVIII層で検出した。2列の木杭列である。左右2列の杭は全25本出土し、分布幅は8cm～22cmを測り、北東方向に延びている。この杭列から約12m、東側にSX-05が、約24m東側にSD-01が位置している。右側杭列は、全長4.23m、杭20本で構成され、ほぼ垂直に打ち込まれる。小杭3本は、多少のばらつきがあるが、その他の杭17本は、5cm～24cmの等間隔とやや密に打ち並べる。横木や横板は出土していない。

検出面からの水平レベルは3.10mで最大深度は62cmを測り、最深部、基本層序IX層まで打ち込む。やや長めの杭3本を杭列中の要位置に打ち込まれている。

左側杭列は、全長2.15mで杭5本の間隔はかなりばらつきがあり、斜めに打ち込まれる。検出面からの水平レベルは3.10cmで最大深度も20cmを測り、IX層までの打ち込みである。右側杭列に比べ深度も深く、杭5本の痛みも激しく残りの状況も良くない。VIII層、IX層に砂を含むことから、頻りに水が流れていた事がわかる。専門員の所見では、洪水でどこかの時期に左右2列の杭を打ち込んだ後、杭頭が出てきて乾燥、縮収して崩壊し、流水の圧力を受けて杭が傾き、杭が流された時期がある。元の杭の規格も1m以上あって深く打ち込んでいた可能性があると教示している。杭の打ち込み時期が、VIII層より1・2層上面からとすれば、強く肯定するだけの資料はないが、SD-01と同時期かやや後の時期とも考えられるが、中世期に入る時期と言えよう。

B-2グリッドの各層のプラント・オパール分析結果で、VIII層も水田であることを強く支持している。

このことから、2列の杭列は水はけが悪く柔らかい土壌の状態のために、畦畔構築時に芯材を利用して、畦畔の盛土流出崩壊を防ぐ小区画の水田に伴う畦畔に利用された可能性がある。又道として利用された杭列と推定することもできよう。

## 出土遺物（第22図～第24図）

SX-04全25点のうち実測に耐えられる杭15点を図化した。杭15点全て杭上部は崩壊及び欠損している。

096は割杭で、その他の杭は全て芯持材の丸杭である。杭5点の樹種同定ではあるが、そのほとんどが照葉樹を利用している。加工部も不明瞭であるが、鉋などが考えられる。089は先端部を欠損している。

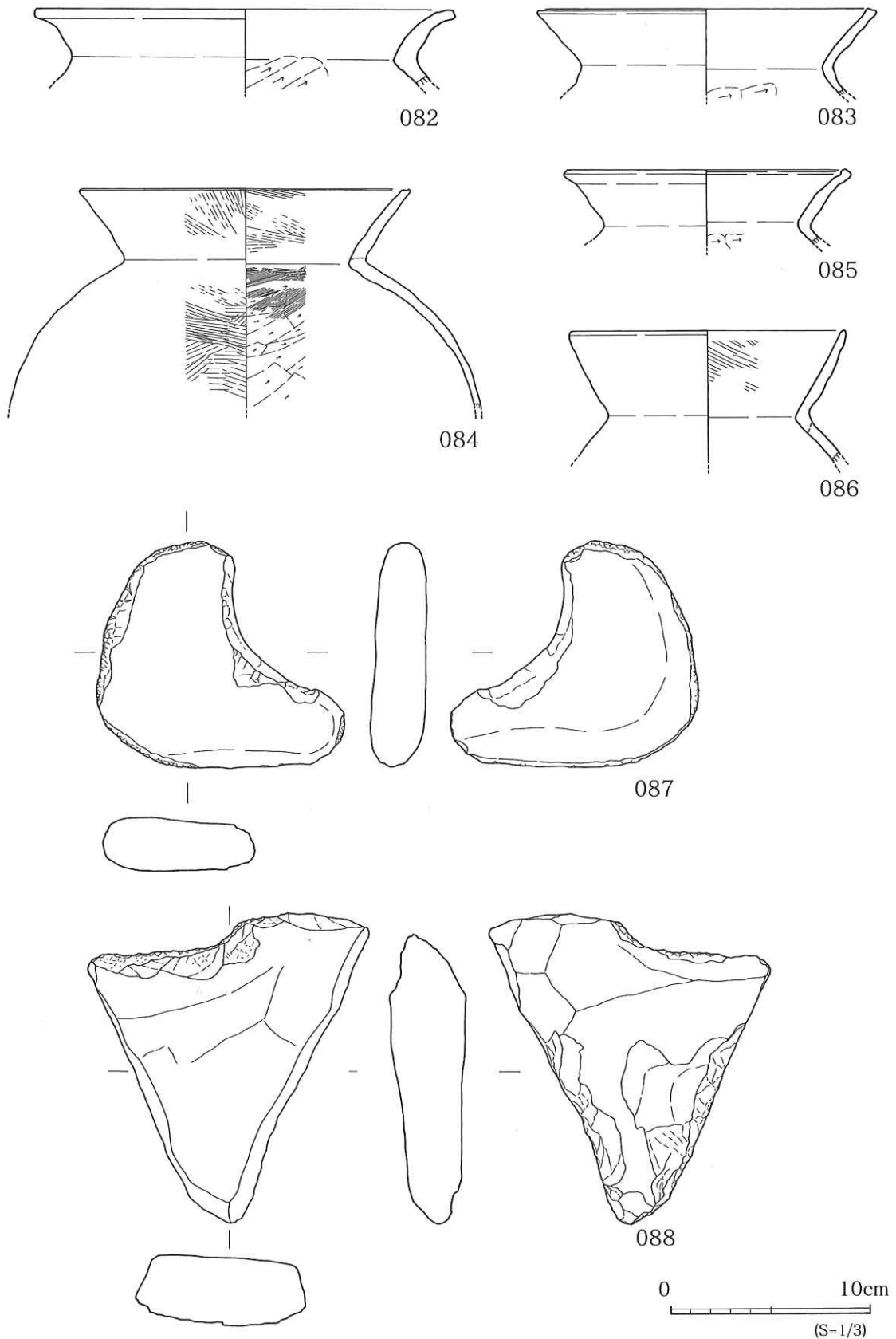
090、091は、粗雑な削りで先端部をやや鋭角に削り出している。091の樹種は散孔材である。092、094は同一の削り面に数回にわたる短い削り幅の粗い痕跡が認められる。

093は単純な削り痕を残し、先端部をやや鋭角にしている。

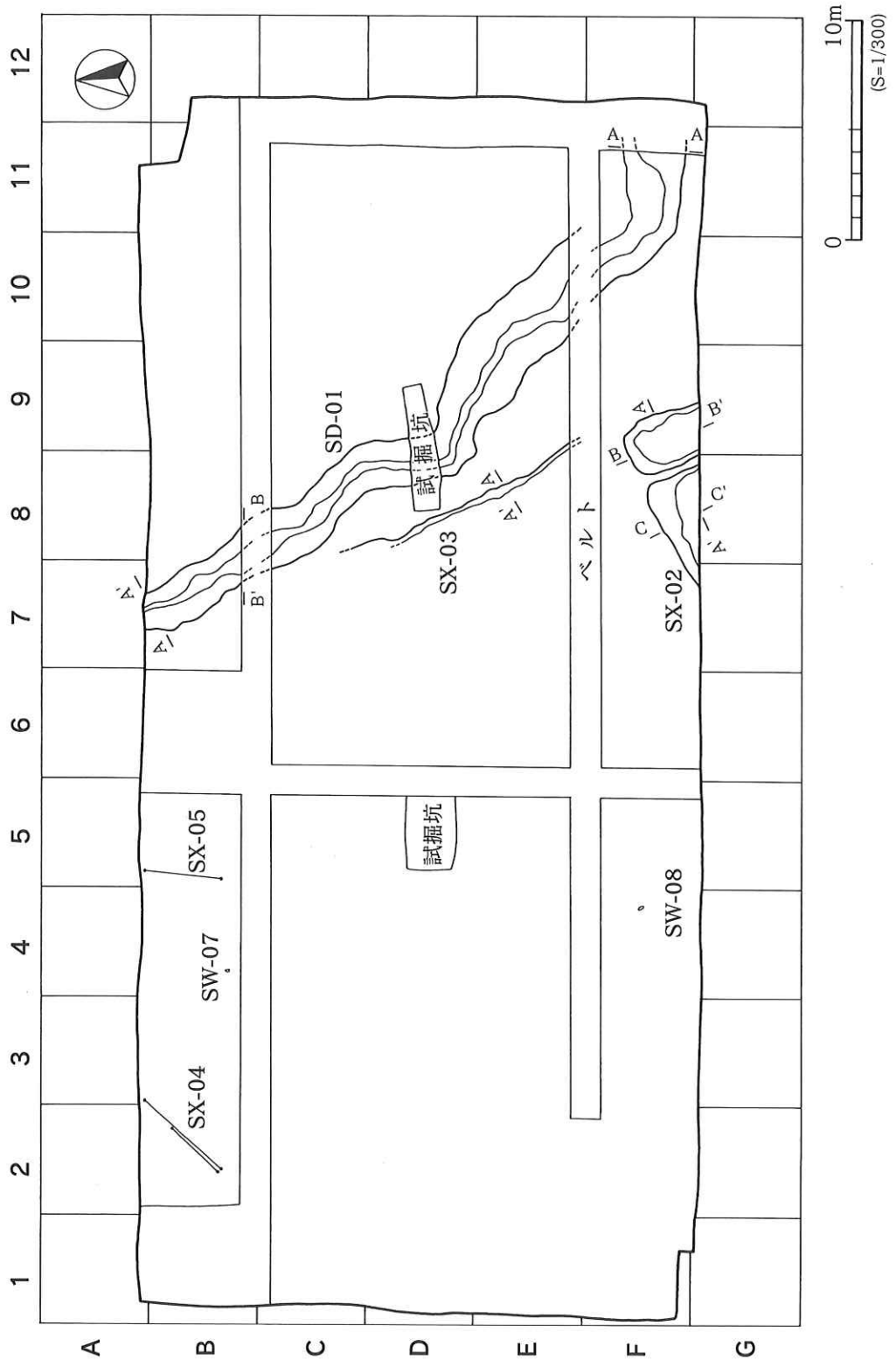
095はやや太めの杭で、単純な削り痕を残し、先端部を少し欠損している。樹皮も残存している。樹種はコナラ属クヌギ節である。

096は割材利用して単一に削り鋭角に先端部を加工している。

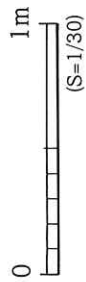
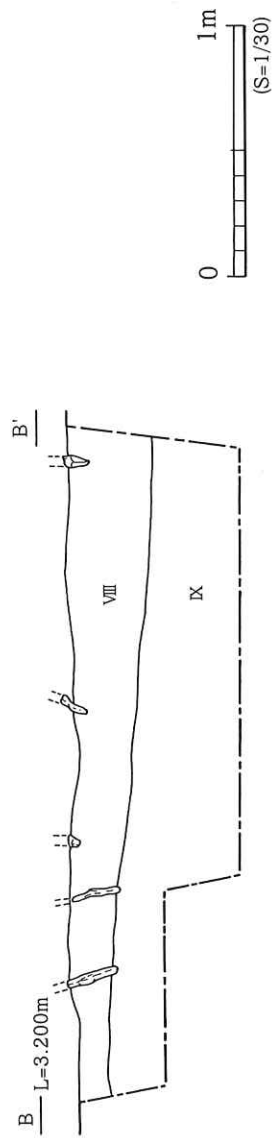
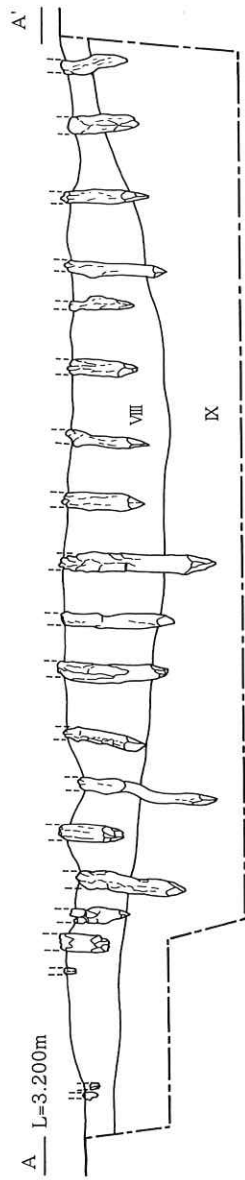
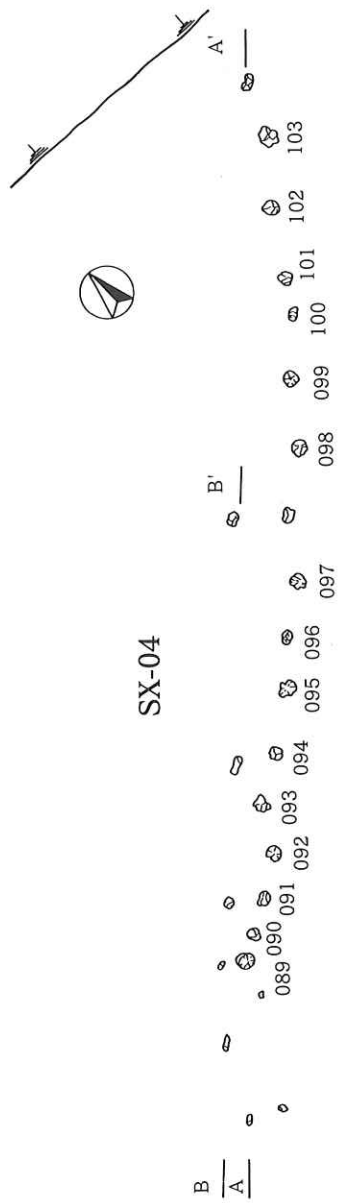
097はやや太めの杭で、片面だけを粗雑に削る。樹皮も残存している。



第19図 Ⅸ層出土 土師器、石器 実測図(082~088)



第20図 VIII層、VII層 遺構 配置図



第21図 VIII層 SX-04 実測図

樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

098、099、100 はかなり縮収している。099 の樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

101、102 は単純な削り痕を残す。101 の樹種はアワブキ属である。

103 は同一の削り面に連続する削り幅のやや短い痕跡が片面だけに認められる。

#### S X-05 (第25図)

SX-05 は調査区のSX-04 とSD-01 のほぼ中央のB-5グリッドのⅧ層で検出した。矢板列である。小丸杭3本、矢板状杭12本の計15本の1列で構成される。北東側は、排水溝で切られてはいない。その全長は2.85m、分布幅も23cmを測り、多少のばらつきはあるが、ほぼ低位置に収まっている。

検出面からの水平レベルは3.10m、最大深度も45cmを測り、基本土層IX層への打ち込みである。横木等は出土していない。間隔も70cm～80cmの間に5本づつ、矢板杭はやや密に配置される。角度もほぼ垂直に打ち込まれ、中程の4本は、やや斜めの打ち込みである。

SX-05 は、SX-04 と対比すると杭の形状や1列だけの杭列と違いはあるが、SX-04、05ともに照葉樹を杭に利用し、検出した層位も同じ事からほぼ同時期中世期に構築された杭列と考えられる。SX-05 も水田に伴って利用されたと思われる。水田面の水まわりの際に水流があたる部分、SD-01 に面して増水、侵食されるおそれのある部分に矢板列を密に打ち込んだと推定される。

#### 出土遺物 (第26図～第28図)

SX-05 全15点のうち実測に耐えられる13点を図化した。杭上部は全て崩壊及び欠損している。104 は小型の丸杭で105～116 は矢板杭である。杭6点の樹種同定であるが、全て照葉樹を利用している。専門家の所見で矢板杭6点に見られる数ヶ所の穴は、植物、生物の住みか(植生痕)が残ったものと述べている。加工具も手斧、鉋が考えられる。

104 は芯持材の小型丸杭で、削り幅も長く単純な削りで、先端をやや鋭角に加工している。

105 は板目にとった割材の先端を4方向から削り、その2方向からの長い削りで、かなり鋭角に削り出している。

106 は板状の割材を鑿の先端風に削っている。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

107 は柁目にとった材で先端の加工は、2方向からの削り面に数回にわたる削り痕を残す。

108 は蜜柑割材で、先端下半部欠損している。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

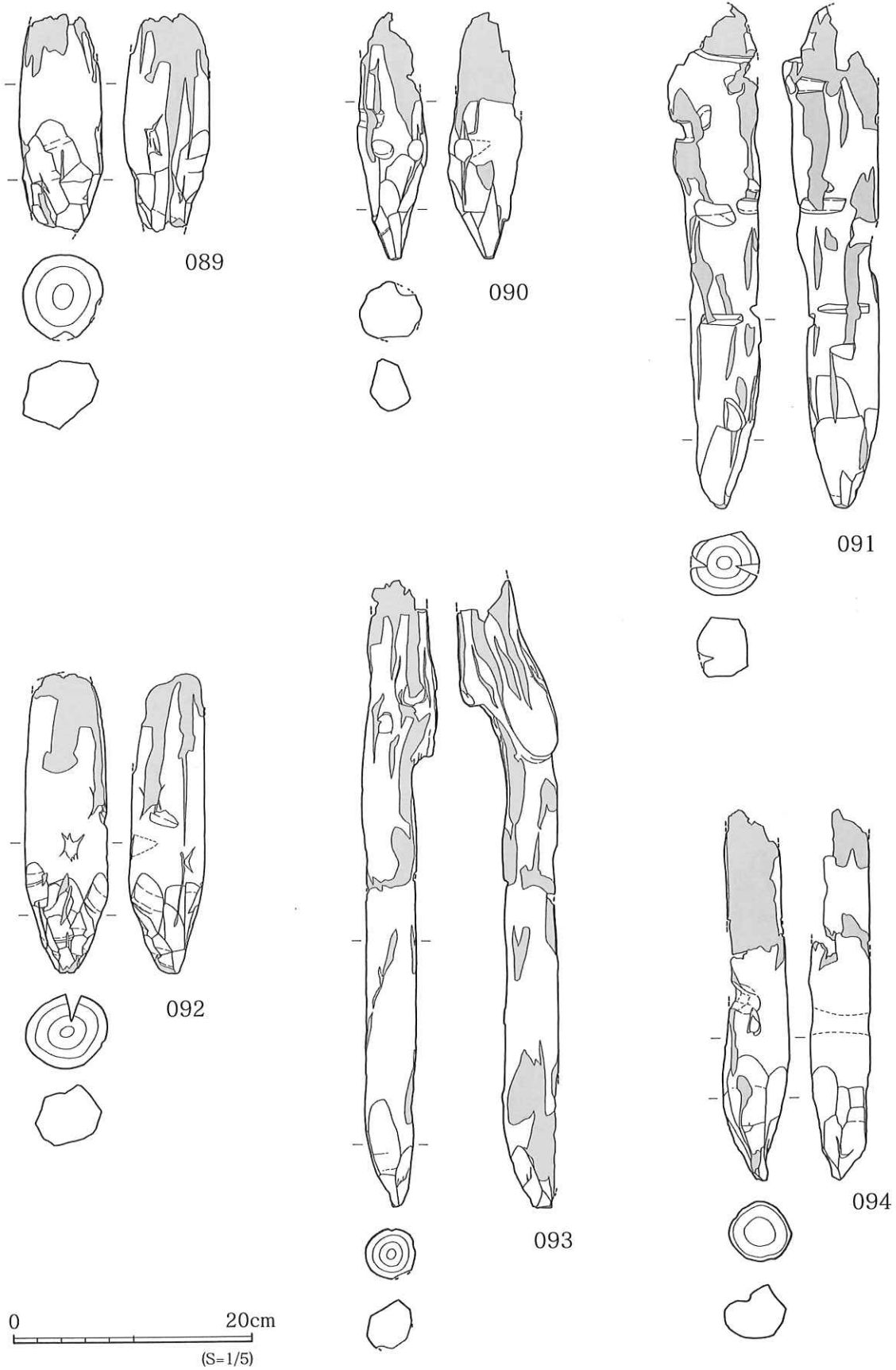
109 は縦木取りで、先端下半部をやや欠損している。

110 は板目にとった材で、先端下部少し欠損している。5方向からの削り痕を残す。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

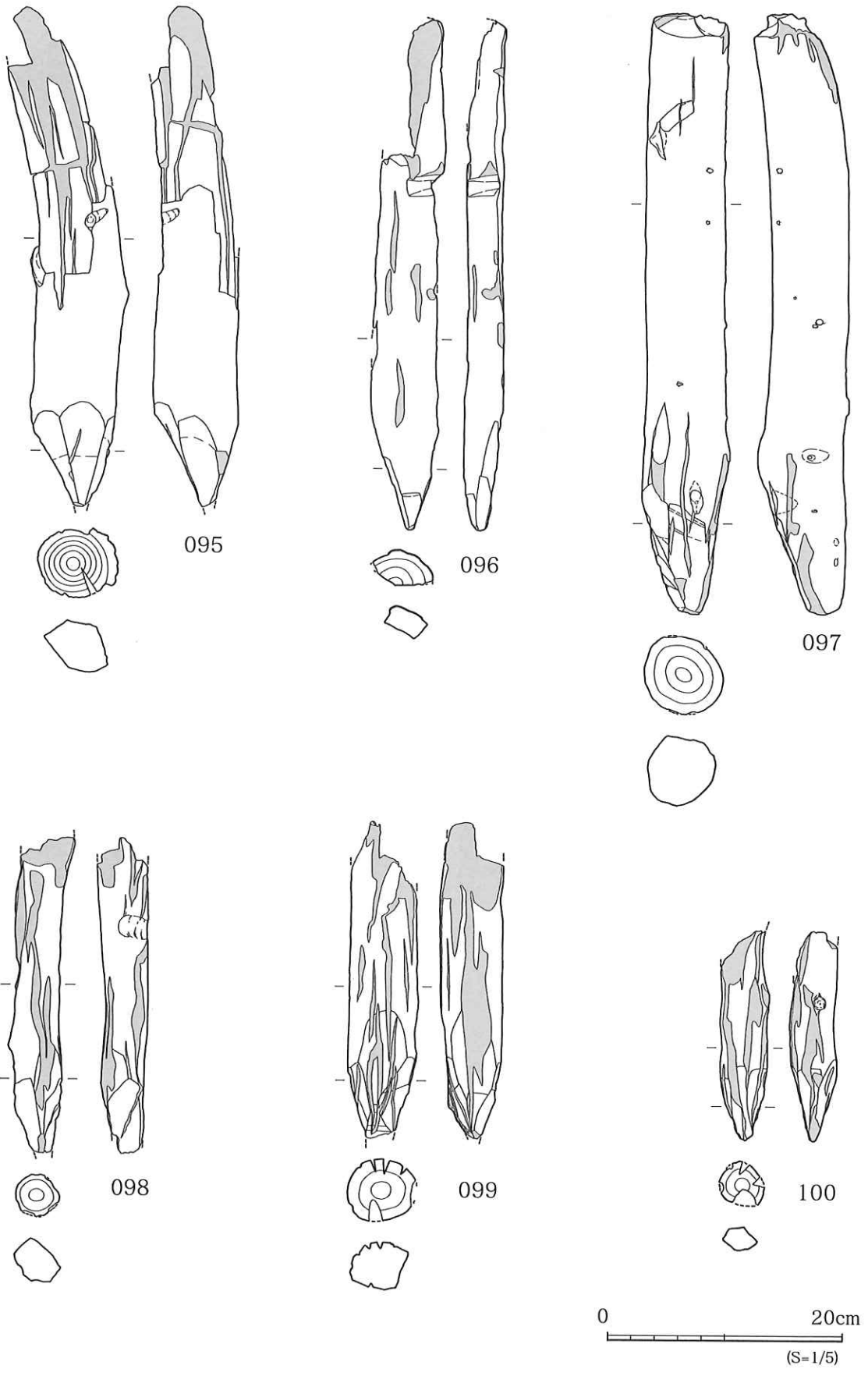
111、112、113 は先端部を4～5方向から削り、2方向の長い幅の削り面に、連続するやや幅の短い削り痕が認められる。3点ともコナラ属アカガシ亜属である。

114 は、割材を2～3方向の長い幅の削りで、先端下部は磨滅している。

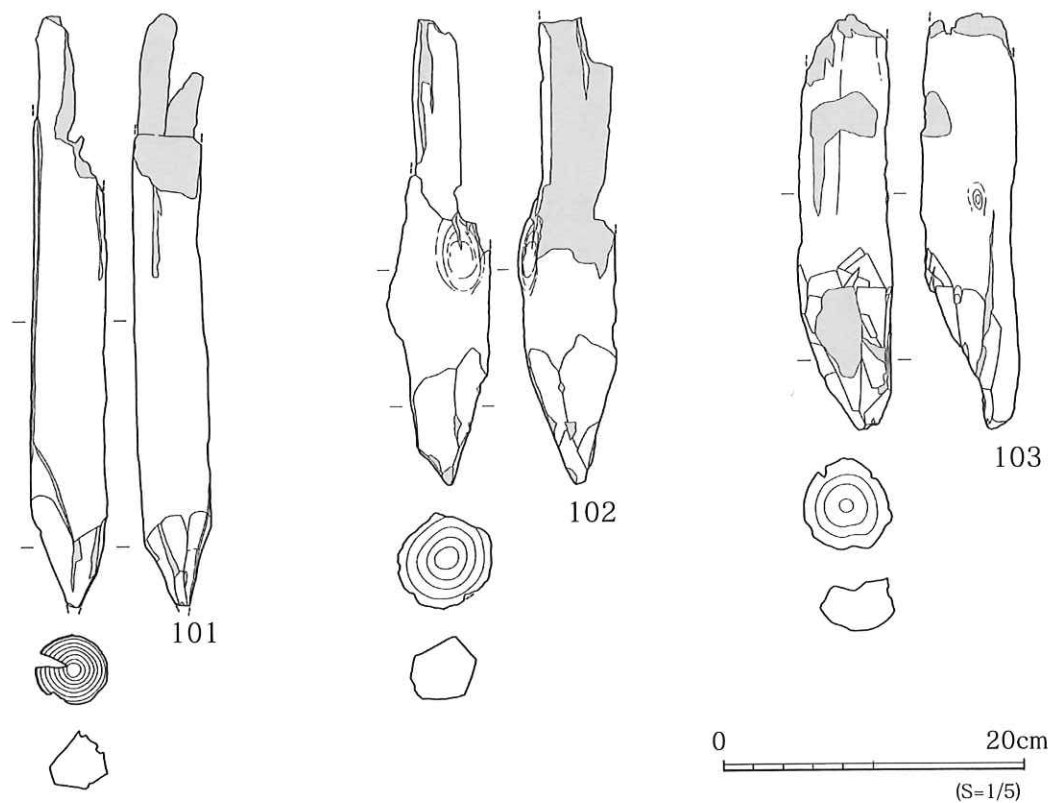




第22図 SX-04出土 杭 実測図(089~094)



第23图 SX-04出土 杭 实测图(095~100)



第24図 SX-04出土 杭 実測図(101~103)

115 は、板目にとった割材で、先端部を2方向からの長い幅の削りでやや鋭角さを出している。

116 はやや幅の狭い割材を租く先端を削り、やや鈍角な削り痕を残す。

#### SW-07 (第25図)

SW-07 は調査区のB-4のグリッドのⅧ層で検出した。単独の杭である。

SW-05 から西側4m付近からの出土であるが、SX-04、05 や県の調査区の出土杭と並ばないことから詳細は不明である。

検出面からの水平レベルは、3mで深度も35cmを測り、基本土層IX層への斜めの打ち込みである。SX-04、05の杭よりも、杭の状態も良く残存しているので、SW-07が少し新しい時期に打ち込まれたと考えられる。時期は、明確ではないが中世以降と思われる。

#### 出土遺物（第28図）

117は芯持材の丸杭で、杭上部を欠損している。

117は先端部を2方向から鋭角に削り、3ヶ所に節の切断面が明瞭に残る。加工具も鉋が使用された可能性がある。樹皮も残存している。

#### 10.VII層遺構（第29図、第30図、第33図）

SD-01、SW-08、SX-03、SX-02は、VII層の遺構である。

SD-01は、調査区の東半部VII層直上で検出した。北西方向から南東へ延びる溝状遺構である。北西端と南東端は排水溝で切られている。なお、南東端は、崩れ防止と土層断面の確認のためベルトを残している。

現状での全長33m、幅1m～3.4m、底幅0.1m～1.9m、深さ0.4m～0.7mを測る。北西から同じ幅で緩やかに蛇行し、E-9グリッド付近から南東方向に屈曲し、横幅も広がりながら次第に深くなり流下している。境川へ延びている。

底は平坦面をなし、水流痕がみられた。断面は逆台形を呈し、比較的緩やかに立ち上がる。

埋没時期は、古代（平安）から中世前半（鎌倉期）頃と考えられる。埋土の状況は、3層に区分される。

SD-01の北西端で、埋土3層上面から、斜めに打ち込まれた木杭2本確認した。その上部は欠損していることから、埋土1層堆積以前に打ち込まれたものと考えられる。SD-01（自然流路）の土留めの杭とも思われる。この杭2本は、10cm程の残存で、かなり腐食が激しいために凶化していない。又、SD-01の南東端では、押し流され倒れた状態で埋土3層から杭状加工品が出土している。

#### SD-01 出土遺物（第31図、第32図）

118は、須恵器の甕の胴部片である。外面の調整は格子目タタキ、内面に同心円タタキが施される。

119、120は、内外面を燻した黒色土器の椀の胴部片と思われる。119、120は、胎土も良く精選され、内外面ともに横、斜め方向の磨き調整を施し、一部カキ目の痕跡が残る。非常に丁寧な作りである。

121、122は、小型と大型の土錘のほぼ完成品である。

121は管状で体部の中央最大径から両端に向かい細かくしぼむ。

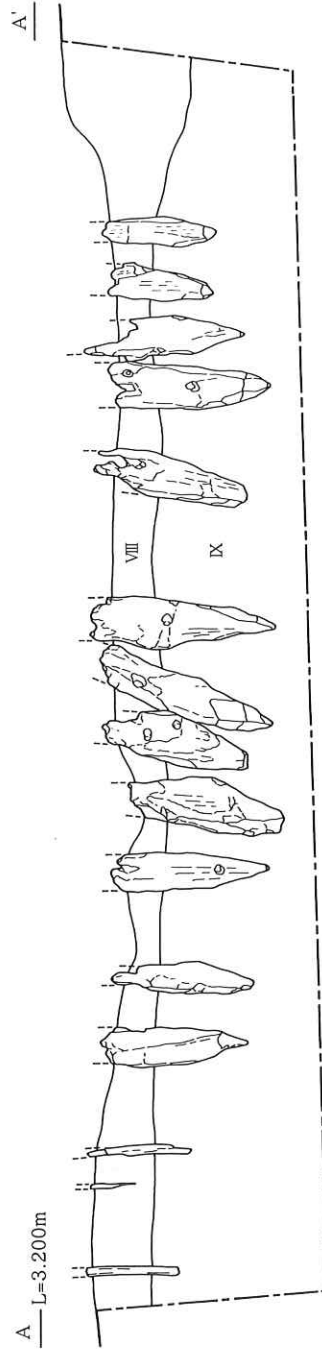
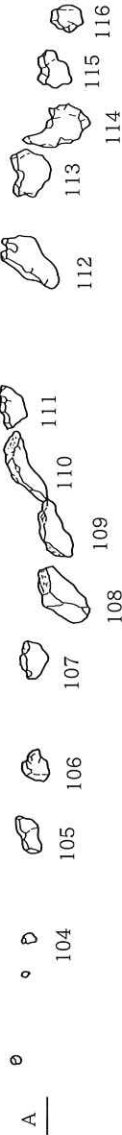
122は円筒型をなし、体部上位に最大径をもち、両端に向かいやや細くしぼむ。

121、122は、ナデ調整、指頭圧痕が残り、片側からの穿孔である。

123は杭状加工品である。全長157cmを測り、かなり反っている。



SX-05



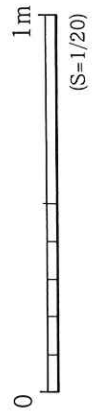
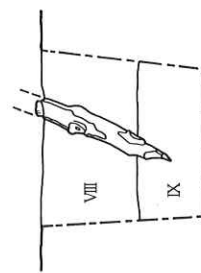
A L=3.200m



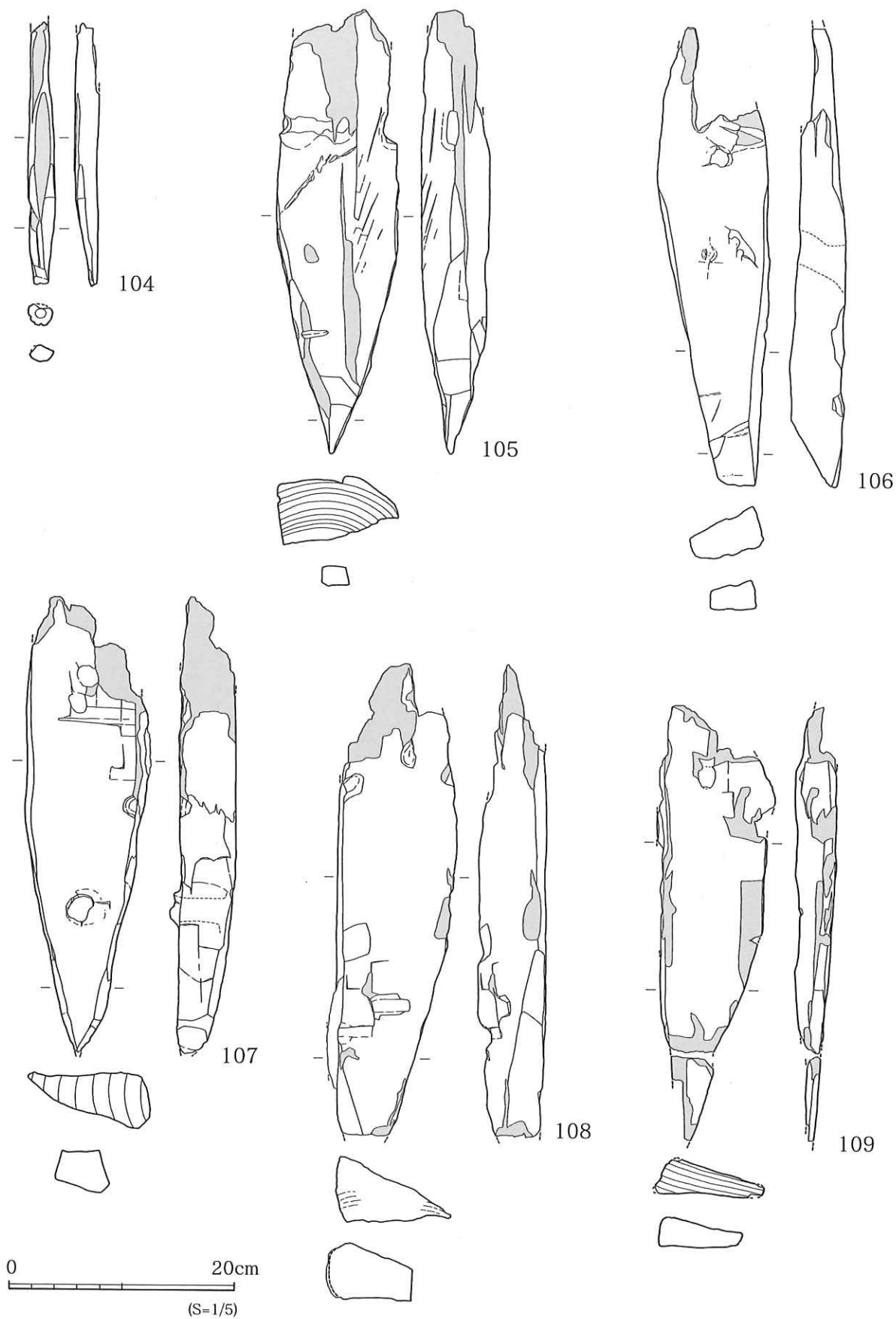
SW-07



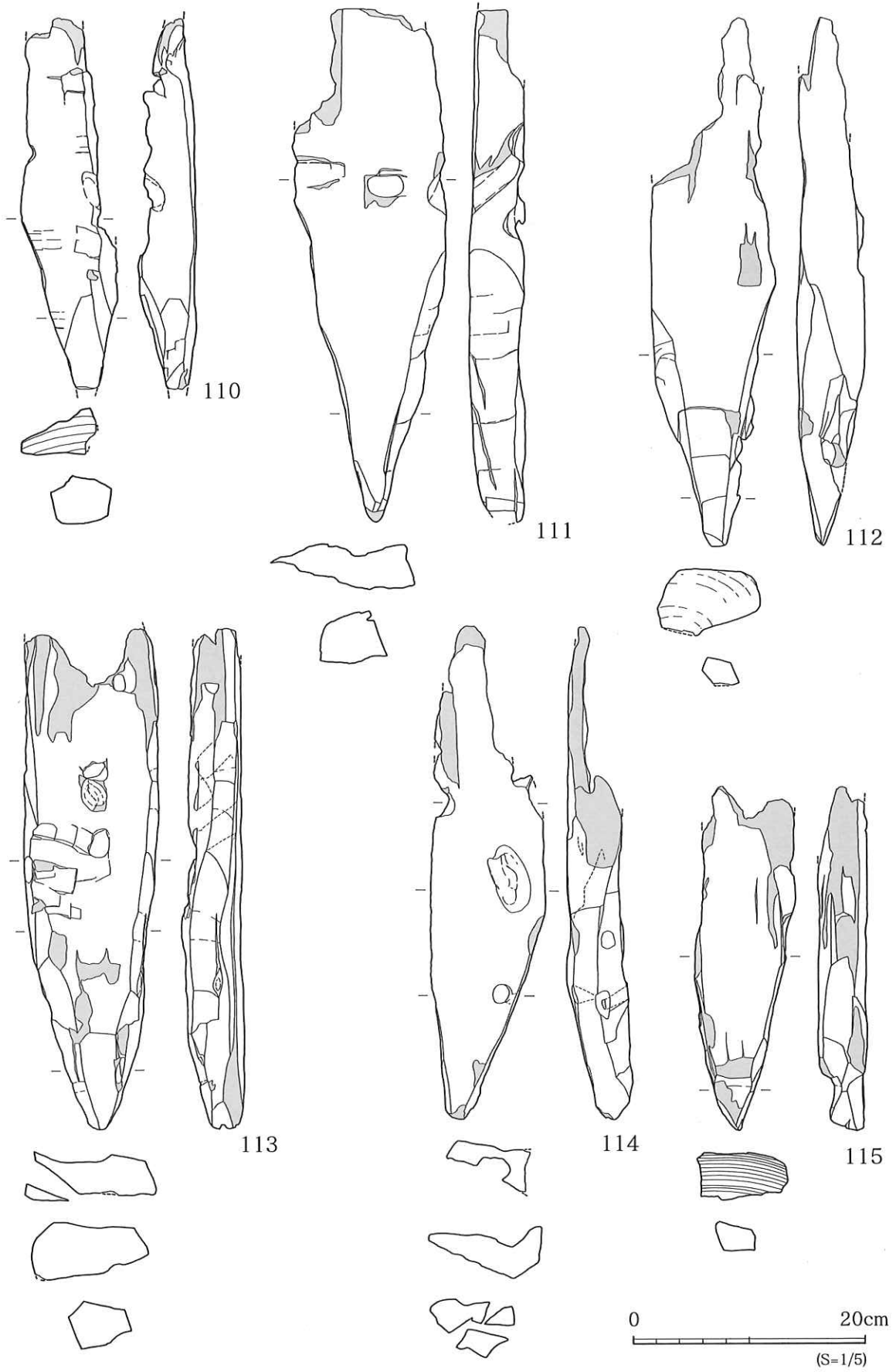
A L=3.200m



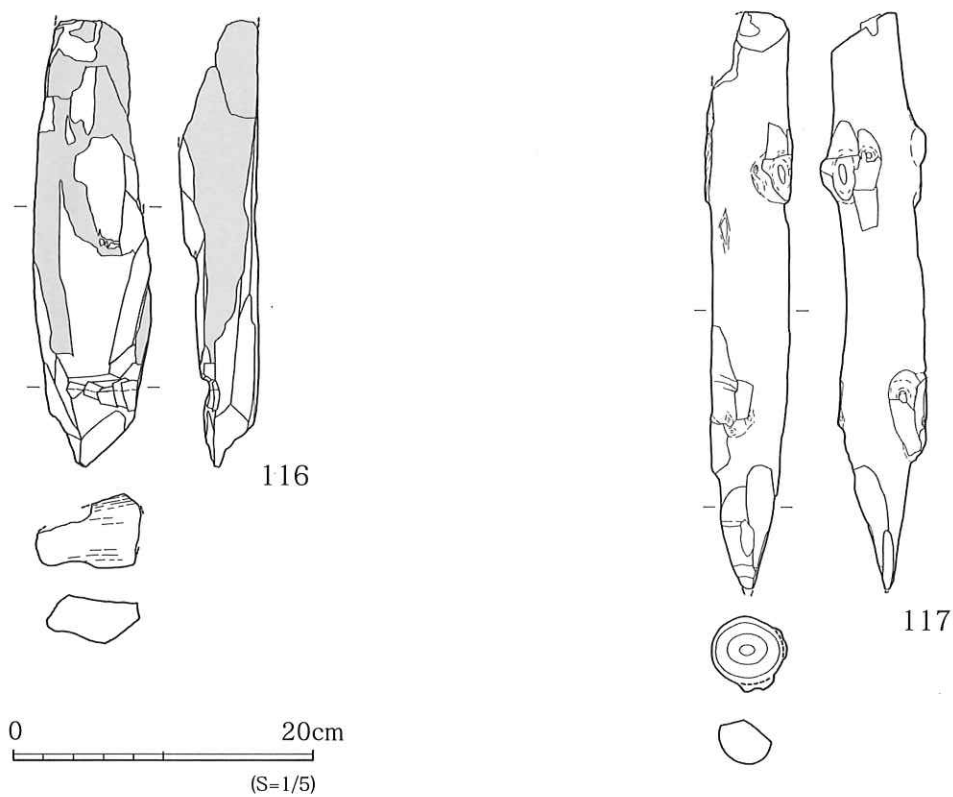
第25図 VIII層 SX-05、SW-07 実測図



第26図 SX-05出土 杭 実測図(104~109)



第27图 SX-05出土 杭 実測図(110~115)



第28図 SX-05出土杭(116)、SW-07出土杭(117)実測図

芯持材を粗く枝打ちした時の枝を少し残し、先端部を4~5方向の粗雑な削りで鋭角にし、頭部も加工痕が認められる。加工具は、鎌、鉞などが考えられる。樹皮も残存している。樹種は、マツ属複維管束亜属である。

#### SW - 08 (第30図)

SW - 08は調査区のF-4グリッドのVII層で検出した。単独の杭である。検出面からの水平レベルは、3.10mで、深度も44cmを測り、基本土層IX層への斜めの打ち込みである。

SW-07と同時期に打ち込まれた杭と考える事もできる。



### 出土遺物（第32図）

124 は芯持材の丸杭上部を欠損している。杭先端は取上げ時に少し欠けてしまった。先端部を4方向の削り面に数回にわたる削り幅のやや短い削り痕を残している。樹皮も残存している。加工具も鉋などが考えられる。

### SX-03（第33図）

SX-03 は県調査区のC、D、E-8グリッドVII層で検出された。SD-01の西側に接する位置の丁度蛇行する部分にあたる。土手状の遺構と考えられる。SX-02とも接し、北西方向を示している事から、畦畔と土手を兼ねた遺構と推定される。時期は中世期と思われる。

### SX-02（第33図）

SX-02 は、調査区のF-8、9グリッドVII層で、水田2枚検出した。南東端は、排水用溝で切られ、畦畔が調査区外へと延びている。南北方向の畦畔を一条確認しただけで、東西方向の畦畔は確認できていない。SD-01からSX-02を結ぶ取水の水路等も検出できていない。

畦畔は幅30cm～40cm、高さ10cmを測り、断面形状は台形を呈している。削り出した畦畔と考えられる。2枚の水田面積は、明確ではないが、推定12.5㎡～27㎡程だったと考える事もできよう。時期はSX-03と同時期中世と考えられる。

### 11. VIII層、VII層、VI層の遺物（第34図～第36図）

129、133はVIII層からの出土遺物である。

125、126、127、128、130、131、132はVII層からの出土遺物である。

125は、弥生前期の鉢型土器である。球形の胴部の張りが小さく、如意形状の口縁部の口唇に「V」字の刻目をもつ。器面は剥離して荒れが著しいために、調整は明確ではないが、外面に一部横方向のナデ調整痕が残る。頸部から胴部中位にかけて煤が付着している。

126は、弥生前期の甕型土器である。口縁部は、やや如意形状を呈し、胴部は口縁から弱く張る。胴部上位で「く」の字状に屈曲し、屈曲部に断面「コ」の字状の突帯を貼り付ける。器面は、磨耗して荒れが著しいために、刻目や内外面の調整は不明瞭である。

127、128、129は、甕型土器の底部と思われる。127、128は、胴部から底部端にかけてほぼ直線的に連なる。127は、底面が上げ底と思われる。内外面ともにナデ調整を施す。

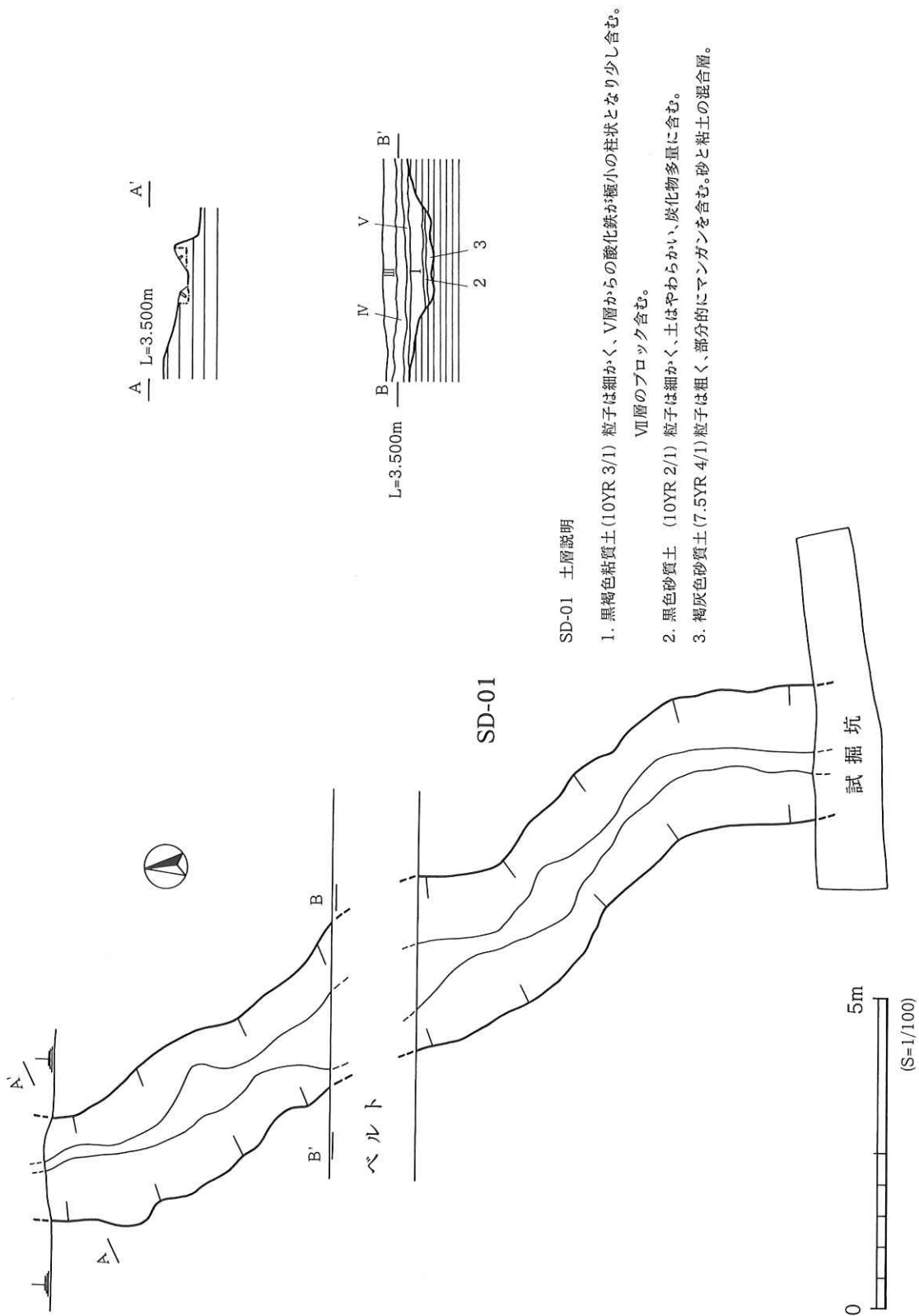
128は平底気味の底面を呈し、内外面に丁寧なナデ調整を施す。

129は底部端が幾分張り出し、不安定な底面である。内外面はナデ調整で仕上げる。

130は鉢型土器の底部で、やや張りのある胴部をもつと思われる。内外面の調整は、ともにナデ後粗い磨きを施している。

131は弥生の壺の口縁部である。朝顔状の広口口縁を呈し、口縁は強く外反する。口唇部に粘土を貼り付け、突帯風に丸く仕上げる。器面は、横方向のナデ調整を施す。

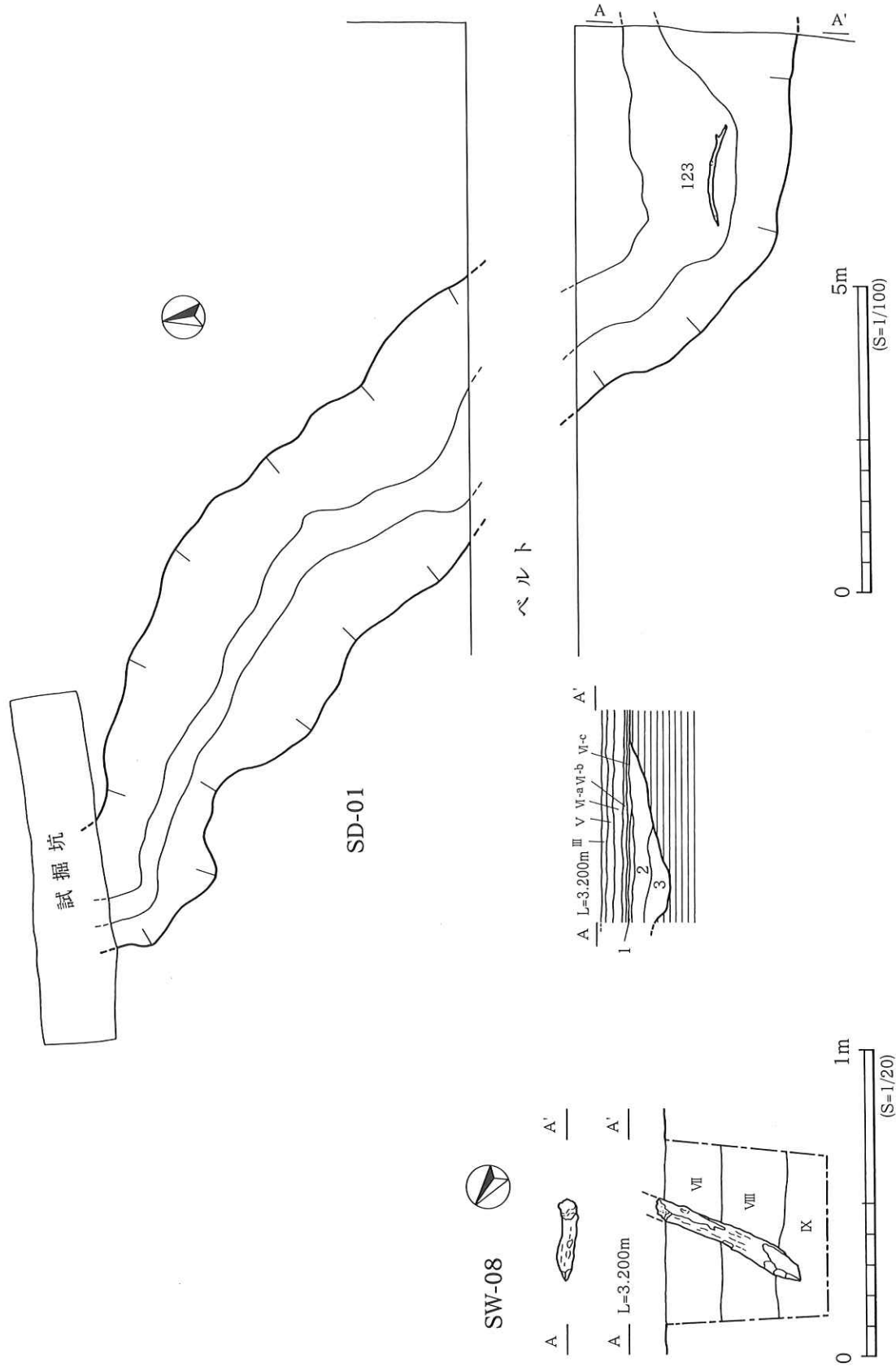
132は、弥生後期の脚付の甕である。長胴系の胴部を呈し、底部は欠損しているが脚台部が付



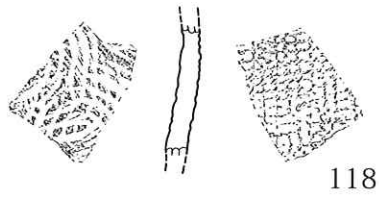
SD-01 土層説明

1. 黒褐色粘質土 (10YR 3/1) 粒子は細かく、V層からの酸化鉄が極小の柱状となり少し含む。  
VII層のプロック含む。
2. 黒色砂質土 (10YR 2/1) 粒子は細かく、土はやわらかい、炭化物多量に含む。
3. 褐灰色砂質土 (7.5YR 4/1) 粒子は粗く、部分的にマンガンを含む。砂と粘土の混合層。

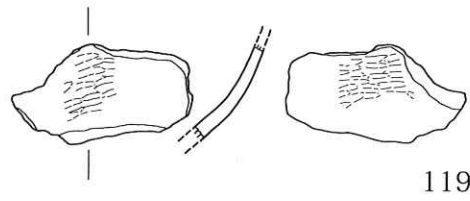
第29図 VII層 SD-01 実測図



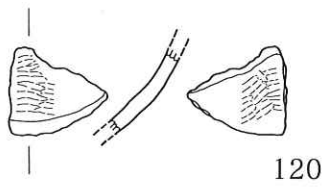
第30図 VII層SD-01、SW-08 実測図



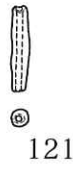
118



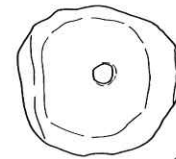
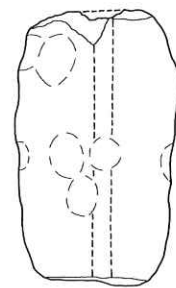
119



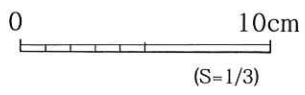
120



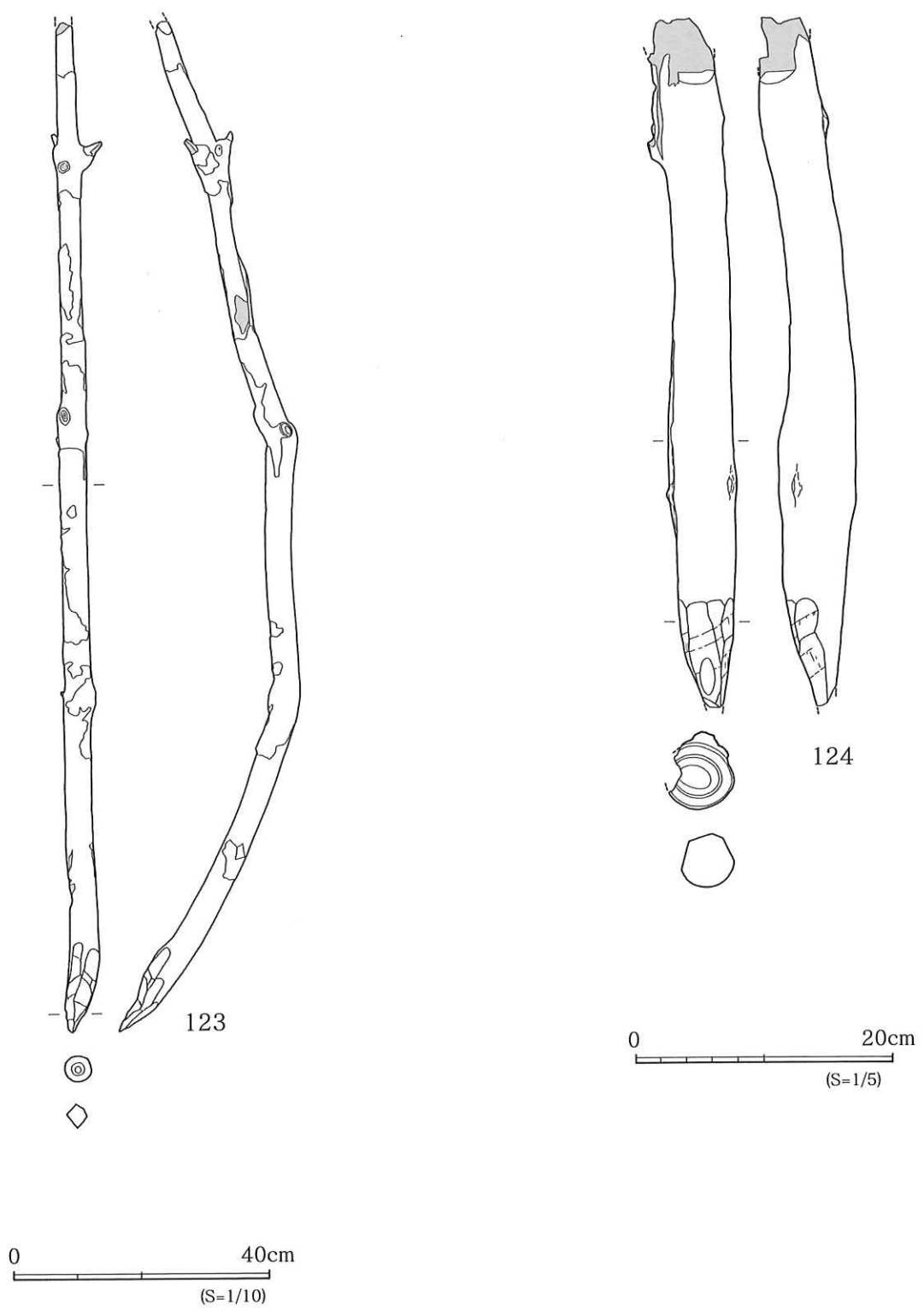
121



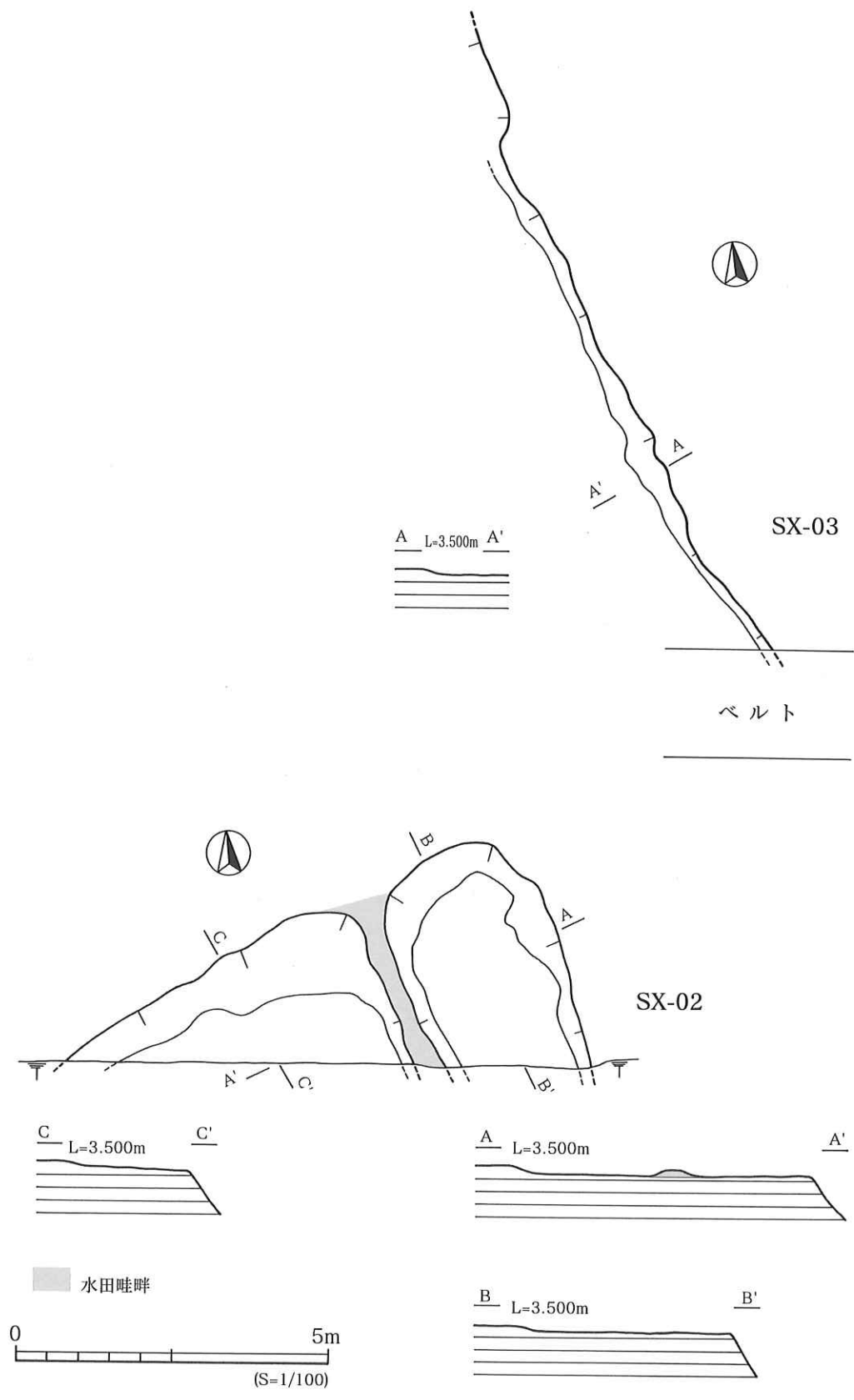
122



第31図 SD-01出土遺物 実測図(118~122)



第32図 SD-01出土木製品(123)、SW-08出土杭(124) 実測図



第33図 VII層水田面、SX-02、SX-03 実測図

くと思われる。幾分器面は磨耗しているが、内面に横方向のナデ調整、外面にハケ目後ナデ調整を施す。

133 は高杯の脚部である。内外面にナデ調整が施される。

134～147 はⅦ層からの出土遺物である。

134 は、古代の土師器の甑である。胴部はほぼ直線的に弱く開き、胴部上位付近に 2 個の把手が付くと思われる。把手部分は、粗いナデ調整を施している。

内面は斜め方向のヘラ削り調整と外面はハケ目後ナデ調整で仕上げる。

135 は、古墳時代の土師器の甕である。頸部のくびれは明瞭で口縁部は「く」の字状に立ち上がる。口唇部をやや平坦面に仕上げる。頸部から胴部上位にかけて直線的に張り出し、器壁はやや薄い。内面はヘラ削りと、外面は横方向のナデ調整を施している。

136 は須恵器の壺の口縁部である。外反するやや肥厚する口縁部をもち、端部を面取りして、端部下は明瞭に段を呈している。

焼成不良と器面の磨耗が激しいために、褐色で調整痕を残していない。

137 は、古墳時代の須恵器の坏身である。蓋受けは、内傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。底部欠損しているために、明確ではないが、回転ヘラ削り後ナデ調整を施している。一部自然釉付着している。

138 は、古墳時代の須恵器の坏蓋で、139、140、141、142 は古代の須恵器の坏蓋である。

138、141、142 は、天井部欠損しているために、つまみの有無は不明である。

138 は他に比べ器高が高い。体部から口縁部まで緩やかに湾曲し、口縁部内側に凹線を巡らせ、先端はやや尖っている。

139、140 は天井部に低い高台状のつまみが付く。

140、141、142 は、口縁端部をつまみ出し、下方に短く折れ曲がっている。

天井部付近の外器面には回転ヘラ削りが施され、それ以外の内外面には回転ナデ調整で仕上げる。

140 は、やや低い器高に天井部と体部の境は僅かに屈曲し、口縁端部付近で弱い凹線状あるいは弱い段をもつ。体部に 2 列の列点文を配している。

141 は 142 に比べ、扁平的になかなり低い器高をもつ。

141、142 は、天井部と体部の境は僅かに屈曲し、ほぼ直線的に、口縁端に連なる形態を有する。

143、144、145 は須恵器の甕の胴部片である。144 は、器壁も厚く大型の甕のものと考えられる。

143 の外面の調整は、格子目タタキが重複し、内面は同心円タタキが施される。

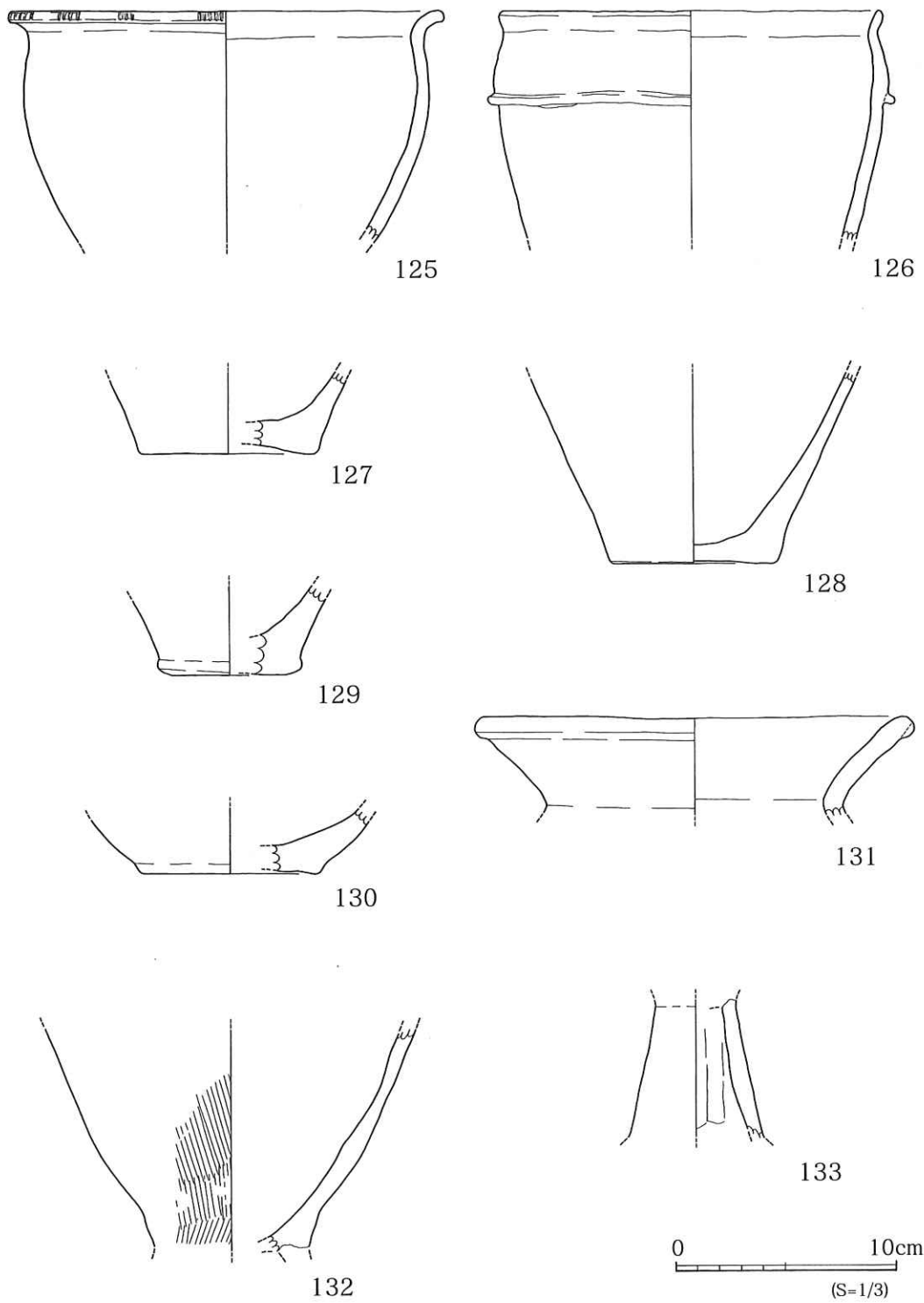
144、145 は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキ、145 には平行タタキを施す。

146 は、須恵器の小型短頸壺である。肩に張りがあり体部上位に最大径をもつと思われる。

内外面に、粗い回転ナデ調整が残る。

147 は、古代の須恵器の高台付坏あるいは椀である。高台はやや高めで底部と体部との境付近に貼付され、弱く「ハ」の字状に開く。高台端部をやや丸く仕上げる。

焼成が悪く、器面が磨滅しているために、褐色で調整は不明である。



第34图 VIII層、VII層出土 土器 実測図(125~133)



148～154、156、158 はⅦ層からの出土遺物である。

155、157 は、Ⅵ層からの出土遺物である。

148 は、土師器の高台付坏と考えられる。高台は低く、端部を丸く仕上げる。

器面は、激しく磨耗と剥離しているために、調整痕は不明である。

149、150、151、152、153 は、中世の土師器の皿で、152 以外は底部に糸切り痕を残す。

150、151 は、平底とみられる。

154、155 は、中世の瓦器の体部片で、高台が付くと考えられる。

154 の体部は内湾気味に立ち上がり、155 は内湾しながら立ち上がる。ともに、口縁端部をやや丸く仕上げる。154、155 の外面の調整は、回転ヘラ削り後粗いナデ、内面は緻密な磨きを施している。

156、157 は瓦器の椀あるいは皿の高台部片と考えられる。

156、157 の体部は緩やかに開き、高台は低めで、156 は弱く開き、157 は直立する。ともに端部を丸く仕上げる。156 の調整は、内外面に回転ナデが施され、全体的に丁寧な作りである。157 の調整は、内面に磨きと、外面には回転ヘラ削り後粗いナデを施し、丹精な作りである。

158 は、白磁の碗と思われる。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部を強く外反させ、やや丸く仕上げる。

## 1 2. Ⅶ層の遺物 (第 3 7 図)

159～163 は、Ⅶ層から出土した縄文時代と思われる石器である。

159 は磨石の破片である。石材は凝灰岩製で、片面に研磨した痕跡が認められる。

160 は棒状の磨石あるいは敲石である。上半部と側面を欠損している。下面以外のほぼ全面に研磨痕が残る断面はやや丸い。下面は明確ではないが、表面に敲き痕跡が 1 部認められ、敲石としても使用された可能性がある。

161、162 は石皿の破片である。石材は 2 点とも輝石安山岩の堅い石材を利用している。片面にやや窪みがみられるので、長期間使用されていたと思われる。

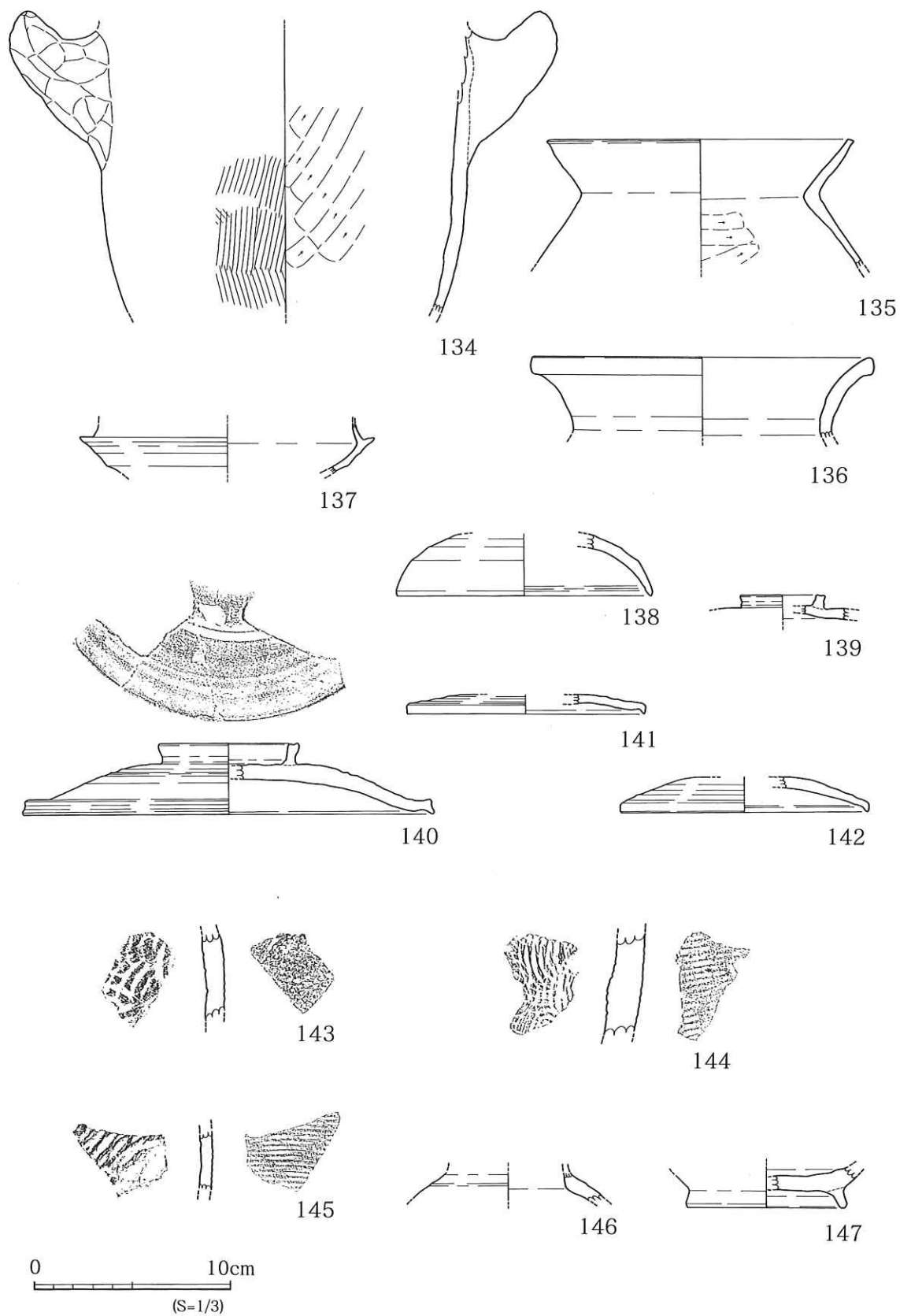
163 は砂岩製の石錘である。扁平な丸い河原石を利用し、網掛け用に両端を打ち欠けた窪みを残している。

## 1 3. Ⅳ層遺構 (第 3 8 図)

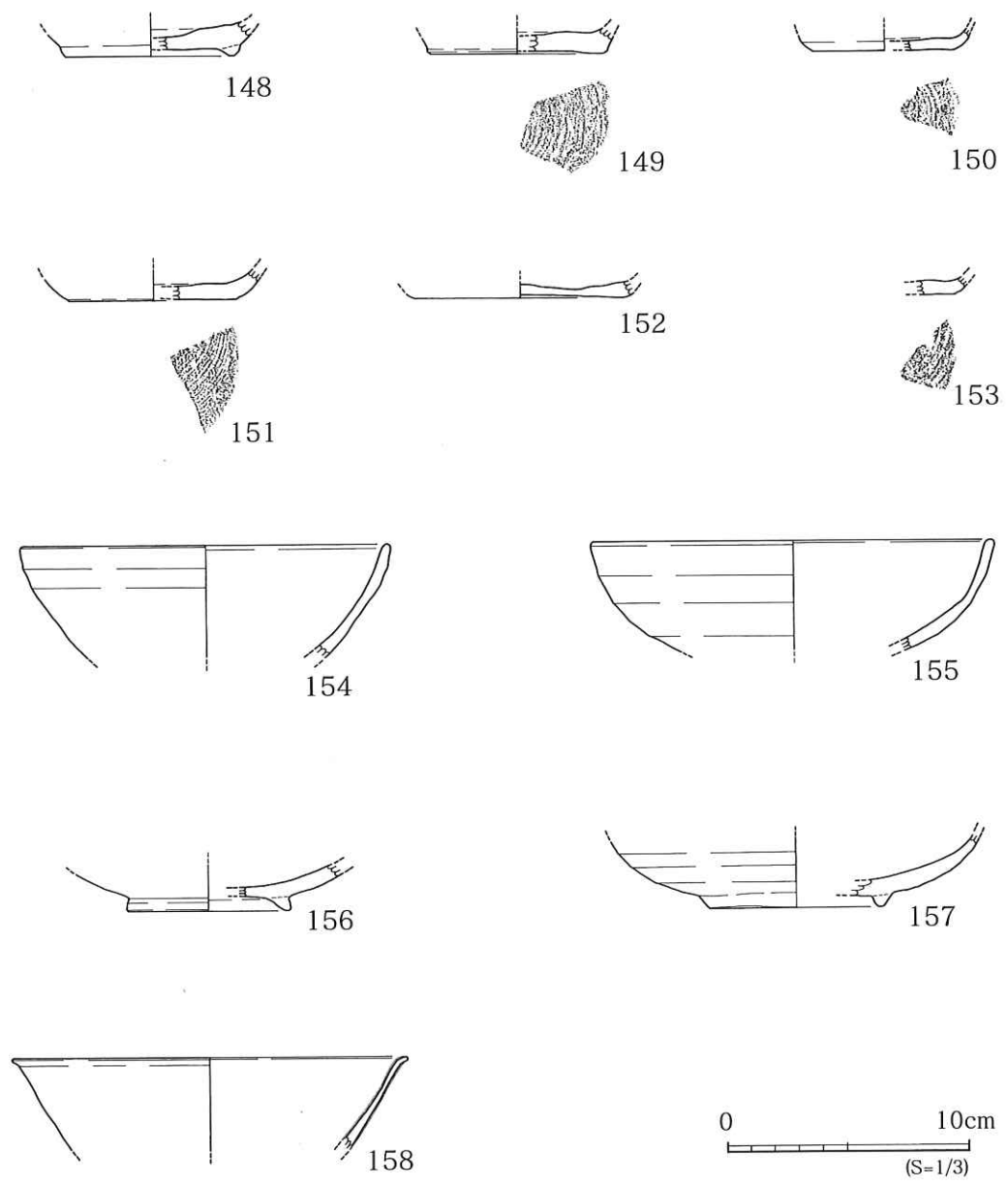
### SX-01

SX-01 はⅣ層直上 (Ⅳa 層) で検出した。近世の水田面と思われる。

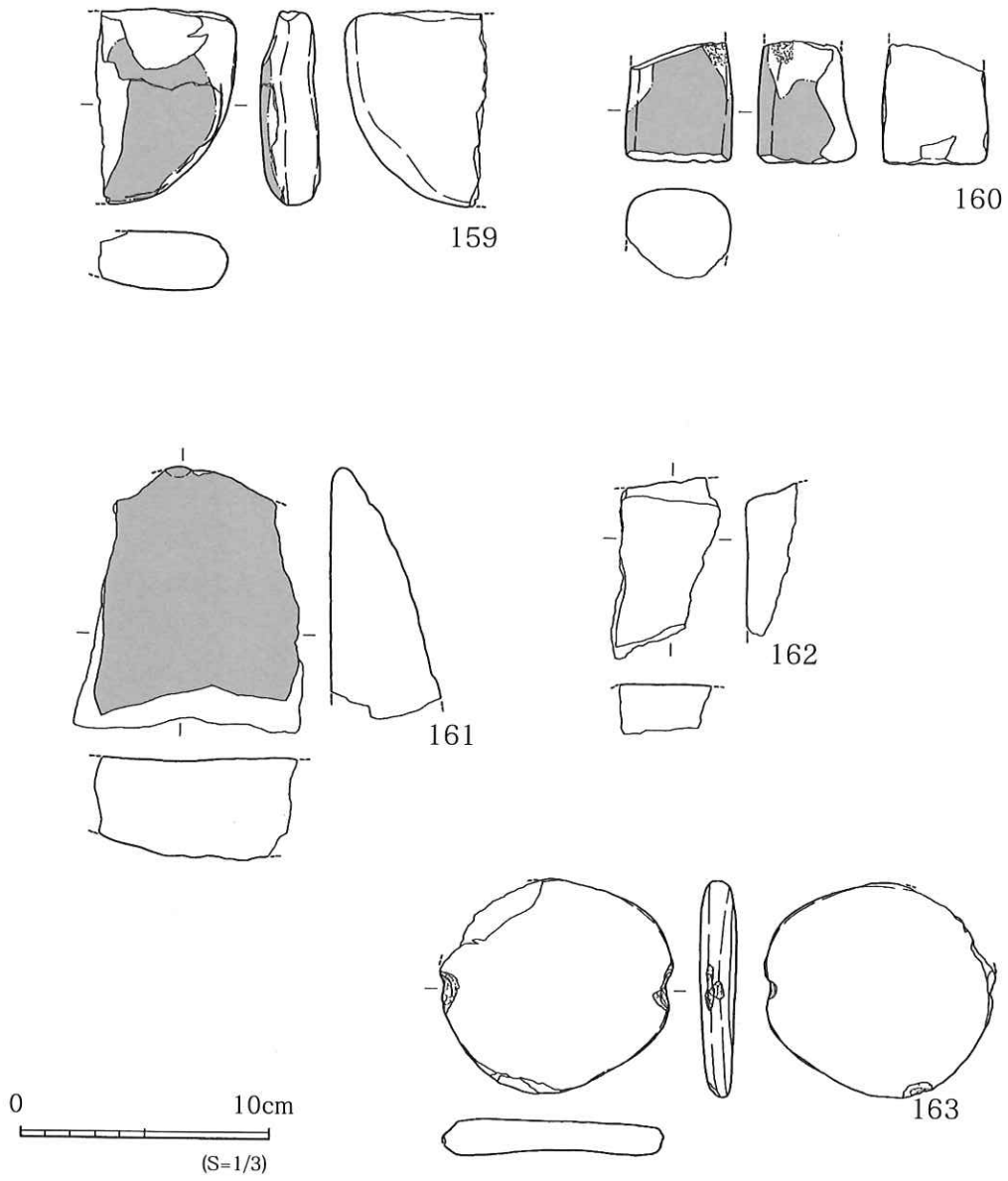
畦畔 1 条を確認した。水田面は洪水による粗砂に覆われている。この水田を覆う砂層は、調査区の西側から東側へと徐々に厚くなり、F-11 グリッド付近では、10cm 前後とかなり厚く堆積している。水田面には洪水前に残された稲株跡や足跡と思われる凹みが部分的に存在するが、頻繁に起る洪水等で畦畔を押し流し、崩れたと考えられる。この事から県調査区の畦畔 1 条だけの確認で、その他数条の畦畔については、土層断面からも明瞭に確認できていない。その畦畔は、幅 30cm～60cm、高さ 10cm を測り、南へ延びている。1 枚の水田面積は不明である。なお、SX-01 は遺構配置図だけの掲載としている。



第35図 VII層出土 遺物 実測図(134~147)



第36図 VII層、VI層出土 遺物 実測図(148~158)



第37図 VII層出土 石器 実測図(159~163)

#### 14. III層遺構（第39図）

稲株跡、足跡は、調査区で部分的に確認されたが、検出状況も良好なF-11グリッドIV層上面（IIIb層）が明瞭であった。近世以降近代の水田面と思われる。径9cm前後の丸い凹みがみられる。部分的には規則的に並んでいる部分もあるが、全体的に不規則的である。この凹みの確認はできていないが、稲株の跡と観察できる。

一人の人の歩行を示す24cm前後の足跡も認められる。

足跡は途中無くなっているが、歩幅40cm～50cmと明瞭な歩行状態ではないが、北東方向から南西方向に進んでいる状況が窺える。又、動物の足跡のような12cm前後の凹みもみられる。牛、馬等が考えられるが、明確でない。南東方向から北西方向へ進んでいると考えられる。

#### 15. V層、IV層、III層の遺物（第40図）

164、166、167は、V層からの出土遺物である。

165、168はIV層。169～171は、IIIc層からの出土遺物である。

164、167は中世の須恵質土器の摺鉢の口縁部と底部である。164は、口縁端部を外側につまみ出している。内面はナデ調整、9本単位のすり目が入る。外面は、不定方向のナデ調整が残る。

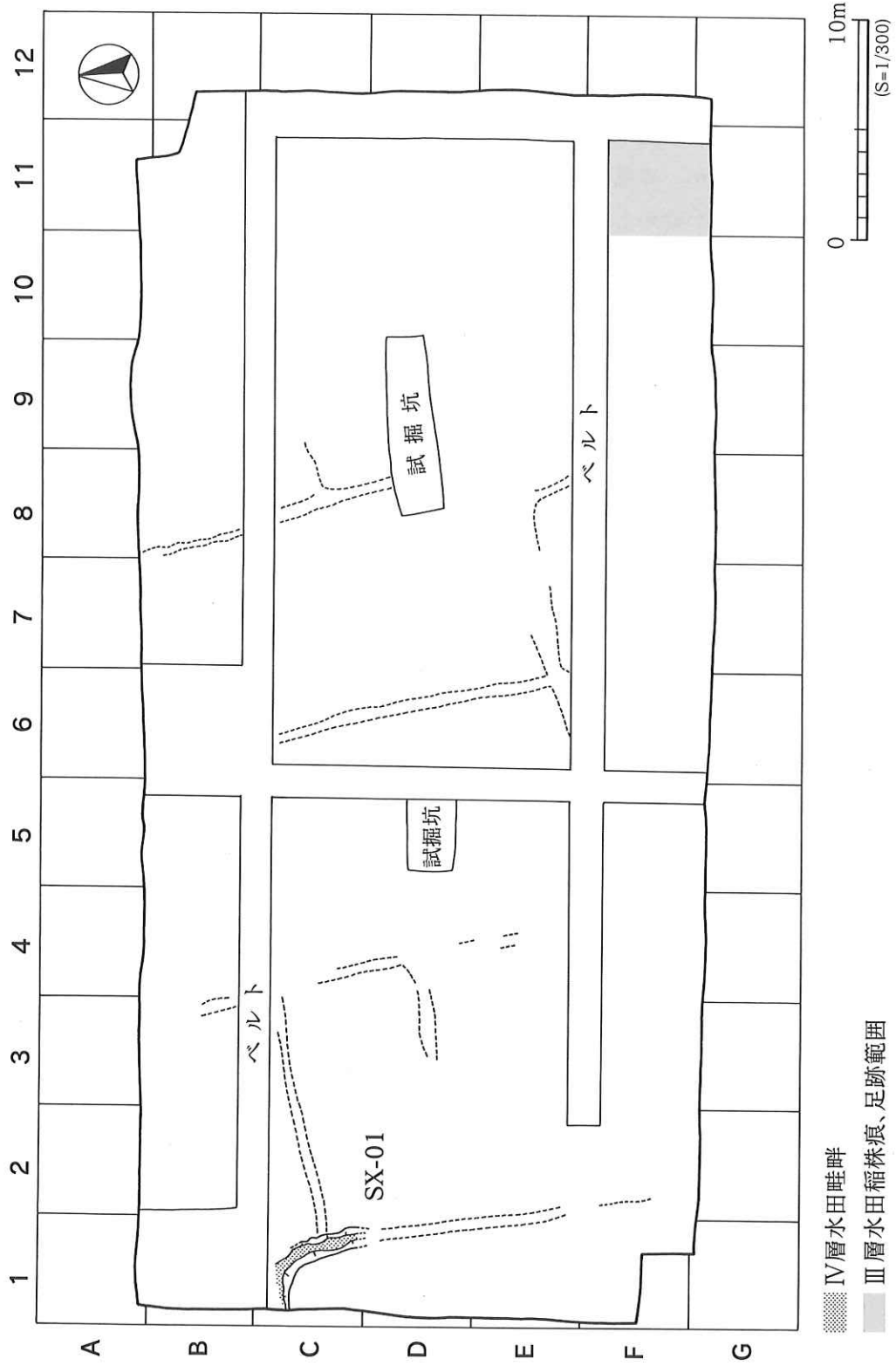
167は、底部が平底。内面はナデ調整、内底面に6本単位のすり目が入る。外面は、ナデ調整で端部をやや粗雑に仕上げている。

165、166は、中世の瓦質土器の摺鉢で口縁部、胴部である。165は肥厚した口縁部をもつ。口唇は、平坦面、端部を面取り風に仕上げる。器面は磨耗しているため、単位は不明であるが、内面にすり目の痕跡が認められる。166は内面に8本単位のすり目、外面には、ナデ調整の圧痕が残る。168は中世の土師器の小皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。内面の調整は、回転ナデ、中央は不定方向のナデ調整を施す。外面の調整は回転ナデ、端部をやや粗雑に仕上げている。底部には、糸切り痕が残る。

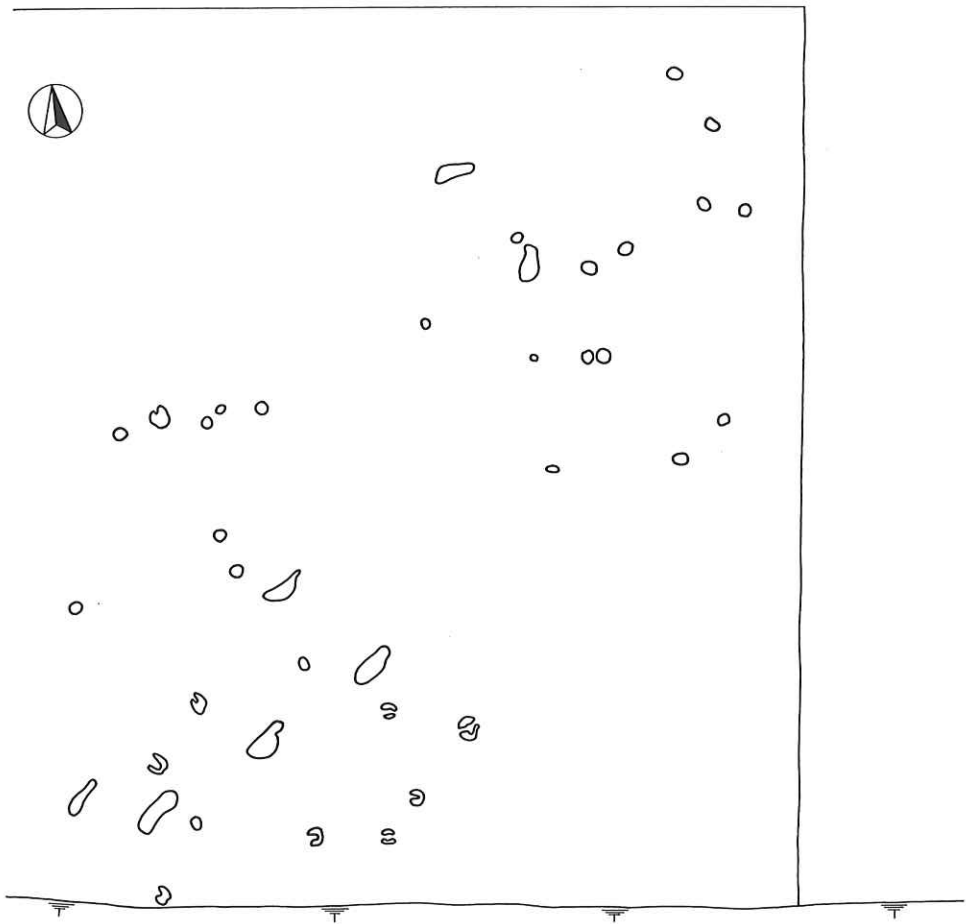
169は、青磁の碗の高台部である。高台は直立し、端部を面取りしている。底部内面は円状に釉をかき取り、高台部外面に釉流れが残る。

170は、近世以降近代の染付の小杯と思われる。体部は緩やかに内湾し、口縁部で外反する。全面に釉を施し、口縁部内面と外面体部上部に一条染付線を配している。

171は、近世以降近代の染付の碗と思われる。口縁部は丸みを帯びる。全面に釉を施す。体部上位に、一条染付線とその下に草花文を描く。

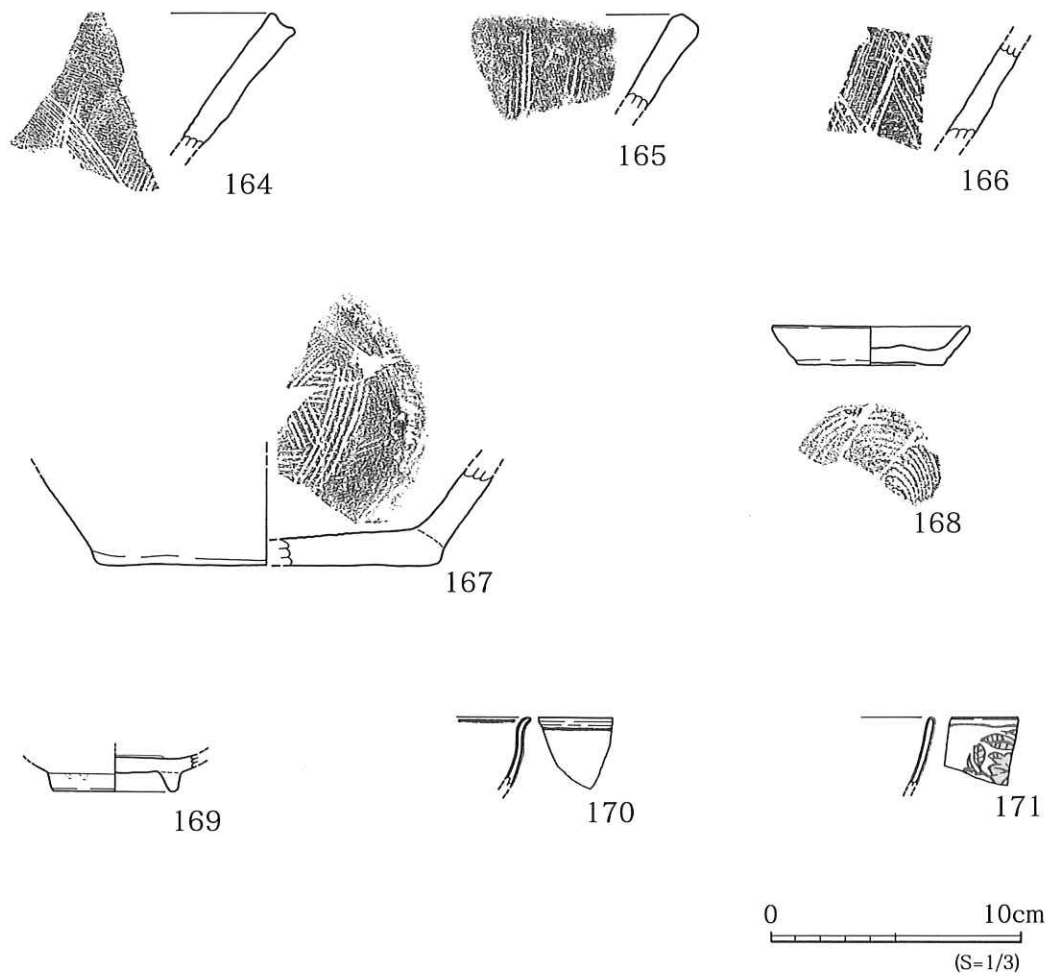


第38図 IV層、III層 遺構 配置図



0 1m  
(S=1/40)

第39図 Ⅲ層 水田面稻株痕、足跡 実測図



第40図 V層、IV層、III層 出土遺物 実測図(164~171)



## 第V章 まとめ

今回の調査では、IX層（古墳期）からIV層（近世）と考えられる各層から稲のプラントオパールが多量に見つかり、酸化鉄、マンガンが沈殿した水田床土も部分的にみられ、水田として利用されていた事が窺えるが、河川等の氾濫する低湿地の一角である。検出した遺構の時期や構造を明確に示すには、非常に困難で少ない遺構であった。遺跡の出土遺物は、台地からのやや近い所が遺物が多く、離れると遺物は少なくなり、境川に近い南東側では、ほとんど見られなくなる。遺物は、台地上や微高地から流れ込んだものであることが判る。土層中に砂層の介入が頻りにみられ、流水によって土砂が流され、重い石器と共に土器も混在しながらも時期ごとに常時落ち込んでいったものと考えられる事ができる。

遺物は、縄文時代から近世まで得られているが、遺物と直接結びつく遺構は、溝SD-02、01だけで、その他の遺物は各層ごとの一括性のものがほとんどである。

本調査では、縄文時代から弥生時代に位置づけられる遺構は確認していない。縄文時代早期前半の押型文土器、前期の轟B式、中期の阿高式、後期前葉の坂の下式、後期中葉の鐘崎式、後期末の御領式、晩期の天城式・黒川式にあたる土器が出土している。

高谷和生氏の柳町遺跡出土の突文土器から弥生前期土器の編年案による縄文時代晩期末から弥生前期初頭とされる夜白I式、弥生前期中葉から後葉とされる夜白IIa、IIb、板付I式、弥生前期後葉から末とされる亀ノ甲系当の土器片が出土している。

弥生中期の黒髪式、弥生後期後半の野辺田式等も出土している。縄文中期と弥生前期の土器片が比較的によく出土している事から、近い周辺遺跡からの流入と考えられる。弥生前期の土器片の中で数点ほどあまり磨耗しておらず、割れかたに新しいものも見られ、調査区外の近い所にこの時期の遺構が存在している可能性もあると言える。

溝SD-02からの遺物は、4世紀末から5世紀初頭の土師器が出土している。検出した土層の分析から、水田である事を指示しているが、畦畔等は確認できなかった。河川とも考えられるSD-02は、洪水をくり返しながら埋没する古墳時代までは存在し、その周辺を水田に利用していたのかもしれない。流水の被害にかなり悩まされていたと思われるが、米作りには、適地であったと考えられる。

SD-02が流れていた時期から埋没していった古墳時代頃にかけて、打ち込まれたと考えられる最下層の杭周辺での水田遺構の可能性もあるが、確認できていない。

溝SD-01からの遺物は、須恵器、黒色土器や土錘が出土している。小片の遺物から平安時代後半から鎌倉時代前半にかけて埋没していったと推定される。

SD-01は、水田に給水するための用水利用も行なわれていたとすれば、SD-01内で打ち込まれていた2本の小杭と流された状態の杭状加工品1点だけの出土であるが、水を堰止めるための杭と考えることもできる。堰により水位が上がってあふれた水を、鎌倉時代頃とみられる小区画水田SX-02や水田間を区画する杭列SX-04へ送り、潤していたと考えられる。度々氾濫したと思われる境川と共にSD-01も増水し、水田面への被害を少なくするために矢板列SX-05を構築し、水量調整等も行なっていたと推測される。

SX-04、05の打ち込み時期や構造の十分な解明に至っていないが、鎌倉時代頃の構築と考えられ、水田関連の遺構である事はまちがいないと言えよう。

中世において前述した、紀氏が寄進したとされる「尾崎河原西」の田地一帯の条里の地割の存在も十分に考えられるが、調査区域が限定されているため、今回の調査では確認できていない。SX-02が調査区外の南側へ広がっていく可能性があることも無視できないと言えよう。

近世、近代とみられる水田面は、ほぼ全域に広がっていたと思われるが、粗砂層が堆積し洪水による攪乱等で、畦畔の広がりを明確に検出できなかったが、洪水前に残されたと思われる稲株跡、足跡の凹みの判断は容易であったと言える。

下層の杭や水田関連遺構の問題点や玉名平野における条里跡の解明は、今後の課題であり周辺地域における慎重な文化財調査が望まれる。

## 参考文献

- 門岡 久 昭和 44, 昭和 60「岱明町地方史」岱明町
- 岱明町文化財保護委員会 1991「岱明町の指定文化財」岱明町  
「熊本県遺跡地図」1998 熊本県教育委員会  
「岱明町遺跡地図」2003 岱明町教育委員会
- 玉名市史編纂委員会 1992「玉名市史 資料編Ⅰ絵図・地図」玉名市
- 大川 清他 1996 「日本土器辞典」雄山閣
- 鈴木道之助 1991 「石器入門辞典 縄文」 柏書房
- 山崎純男 「凸帯文系土器様式」縄文土器大観
- 野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開」  
『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 美濃口雅朗 1994 「熊本県における中世前期の土師器について」  
『中近世土器の基礎研究 X』 日本中世土器研究会
- 高木正文・村崎孝宏 1998「黒橋貝塚」 熊本県文化財調査報告第 166 集 熊本県教育委員会
- 坂田和弘 1998「鶴羽田遺跡」熊本県文化財調査報告第 168 集 熊本県教育委員会
- 濱田彰久 1999「古閑山遺跡」熊本県文化財調査報告第 171 集 熊本県教育委員会
- 矢野裕介 1999「蔵城遺跡」 熊本県文化財調査報告第 172 集 熊本県教育委員会
- 帆足俊文 1999「二本木遺跡群」熊本県文化財調査報告第 174 集 熊本県教育委員会
- 野田恒親・濱田 彰久 1999「古閑北・梨木遺跡」熊本県文化財調査報告第 175 集 熊本県  
教育委員会
- 高谷和生 2001 「柳町遺跡Ⅰ」熊本県文化財調査報告第 200 集 熊本県教育委員会
- 網田龍生 1993 「大江遺跡群Ⅱ」熊本市教育委員会
- 末永 崇 2002「今見堂遺跡・平町遺跡・蓮華遺跡」玉名市文化財調査報告第 10 集 玉名市  
教育委員会
- 二宮忠司・佐藤 一郎 1987「田村遺跡Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 168 集 福岡市  
教育委員会
- 横山邦継・瀧本 正志 1988「井相田 C 遺跡Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 179 集  
福岡市教育委員会
- 二宮忠司・大庭 康時 1995「四箇周辺遺跡調査報告書(6)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第  
428 集 福岡市教育委員会
- 屋山 洋 1996「徳永 A 遺跡Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 479 集 福岡市教育委員会
- 瀧本正志 1998「和田 B 遺跡Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 572 集 福岡市教育委員会
- 米沢英明・矢部喜多夫 1998「鶴喰遺跡」都城市文化財調査報告書第 572 集 宮崎県都城市教  
育委員会
- 上野利明・才原金弘 1992「水走遺跡第 20 次・鬼虎川遺跡第 20 次発掘調査報告」(財) 東大阪  
市文化財協会, 東大阪市教育委員会

第2表 (1) 土器観察表

遺物 番号	種別	器種	グリップ	遺構	層	法			器高	調整			色調			胎土	焼成	備考
						口径	底径	胴径		外面	内面	外面	内面	内面	外面			
007	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	(19.1)	-	-	(5.8)	凹線文、押点文、沈線文	ナテ	灰黄緑(10YR6/2)	にぶい黄緑(10YR7/2)	砂粒多量、滑石、角閃石を含む	良			
008	縄文中期土器	深鉢	F-2	-	X I	-	-	-	(6.2)	波状突起、凹線文、沈線文	ナテ	にぶい褐(5YR7/3)	にぶい褐(5YR6/3)	砂粒多量、滑石、長石、角閃石を含む	良			
009	縄文中期土器	深鉢	F-2	-	X I	-	-	-	-	波状口縁、凹線文	ナテ	にぶい黄(2.5Y6/3)	暗灰黄(2.5Y5/2)	砂粒多量、石英、長石を含む	不良	内外面磨耗		
010	縄文中期土器	深鉢	F-2	-	X I	-	-	-	-	波状口縁、凹線文	ナテ	にぶい赤褐(5YR5/3)	にぶい褐(5YR6/3)	砂粒多量、滑石、長石、角閃石を含む	良			
011	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	-	-	-	-	波状口縁、凹線文、押点文	ナテ	にぶい黄緑(2.5YR6/3)	淡赤褐(2.5YR7/3)	粗砂粒多量、滑石、長石、角閃石を含む	良			
012	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X I	-	-	-	-	波状口縁、凹線文	ナテ	にぶい黄緑(5YR7/3)	にぶい褐(5YR6/3)	砂粒多量、滑石、角閃石を含む	良	内外面一部剥離		
013	縄文後期前葉土器	深鉢	F-1	-	X II	-	-	-	-	波状突起	ナテ	にぶい黄緑(10YR7/3)	淡黄緑(10YR8/3)	砂粒多量、滑石、角閃石を含む	良			
014	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X I	-	-	-	-	波状口縁、凹線文、押点文	ナテ	にぶい黄緑(7.5YR7/3)	にぶい褐(7.5YR7/3)	砂粒多量、長石、角閃石を含む	不良	内外面磨耗		
015	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X I	-	-	-	-	波状口縁、押点文	ナテ	にぶい黄緑(10YR6/3)	にぶい褐(7.5YR6/3)	砂粒多量、滑石、長石、角閃石を含む	良			
016	縄文後期前葉土器	深鉢	F-1	-	X II	-	-	-	-	凹線文、押点文	ナテ	にぶい黄緑(10YR7/2)	にぶい黄緑(10YR6/3)	粗砂粒多量、角閃石、石英を含む	不良	内外面磨耗		
017	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	-	-	-	-	凹線文	ナテ	灰赤(2.5YR5/2)	にぶい褐(2.5YR6/3)	砂粒多量、滑石、長石を含む	良			
018	縄文中期土器	深鉢	F-2	-	X I	-	-	-	-	凹線文	ナテ	灰白(2.5YR7/1)	灰黄(2.5Y7/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好			
019	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	(16.1)	-	-	(3.4)	ナテ、指圧痕	ナテ	にぶい黄緑(10YR7/2)	灰白(10YR7/1)	砂粒多量、滑石、長石、石英を含む	良	底面断骨圧痕		
020	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	(13.6)	-	-	(3.2)	ナテ	ナテ	にぶい黄緑(10YR7/2)	灰白(10YR7/1)	砂粒多量、滑石、長石、石英を含む	良			
021	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	(20.1)	-	-	(6.3)	ナテ	ナテ	灰黄褐(10YR6/2)	灰白(10YR7/1)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良			
022	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	(14.7)	-	-	(2.9)	指圧痕	ナテ	にぶい黄緑(10YR7/2)	にぶい黄緑(10YR7/3)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良			
023	縄文中期土器	深鉢	F-1	-	X II	-	-	-	(1.2)	ナテ	ナテ	にぶい黄緑(10YR6/3)	灰黄褐(10YR6/2)	砂粒多量、長石、石英を含む	良	底面断骨圧痕?		
024	縄文前期土器	深鉢	F-1	-	X I	-	-	-	-	小突起4条、つまみ痕	-	灰白(5Y8/2)	灰白(5YR8/1)	粗砂粒多量、角閃石、長石、石英を含む	良	内外面磨耗		
025	縄文後、晩期土器	浅鉢	B-4	-	X	-	-	-	-	沈線3条	ナテ	にぶい黄緑(10YR7/2)	にぶい黄緑(10YR7/3)	砂粒多量、角閃石、長石、石英を含む	不良	内外面磨耗		
026	縄文後、晩期土器	深鉢	F-2	-	X I	-	-	-	-	沈線2条、磨き	磨き	にぶい黄緑(10YR7/2)	にぶい黄緑(10YR7/3)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好			
027	縄文後、晩期土器	深鉢	F-2	-	X I	(21.3)	-	-	(5.8)	条痕	ナテ	濁灰(10YR4/1)	灰白(10YR8/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良	外面入付磨		
028	縄文後、晩期土器	深鉢	B-11	-	X	(22.3)	-	-	(3.9)	ナテ	ナテ	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄緑(10YR6/3)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良			
029	縄文後、晩期土器	深鉢	F-1	-	X	(26.9)	-	-	(5.2)	条痕	ナテ	濁灰(10YR4/1)	灰白(10YR8/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良	外面入付磨		
030	縄文後、晩期土器	深鉢	F-1	-	X	-	-	-	-	沈線文、ナテ	指圧痕	にぶい褐(7.5YR7/3)	明褐灰(7.5YR7/2)	砂粒多量、角閃石、長石、雲母を含む	良			
031	縄文後、晩期土器	深鉢	F-2	-	X I	(22.3)	-	-	(4.3)	条痕	ナテ	灰白(5Y8/2)	灰白(5Y8/1)	砂粒少量、角閃石、長石、石英を含む	良			
032	縄文後、晩期土器	深鉢	F-1	-	X I	-	-	(22.5)	(6.1)	条痕	ナテ	灰白(5Y7/1)	黄灰(2.5Y6/1)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良			
033	縄文後、晩期土器	浅鉢	F-2	-	X	-	-	-	-	条痕	ナテ	にぶい褐(7.5YR6/3)	にぶい褐(7.5YR7/3)	砂粒多量、石英、長石を含む	良			
034	縄文土器	深鉢	F-2	-	X	-	10.2	-	(7.1)	ナテ、指圧痕	ナテ	淡黄緑(10YR8/3)	淡黄緑(10YR8/4)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良			
035	縄文土器	鉢	F-1	-	X I	-	8.0	-	(1.8)	磨き、ナテ	-	にぶい褐(7.5YR7/3)	にぶい褐(7.5YR6/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	不良	内外面磨耗		
036	縄文土器	浅鉢	F-2	-	X I	-	-	-	(1.8)	ナテ	ナテ後磨き	淡黄(5Y8/3)	淡黄(5Y8/4)	砂粒多量、角閃石、長石、雲母を含む	良			

第2表 (2) 土器 観察表

遺物 番号	種別	器種	グリップ	遺構	層	法			重 (cm)			調整		胎土	焼成	備考
						口径	底径	高さ	口径	胴径	器高	外面	内面			
037	縄文土器	鉢	F-2	-	X	-	6.3	-	(3.2)	-	-	にふい黄緑(10YR6/3)	灰黄褐(10YR6/2)	砂粒多量、長石、石英を含む	不良	外面磨耗
038	縄文土器	鉢	F-2	-	X	-	(7.7)	-	(4.1)	-	-	にふい黄緑(10YR7/2)	灰黄褐(10YR6/2)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
039	縄文晩期土器	壺	B-3	-	X	(22.1)	-	(8.3)	(8.3)	刻目突帯、条痕、ナデ	-	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/2)	砂粒多量、長石、石英を含む	良	内外面磨耗
040	縄文晩期土器	壺	F-2	-	X	(22.9)	-	(4.1)	(4.1)	刻目突帯、指圧痕	-	淡黄緑(10YR8/3)	淡黄緑(10YR6/4)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
041	縄文晩期土器	壺	F-1	-	X	-	-	-	-	刻目突帯、条痕	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良	内外面磨耗
042	縄文晩期土器	壺	F-1	-	X	-	-	-	-	刻目突帯	-	黒褐(7.5YR3/2)	灰褐(7.5YR6/2)	砂粒多量、角閃石、長石、石英を含む	良	内外面磨耗
043	縄文晩期土器	壺	F-8	-	X	(19.2)	-	(12.2)	(12.2)	条痕、へら磨き	-	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y6/1)	砂粒多量、角閃石、長石、石英を含む	良	内外面磨耗
044	縄文晩期土器	壺	F-1	-	X	(28.2)	-	(13.7)	(13.7)	へら磨き	-	淡黄(5Y7/3)	淡黄(2.5Y7/2)	砂粒多量、角閃石、長石、石英を含む	良	内外面磨耗
045	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(17.2)	-	(5.8)	(5.8)	ナデ(横)	-	灰白(10YR7/1)	淡黄緑(10YR8/3)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
046	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	-	-	-	-	沈線3~4条、へら磨き	-	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/1)	砂粒多量、石英を含む	良	内外面磨耗
047	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	-	-	-	-	沈線4条、へら磨き	-	灰黄褐(10YR6/2)	灰褐(10YR6/1)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
048	弥生土器	壺・壺	F-2	-	X	-	-	-	-	小突帯2条、へら磨き	-	淡黄(2.5Y7/3)	灰白(2.5Y8/1)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
049	縄文晩期土器	浅鉢	F-2	-	X	(22.2)	-	(5.2)	(5.2)	へら磨き	-	黄灰(2.5Y6/1)	灰黄(2.5Y7/2)	砂粒多量、角閃石、長石、石英を含む	良	内外面磨耗
050	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(21.3)	-	(5.9)	(5.9)	刻目突帯	-	にふい黄緑(10YR7/2)	灰白(10YR8/2)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
051	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(21.8)	-	(6.5)	(6.5)	刻目突帯	-	灰黄(2.5Y7/2)	淡黄(2.5Y7/3)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
052	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(28.8)	-	(10.4)	(10.4)	刻目突帯	-	黄灰(2.5Y6/1)	灰黄(2.5Y7/2)	砂粒多量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗
053	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(19.7)	-	(6.7)	(6.7)	刻目突帯	-	淡黄緑(10YR8/3)	淡黄緑(10YR8/4)	細砂粒多量、石英を含む	良好	外面炭化物付着
054	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(21.0)	-	(9.4)	(9.4)	刻目突帯	-	淡黄(2.5Y7/3)	淡黄(2.5Y7/4)	砂粒少量、茶褐色土粒、長石を含む	不良	内外面磨耗
055	弥生前期土器	壺	F-2	-	X	(23.6)	-	(3.1)	(3.1)	刻目突帯	-	淡黄(2.5Y8/3)	淡黄(2.5Y8/4)	砂粒多量、茶褐色土粒、石英を含む	良	内外面磨耗
056	弥生前期土器	壺	F-2	-	X	(22.1)	-	(3.4)	(3.4)	刻目突帯、ナデ(横)	-	にふい黄(2.5Y6/3)	淡黄(2.5Y7/3)	砂粒少量、角閃石、石英を含む	良	外面及び付着
057	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(24.1)	-	(6.6)	(6.6)	刻目突帯、ナデ(横)	-	灰黄褐(10YR5/2)	にふい黄緑(10YR7/3)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良	外面及び付着
058	弥生前期土器	壺	F-2	-	X	(21.4)	-	(6.2)	(6.2)	刻目突帯	-	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR6/2)	砂粒少量、長石、石英を含む	良	内外面磨耗
059	弥生前期土器	壺	F-1	-	X	(23.3)	-	(12.8)	(12.8)	沈線3条、重弧文、へら磨き	-	灰白(10YR8/2)	にふい黄緑(10YR7/2)	砂粒少量、茶褐色土粒、角閃石、石英を含む	良好	内面磨耗
060	弥生土器	壺	F-1	-	X	(16.6)	-	(6.4)	(6.4)	ナデ(横)	-	淡黄(2.5Y8/3)	灰白(2.5Y8/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	不良	内外面磨耗
061	弥生中期土器	壺	F-1	-	X	(10.8)	5.2	6.4	ナデ	-	にふい黄緑(10YR7/2)	淡黄緑(10YR8/3)	細砂粒多量、角閃石、長石を含む	良	内外面磨耗	
062	弥生中期土器	壺	B-2	-	X	(22.4)	-	4.1	ナデ(横)	-	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良	底面平底	
063	弥生後期土器	鉢	F-1	-	X	(18.6)	8.0	(15.7)	ナデ	-	淡黄(2.5Y7/3)	淡黄(2.5Y7/4)	細砂粒少量、角閃石、長石を含む	良	底面平底	
064	弥生後期土器	壺	B-11	-	X	(19.1)	-	(13.8)	ハケ目後ナデ	-	にふい褐(7.5YR5/3)	にふい褐(7.5YR6/3)	細砂粒多量、石英を含む	良	底面平底	
065	弥生土器	壺	F-1	-	X	-	8.0	(7.9)	ナデ	-	にふい黄緑(10YR7/3)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒多量、長石、石英を含む	良	底面平底	
066	弥生土器	壺	F-2	-	X	-	(9.1)	(7.8)	ナデ	-	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	砂粒少量、角閃石、石英を含む	良	底面平底	
067	弥生土器	壺	F-2	-	X	-	(10.1)	(5.9)	ナデ	-	灰褐(5YR5/2)	明褐灰(5YR7/2)	砂粒少量、角閃石、石英を含む	良	内外面磨耗	
068	弥生土器	壺	F-2	-	X	-	(8.5)	(3.6)	ナデ	-	淡黄緑(7.5Y8/3)	灰白(7.5YR8/2)	砂粒少量、長石、石英を含む	良	内外面磨耗	
069	弥生土器	壺	F-1	-	X	-	7.6	(7.2)	ナデ	-	灰黄(2.5Y7/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	砂粒少量、長石、石英を含む	良	内外面磨耗	
070	押型土器	鉢	F-G-2	釜場	-	-	-	-	-	横円文	-	淡黄(2.5Y8/4)	淡黄(2.5Y8/3)	砂粒多量、角閃石、長石、石英を含む	良	内面磨耗

第2表 (3) 土器観察表

遺物 番号	種 別	器 種	グ リ ッ ド	遺 構	層	法 量 (cm)			整 色 調			胎 土	焼 成	備 考		
						口径	底径	胴径	器高	外面	内面				内面	
082	土師器	甕	F-8	-	I X	(20.8)	-	-	(4.0)	ナデ(横)	ナデ削り	灰褐(7.5YR4/2)	淡黄(2.5Y8/3)	細砂粒多量、石英を含む	良	外面入付着
083	土師器	壺	F-8	-	I X	(17.0)	-	-	(3.9)	ナデ(横)	ナデ削り	灰白(10YR8/2)	灰白(10YR8/1)	0.3mm程の砂粒多量、石英を含む	良	
084	土師器	壺	F-8	-	I X	(16.6)	-	-	(11.0)	ハケ目後ナデ	ヘラ削り、ハケ目	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	1.5mm程の砂粒多量、長石を含む	良	
085	土師器	壺	F-9	-	I X	(14.4)	-	-	(3.7)	ナデ(横)	ヘラ削り	褐灰(7.5YR4/1)	灰白(10YR8/2)	0.1~0.2mmの砂粒多量、石英を含む	良	
086	土師器	壺	F-8	-	I X	(14.0)	-	-	(6.7)	ナデ(横)	ハケ目後ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	褐灰(7.5YR4/1)	細砂粒多量、長石を含む	良	
118	須恵器	甕	F-11	SD-01	Ⅶ(埋II)	-	-	-	-	タタキ(格子目)	当具痕(同心円)	灰(10Y6/1)	灰(10Y6/2)	白色砂粒少量を含む	良	
119	黒色土器	椀	F-11	SD-01	Ⅶ(埋I)	-	-	-	-	ヘラ磨き(横)	ヘラ磨き(斜)	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	細砂粒少量を含む	良	
120	黒色土器	椀	F-11	SD-01	Ⅶ(埋II)	-	-	-	-	ヘラ磨き(斜)	ヘラ磨き(横)	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	細砂粒少量を含む	良	
121	-	土罐	F-11	SD-01	Ⅶ	0.3	0.6	0.7	3.4	ナデ(横)	-	にふい橙(5YR7/4)	-	細砂少量、雲母を含む	良	
122	-	土罐	F-11	SD-01	Ⅶ	0.8	4.2	6.5	11	指圧痕	-	灰黄(2.5Y7/2)	-	細砂少量、長石を含む	良	
125	弥生前期土器	鉢	F-2	-	Ⅶ	(19.8)	-	-	(10.4)	刻目突帯、ナデ	-	にふい橙(7.5YR6/3)	にふい橙(7.5YR6/3)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	不良	外面入
126	弥生前期土器	甕	F-1	-	Ⅶ	(17.4)	-	-	(10.3)	突帯	-	にふい黄(2.5YR6/4)	淡黄(2.5Y7/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	不良	内外面磨耗
127	弥生土器	甕	F-1	-	Ⅶ	-	(8.1)	-	(3.7)	ナデ	ナデ	にふい黄橙(10YR7/2)	灰(10Y6/2)	砂粒多量、長石、石英を含む	良	
128	弥生土器	甕	F-1	-	Ⅶ	-	(7.7)	-	(8.4)	ナデ	ナデ	にふい黄橙(10YR7/2)	淡黄橙(7.5YR8/3)	細砂粒多量、褐色土粒、角閃石を含む	良	
129	縄文晩期土器	甕	F-2	-	Ⅶ	-	(6.5)	-	(4.0)	ナデ	ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y7/2)	砂粒多量、角閃石を含む	良	
130	縄文晩期土器	鉢	F-2	-	Ⅶ	-	(8.2)	-	(3.0)	ナデ	ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	灰白(2.5Y8/2)	砂粒多量、長石を含む	良	
131	弥生土器	壺	B-11	-	Ⅶ	(19.9)	-	-	(4.4)	ナデ	ナデ(横)	にふい黄橙(10YR7/4)	にふい黄橙(10YR7/3)	砂粒多量、石英を含む	良	
132	弥生後期土器	壺	B-11	-	Ⅶ	-	-	-	(10.1)	ナデ	ナデ(横)	淡黄(2.5Y8/4)	淡黄(2.5Y8/3)	砂粒多量、長石を含む	良	
133	弥生土器	高坏	B-2	-	Ⅶ	-	-	-	(6.2)	ナデ	ナデ	にふい黄橙(10YR7/2)	にふい黄橙(10YR7/4)	細砂粒多量、角閃石を含む	良	
134	土師器	甕	F-11	-	Ⅶ	-	-	(16.6)	(14.3)	ハケ目後ナデ	ヘラ削り(斜)	淡黄(2.5Y8/4)	淡黄(2.5Y8/3)	細砂粒多量、石英を含む	良	
135	土師器	甕	B-5	-	Ⅶ	(15.6)	-	-	(6.5)	ナデ(横)	ヘラ削り	淡黄(2.5Y8/3)	淡黄(2.5Y8/3)	0.2mm程の砂粒多量、角閃石を含む	良	
136	須恵器	壺	F-3	-	Ⅶ	(17.3)	-	-	(4.0)	-	-	淡橙(5YR8/3)	淡橙(5YR8/3)	微砂粒少量、褐色土粒を含む	不良	内外面磨耗
137	須恵器	坏身	F-1	-	Ⅶ	-	-	-	(2.5)	回転ヘラ削り	回転ナデ	明ナド灰(2.5GY7/1)	灰白(N8/1)	微砂粒少量を含む	良	外面一部自然釉
138	須恵器	坏蓋	F-6	-	Ⅶ	(13.7)	-	-	(3.1)	回転ヘラ削り	回転ナデ	緑灰(7.5GY6/1)	明ナド灰(5GY7/1)	白色細砂粒多量を含む	良	
139	須恵器	坏蓋	B-6	-	Ⅶ	(4.3)	-	-	(1.2)	ナデ	ナデ	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y8/1)	白色細砂粒多量を含む	良	
140	須恵器	坏蓋	F-3, 4	-	Ⅶ	(7.1)	(20.9)	-	(3.6)	列点本、回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白(5Y8/1)	淡黄橙(10YR8/4)	微砂粒少量、褐色土粒を含む	良	
141	須恵器	坏蓋	F-8	-	Ⅶ	-	(12.1)	-	(1.0)	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y8/1)	灰白(10Y8/1)	白色細砂粒多量を含む	良好	
142	須恵器	坏蓋	B-7	-	Ⅶ	-	(12.6)	-	(1.8)	回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白(7.5Y8/1)	灰白(10Y8/1)	細砂粒少量を含む	良好	
143	須恵器	甕	G-10	-	Ⅶ	-	-	-	-	タタキ(格子目)	当具痕(同心円)	灰(10Y6/1)	灰白(10Y7/1)	細砂粒少量を含む	良	
144	須恵器	甕	B-11	-	Ⅶ	-	-	-	-	タタキ(平行)	当具痕(同心円)	灰(7.5Y6/1)	灰白(7.5Y7/1)	白色細砂粒多量を含む	良	
145	須恵器	甕	B-4	-	Ⅶ	-	-	-	-	当具痕(平行)	当具痕(同心円)	明ナド灰(10Y5/2)	淡橙(5YR8/4)	白色微砂粒少量を含む	良	
146	須恵器	小壺	F-8	-	Ⅶ	-	-	-	(1.4)	ナデ	ナデ	明ナド灰(2.5GY7/1)	明ナド灰(2.5GY7/1)	白色微砂粒多量を含む	良	
147	須恵器	椀	F-5	-	Ⅶ	-	(8.2)	-	(2.1)	-	-	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	微砂粒多量、褐色土粒を含む	不良	

第2表 (4) 土器観察表

遺物 番号	種 別	器 種	グリップ	遺 構	層	量(cm)			調		色		胎 土	焼 成	備 考
						口径	口径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面			
148	土師器	高台坏	F-4	-	VII	-	(6.9)	-	(1.4)	-	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(10YR8/3)	0.2mm程の砂粒多量、角閃石を含む	良	内外面磨耗
149	土師器	皿	B-10	-	VII	-	(7.4)	-	(3.9)	ナデ	浅黄橙(10YR8/5)	浅黄橙(7.5YR8/6)	微砂粒多量、石英、雲母を含む	良	
150	土師器	皿	B-10	-	VII	-	(5.8)	-	(0.9)	ナデ、回転系切り	浅黄橙(10YR8/4)	にふい黄台橙(105YR7/3)	微砂粒多量、長石、雲母を含む	良	
151	土師器	皿	B-10	-	VII	-	(6.9)	-	(1.3)	ナデ、回転系切り	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	細砂粒多量、褐色土粒、石英を含む	良	
152	土師器	皿	F-4	-	VII	-	(6.7)	-	(0.7)	-	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(105YR8/4)	細砂粒多量、褐色土粒、角閃石を含む	良	内外面磨耗
153	土師器	皿	B-10	-	VII	-	-	-	-	ナデ、回転系切り	にふい黄橙(10YR7/2)	にふい黄橙(10YR7/3)	微砂粒多量、長石、雲母を含む	良	
154	瓦器	椀	F-3	-	VII	(15.2)	-	-	(4.6)	回転へう削り後ナデ	灰白(7.5Y8/1)	灰白(10Y8/1)	よく精選されている	良	
155	瓦器	椀	B-7	-	VI	(6.5)	-	-	(4.5)	回転へう削り後ナデ	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	微細な砂粒少量を含む	良	
156	瓦器	椀	G-10	-	VII	-	(6.8)	-	(1.9)	ナデ	灰白(5Y8/2)	灰白(10Y7/2)	精選されて、粒子微細	良	
157	瓦器	椀	B-8	-	VI	-	(7.2)	-	(2.9)	回転へう削り後ナデ	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	よく精選されている	良	
158	白磁	碗	B-5	-	VII	(16.3)	-	-	(3.8)	施釉	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/2)	緻密、灰白土(N(8/)	良好	
164	須恵質土器	摺鉢	F-7	-	V	-	-	-	-	ナデ	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	微砂粒少量、石英を含む	良	
165	瓦質土器	摺鉢	B-2	-	I V	-	-	-	-	摺目	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	微砂粒多量、石英、雲母を含む	良	
166	瓦質土器	摺鉢	F-7	-	V	-	-	-	-	摺目8本、ナデ	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	微砂粒多量、雲母を含む	良	
167	須恵質土器	摺鉢	F-1	-	V	(13.7)	-	-	(3.8)	ナデ	灰白(7.5Y7/1)	灰白(5Y8/1)	よく精選されている	良	
168	土師器	小皿	B-8	-	I V	(7.9)	(5.8)	-	(1.5)	ナデ、回転系切り	にふい橙(7.5YR6/4)	にふい橙(7.5YR6/4)	微砂粒多量、石英、雲母を含む	良	
169	青磁	碗	B-12	-	III	-	(4.8)	-	(1.5)	施釉	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	緻密、淡黄土(2.5Y8/3)	良好	内面円状に釉かき取る
170	柴付	小杯	B-12	-	III	-	-	-	-	一条染付、施釉	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	蜜、灰白土(10Y8/1)	良好	
171	柴付	碗	G-9	-	III	-	-	-	-	一条染付、草花文、施釉	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	蜜、灰白土(10Y8/1)	良好	

第3表(1) 木製品観察表

遺物番号	種別	器種	グリッド	遺構	層	全長(cm)	幅・径(cm)	厚み(cm)	木取り	樹種	備考
001	杭	割杭	F-1	SW-01	X II	(88.5)	11.5	4.8	密柑割り	ツブラジイ	
002	杭	割杭	F-1	SW-02	X II	(99.3)	13.0	5.0	密柑割り	—	
003	杭	丸杭	F-1	SW-03	X II	(44.1)	3.5	—	芯持丸	—	
004	杭	割杭	F-1	SW-04	X II	(46.5)	8.4	5.3	密柑割り(証目)	—	
005	杭	丸杭	F-1	SW-05	X I	(51.1)	3.3	—	芯持丸	—	
006	杭	半截丸杭	F-1	SW-06	X I	(16.7)	6.0	3.2	—	—	
080	木製品	杭状加工品	B-4	-	I X	(168.3)	10.2	—	芯持丸	—	建築材?
081	木製品	杭状加工品	B-4	-	I X	(127.0)	5.0	—	芯持丸	—	
089	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(18.2)	7.3	—	芯持丸	—	
090	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(20.6)	5.7	—	—	—	
091	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(41.8)	7.5	—	芯持丸	散孔材	
092	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(25.0)	7.0	—	芯持丸	—	
093	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(52.2)	4.3	—	芯持丸	—	
094	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(30.9)	5.2	—	芯持丸	—	
095	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(42.4)	7.3	—	芯持丸	コナラ属クスギ節	
096	杭	割杭	B-2	SX-04	VIII	(42.2)	5.8	3.3	密柑割り	—	
097	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(51.0)	6.8	—	芯持丸	コナラ属アカガシ亜属	
098	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(26.8)	3.9	—	芯持丸	—	
099	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(26.9)	6.0	—	芯持丸	コナラ属アカガシ亜属	
100	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(17.9)	4.1	—	芯持丸	—	



第3表(2) 木製品観察表

遺物番号	種別	器種	グリッド	遺構	層	全長(cm)	幅・径(cm)	厚み(cm)	木取り	樹種	備考
101	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(39.3)	5.3	—	芯持丸	アワブキ属	
102	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(31.0)	6.5	—	芯持丸	—	
103	杭	丸杭	B-2	SX-04	VIII	(27.5)	6.1	—	芯持丸	—	
104	杭	丸杭	B-5	SX-05	VIII	(23.2)	2.3	—	芯持丸	—	
105	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(39.3)	10.9	6.1	板目	—	
106	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(40.6)	10.1	4.9	—	コナラ属アカガシ亜属	
107	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(40.2)	10.9	5.5	柱目	—	
108	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(42.7)	10.5	6.1	密柑割り	コナラ属アカガシ亜属	
109	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(37.9)	10.5	3.7	縦木取り	—	
110	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(31.8)	7.1	4.9	板目	コナラ属アカガシ亜属	
111	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(44.0)	13.4	4.8	—	コナラ属アカガシ亜属	
112	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(45.3)	11.7	4.9	—	コナラ属アカガシ亜属	
113	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(43.0)	11.6	5.1	—	コナラ属アカガシ亜属	
114	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(42.2)	9.9	5.3	—	—	
115	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(29.5)	8.0	4.3	板目	—	
116	杭	割杭	B-5	SX-05	VIII	(29.6)	7.8	5.3	—	—	
117	杭	丸杭	B-4	SW-07	VIII	(38.3)	5.1	—	芯持丸	—	
123	木製品	杭状加工品	F-11	SD-01	VII (埋玉層)	157.0	—	—	芯持丸	マツ属複雑管束亜属	
124	杭	丸杭	F-4	SW-08	VII	(52.4)	6.1	—	芯持丸	—	

第4表 石器観察表

遺物番号	器種	石材	グリッド	遺構	層	全長(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
071	砥石	砂岩	F-2	—	X II	(10.0)	9.4	5.5	670.0	下半部欠損
072	石皿・台石	砂岩	F-1	—	X II	38.8	25.4	5.8	11,600	
073	石匙	安山岩	F-2	—	X	3.7	8.1	1.3	32.6	未成品
074	削器	安山岩	F-1	—	X I	6.2	3.7	1.5	27.4	
075	磨石	砂岩	F-1	—	X	12.5	9.8	3.4	585.0	
076	磨石・敲石	砂岩	F-1	—	X	11.0	7.7	4.4	480.0	
077	磨石・敲石	砂岩	F-1	—	X	11.6	7.4	3.5	440.0	
078	磨石・敲石	砂岩	F-1	—	X	(10.1)	9.9	3.2	670.0	下半部欠損
079	砥石	砂岩	F-1	—	X	(8.1)	5.5	4.1	245.0	両端欠損
087	礫器	砂岩	F-1	—	I X	12.1	11.1	2.7	449.0	双頭型、靴型
088	礫器	砂岩	F-1	—	I X	14.8	13.1	3.8	810.0	
159	磨石	凝灰岩	B-10	—	V II	7.8	(5.7)	2.4	155.0	左半部欠損
160	磨石・敲石	輝石安山岩	F-3	—	V II	(4.8)	4.3	(4.0)	125.0	上半部、側面欠損
161	石皿	輝石安山岩	F-7	—	V II	(10.6)	(9.1)	5.1	555.0	欠損
162	石皿	輝石安山岩	F-11	—	V II	7.3	(4.3)	(2.1)	75.0	欠損、砥石?
163	石錘	砂岩	B-2	—	V II	8.5	9.4	1.3	150.0	一部欠損

株式会社 古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. 試験と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	F3 グリット, 9層下位の砂層	木材	酸-珪酸-酸洗浄, 石墨調整	AMS法

※AMS法：加速器質量分析法

2. 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	2480±40	28.0	2430±40	交点: cal BC 500,460430 1σ: cal BC 750~700, 540~410 2σ: cal BC 770~440	176319

1)  $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在 (1950 年 AD) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は、国際的慣例により Libby の 5, 568 年を用いた。

2)  $\delta^{13}\text{C}$  測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分編差 (‰) で表す。

3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$  測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。較正には、年代既知の樹木年輪 $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約 19, 000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10, 000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。

$1\sigma$  (68%確率) と  $2\sigma$  (95%確率) は、補正<sup>シグマ</sup> $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって複数の交点が表記される場合や、複数の  $1\sigma \cdot 2\sigma$  値が表記される場合もある。

### 3. 考察

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、F3 グリットの9層下位の砂層から出土した木材では  $2430 \pm 40$  年 BP ( $2\sigma$  の暦年代で BC770~440 年) の年代値が得られた。

### 文献

Stuiver, M., et. al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083. 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p. 1-36.

## 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である。(杉山, 2000)。

## 2. 試料

試料は、B - 2グリッド、C - 6グリッド、C - 9グリッド、E - 8グリッド、F - 3グリッドの5地点から採取された計31点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

## 3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 40  $\mu\text{m}$  のガラスビーズを約 0.02 g 添加 (電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C · 6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W · 42KHz · 10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20  $\mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率にかけて、試料 1g 中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもに分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}\text{g}$ ) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は 2.94、ヨシ属 (ヨシ) は 6.31、ススキ属 (ススキ) は 1.24、タケ亜科 (ネザサ節) は 0.48 である。

## 4. 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な 5 分類群に限定した。これらの分類群について定

量を行い、そしてその結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

## 5. 考察

### (1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

#### 1) B-2グリット

4層から9層までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、4層（試料1）では密度が6,800個/g、8層（試料5）では5,300個/g、9層（試料7）では5,300個と高い値であり、5層（試料3、4）でも4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、8層では調査地点付近で杭列が検出されている。

#### 2) C-6グリット

4層から9層までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、4層（試料1）では密度が6,700個/g、9層（試料7）では5,200個/gと高い値であり、5層（試料3）、7層（試料4）、砂質土層（試料5）、8層（試料6）でも3,700~4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### 3) C-9グリット

5層から9層までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、5層（試料1）では密度が9,000個/g、9層（試料4）では5,200個/gと高い値であり、7層（試料2）、8層（試料3）でも4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### 4) E-8グリット

4層から9層までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、水田跡が検出された6層（試料2、3）では密度が5,300個/g、7層（試料4）では7,500個/gと高い値であり、4層（試料1）、8層（試料5）、9層（試料6）でも3,000~4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

## 5) F-3グリット

4層から9層までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、5層（試料2）では密度が5,300個/g、7層（試料4）では7,500個/g、9層（試料6）では6,700個/gと高い値であり、8層（試料5）でも、4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

### (2) 推積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、推積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分野群では、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科などが検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にイネが優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっていることが分かる。なお、定量は行わなかったが、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科などの樹木（照葉樹）起源が各層から多量に検出された。

以上のことから、古墳とされる9層より上位層準の推積当時は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、当時の遺跡周辺には、シイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。これらの分類群は、水田層からも多量に検出されることから、樹木葉が施肥などの目的で水田に投入された可能性も考えられる。

## 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田跡が検出されたE-8グリッドの6層ではイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、古墳とされる9層から近世とされる4層までの各層でもイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

古墳とされる9層より上位層準の推積当時は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、当時の遺跡周辺には、シイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられ、その樹木葉が施肥などの目的で水田に投入された可能性も認められた。

## 文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社，p. 189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪

酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.



## 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

## 2. 試料

試料は、玉名平野条里跡から出土した杭や矢板から採取された木材13点である。試料の詳細を表1に示す。

## 3. 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

### 図版1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在するが、剥落している部分が多い。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

図版 2

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

図版 3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版 4・5

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

図版 6

横断面：小型の道管が、単独ないしその複合部に1～2個の柔細胞をはさんで、放射方向にむかって2～4個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の小高木から高木である。

散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管と異性の放射組織が存在する。

接線断面：多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料は保存状態が悪く詳細な観察が困難なため、散孔材の同定にとどめた。

## 5. 所見

分析の結果、コナラ属アカガシ亜属 8点、マツ属複維管束亜属 1点、ツブラジイ 1点、コナラ属クヌギ節 1点、アワブキ属 1点、散孔材 1点が同定された。Ⅷ層の杭や矢板で最も多いコナラ属アカガシ亜属（カシ類）、およびⅩⅡ層杭のツブラジイは、暖温帯である西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素であり、Ⅷ層杭のコナラ属クヌギ節とアワブキ属、Ⅶ層杭のマツ属複維管束亜属（クロマツやアカマツ）も暖温帯域に生育する樹木である。いずれの木材も、遺跡周辺の森林から容易に採取されたとみなされる。

## 文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.

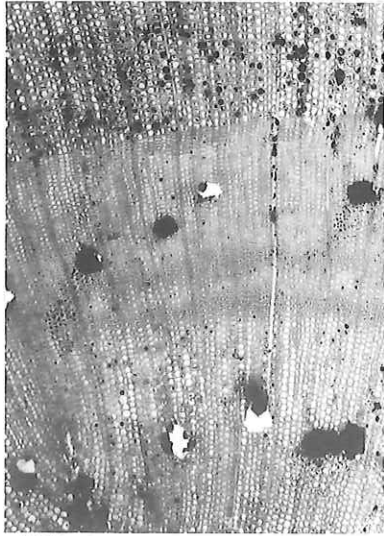
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p. 242

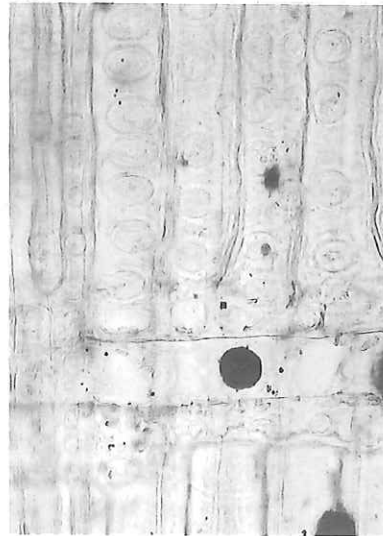
表1 玉名平野条里跡における樹種同定結果

遺物番号	試料	結果 (学名/和名)
001	No.1 X II層杭	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky ツブラジイ
091	No.11 VIII層杭列	diffuse-porous wood 散孔材
095	No.15 VIII層杭列	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i> コナラ属クヌギ節
097	No.17 VIII層杭列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
099	No.19 VIII層杭列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
101	No.21 VIII層杭列	<i>Meliosma</i> アワブキ属
106	No.26 VIII層矢板列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
108	No.28 VIII層矢板列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
110	No.30 VIII層矢板列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
111	No.31 VIII層矢板列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
112	No.32 VIII層矢板列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
113	No.33 VIII層矢板列	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
123	No.38 VII層SD01内杭	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属

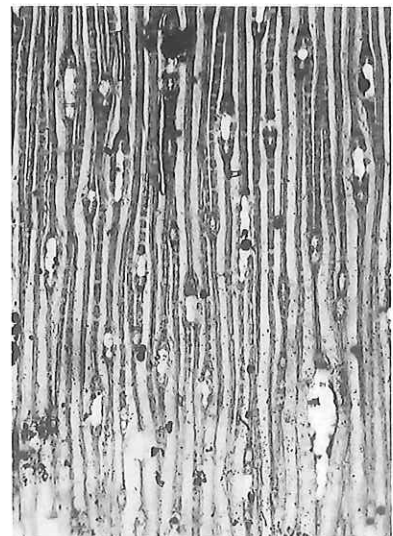
玉名平野条里跡の炭化材 I



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.05mm



接線断面 : 0.2mm

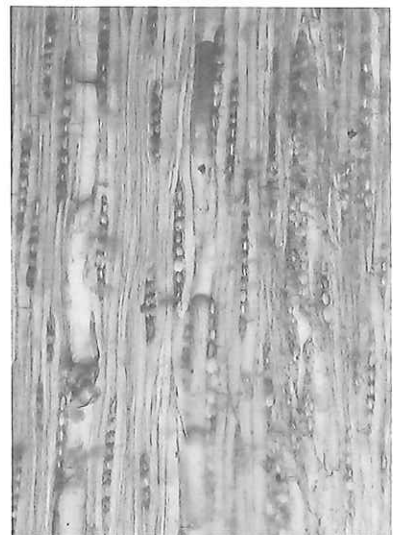
1. VII層SD01内杭 No.38 マツ属複維管束亜属



横断面 : 0.5mm

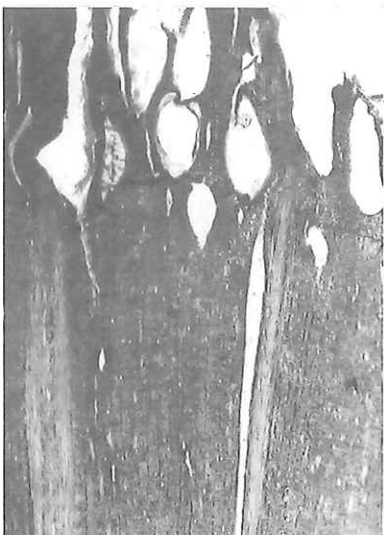


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

2. XII層 No.1 ツブラジイ



横断面 : 0.5mm



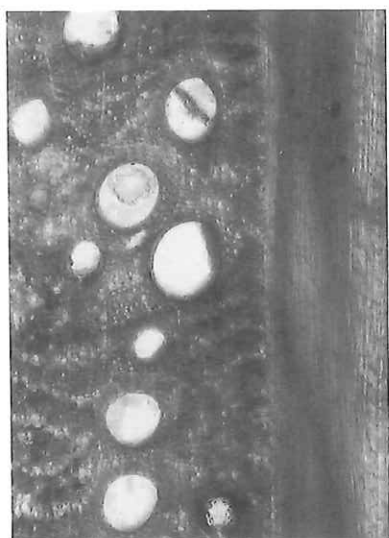
放射断面 : 0.5mm



接線断面 : 0.2mm

3. VIII層杭列 No.15 コナラ属クヌギ節

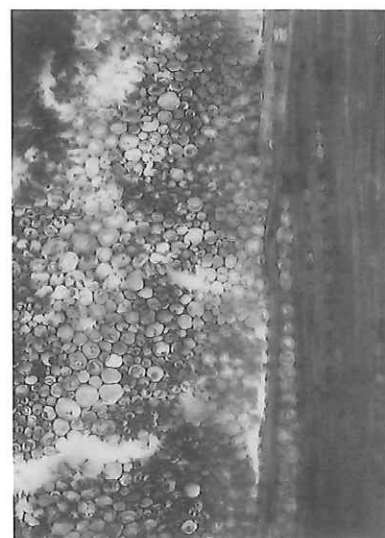
玉名平野条里跡の炭化材 II



横断面 ————— : 0.5mm

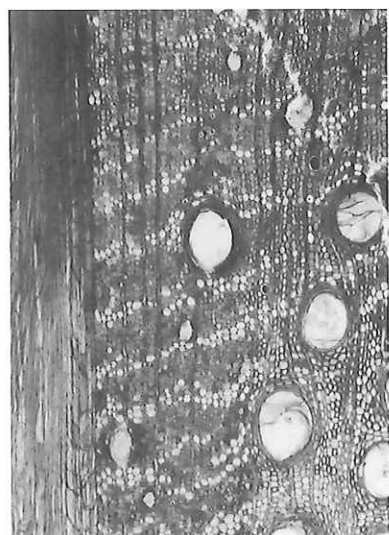


放射断面 ————— : 0.5mm



接線断面 ————— : 0.2mm

4. VIII層矢板列 No.32 コナラ属アカガシ亜属



横断面 ————— : 0.5mm

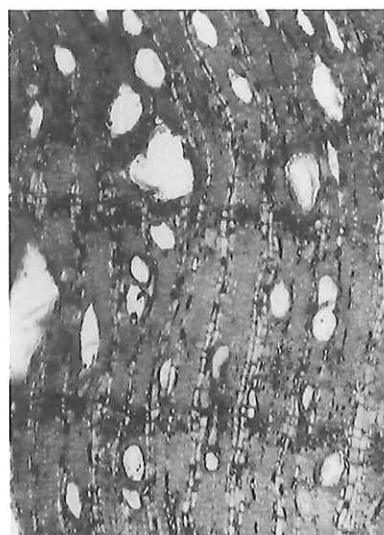


放射断面 ————— : 0.5mm



接線断面 ————— : 0.5mm

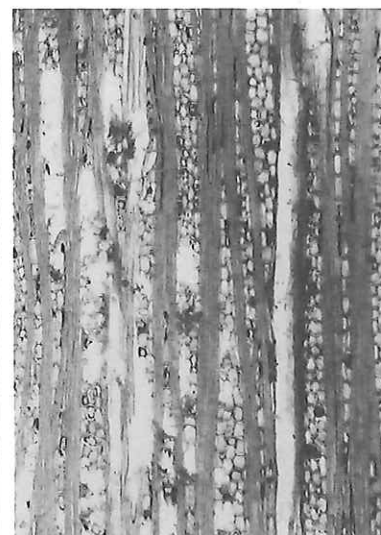
5. VIII層矢板列 No.33 コナラ属アカガシ亜属



横断面 ————— : 0.5mm



放射断面 ————— : 0.5mm



接線断面 ————— : 0.5mm

6. VIII層杭列 No.21 アワブキ属

# 写真図版



調査区全景  
(西より)



表土剥ぎ後杭打ち風景  
(西より)



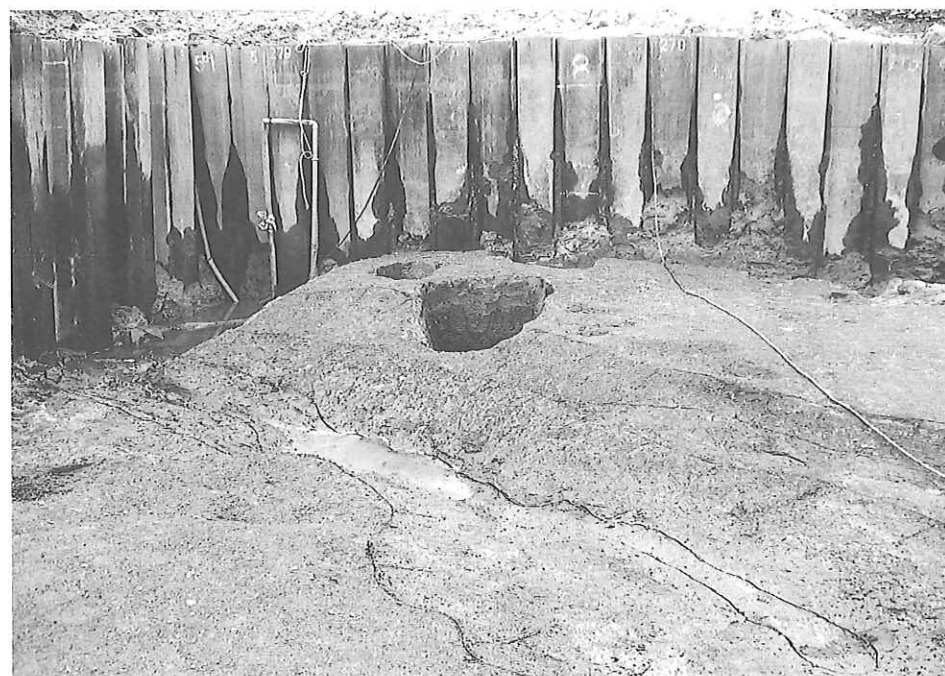
作業風景  
(東より)



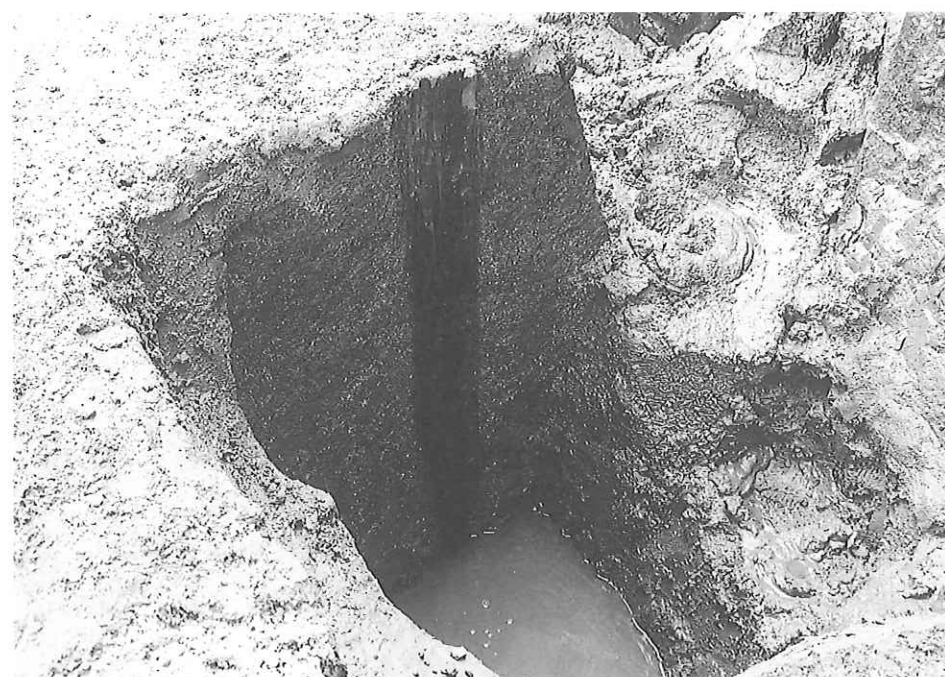
西側XII層 検出状況  
(西より)



XII層杭周辺 検出状況  
(東より)



SW-01 半載状況  
(北より)





SW-02 半載状況  
(南より)



SW-03 半載状況  
(北より)



SW-04 半載状況  
(北より)

SW-05、06 半載状況  
(北より)



XII層石皿 出土状況  
(北より)



SD-02 検出状況  
(南より)





SD-02 土層断面  
(北より)



流木(木製品) 出土状況  
(東より)



IX層土師器 出土状況  
(北より)

SX-04 半載状況  
(南より)



SX-04 近景 1  
(東より)



SX-04 近景 2  
(東より)

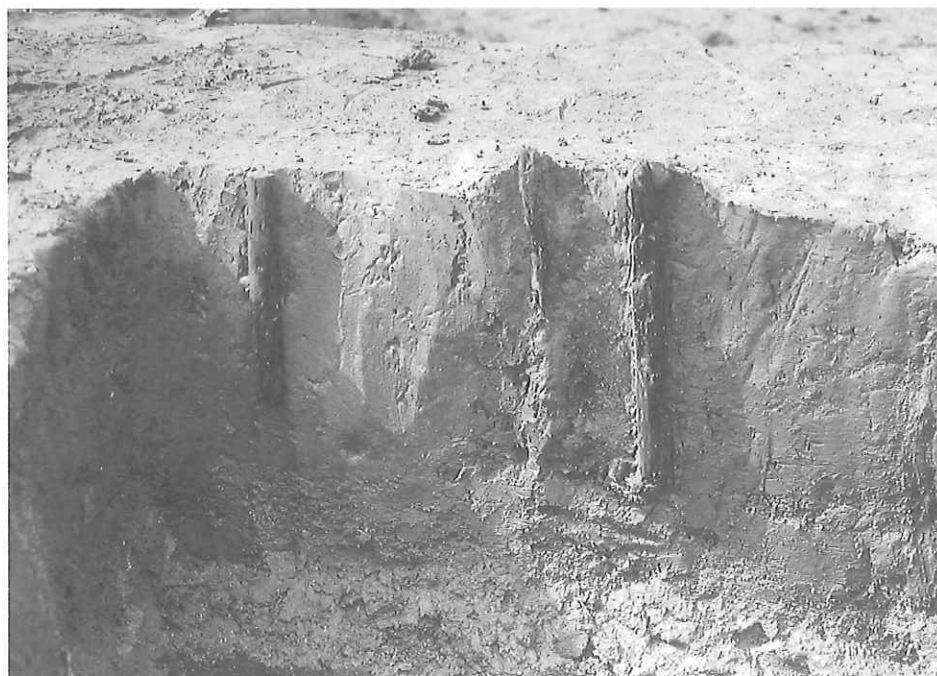




SX-04 近景 3  
(東より)

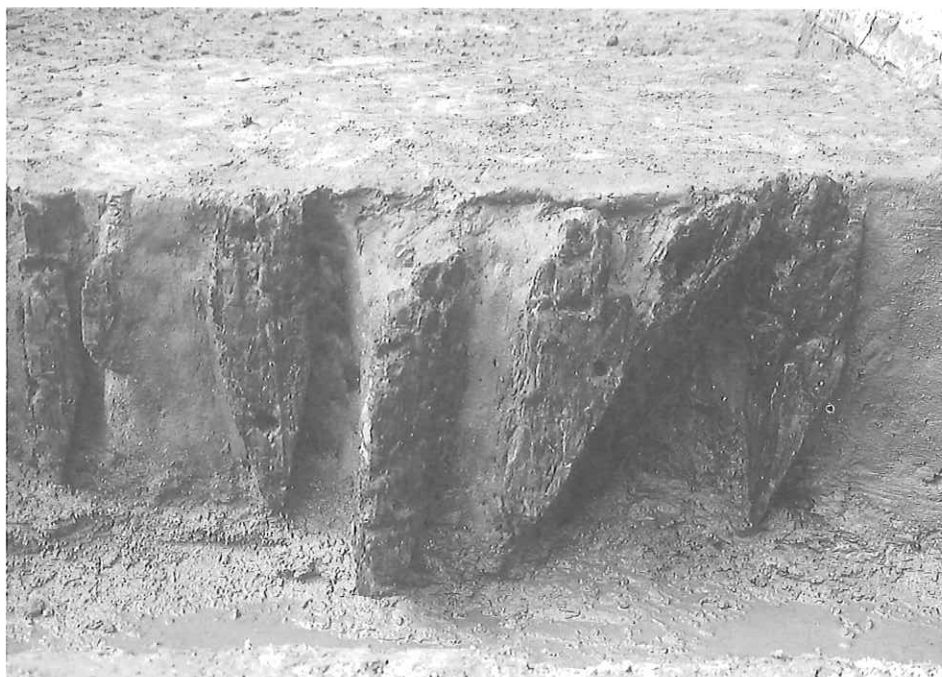


SX-05 半載状況  
(南より)

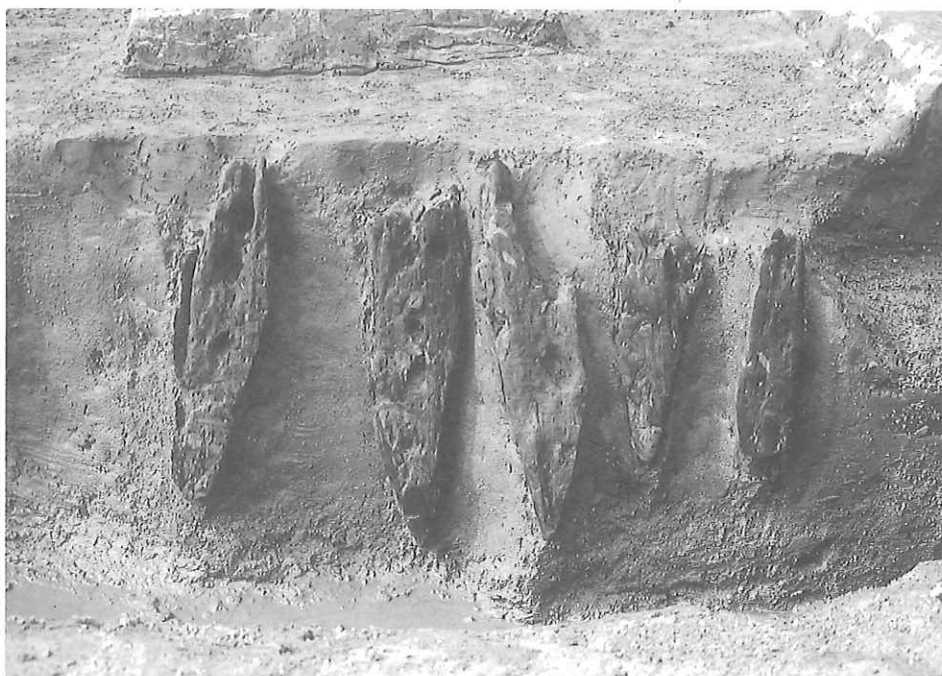


SX-05 近景 1  
(東より)

SX-05 近景 2  
(東より)



SX-05 近景 3  
(東より)



SW-07 半載状況  
(南西より)

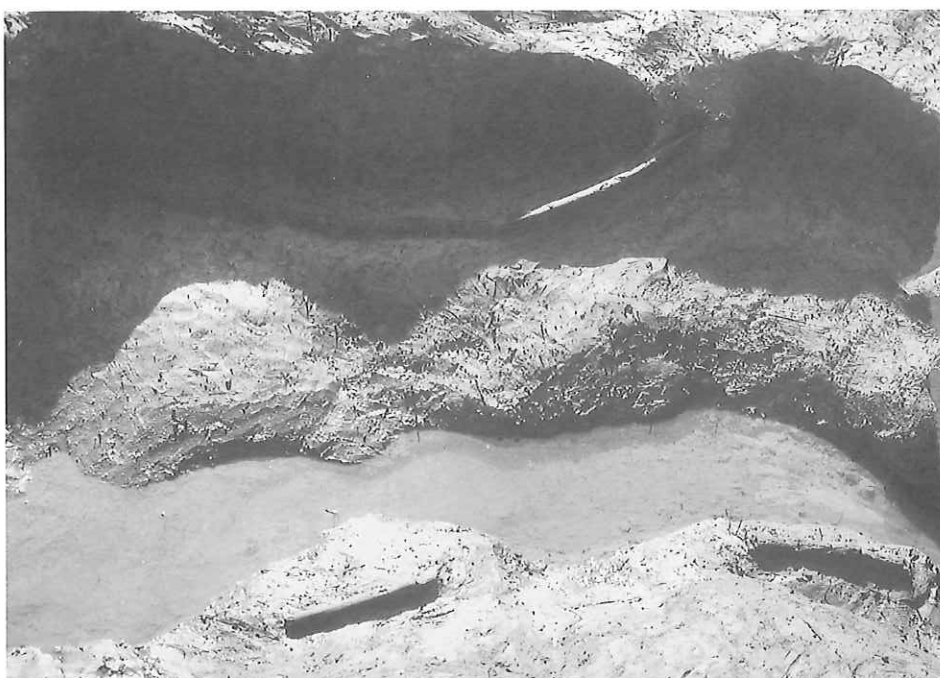




SD-01 全景  
(東より)



SD-01 完掘状況  
(北より)



SD-01 木製品 出土状況  
(北より)



SD-01、SX-02、03 遠景  
(東より)



SX-02 完掘状況  
(西より)



SW-08 半載状況  
(南西より)





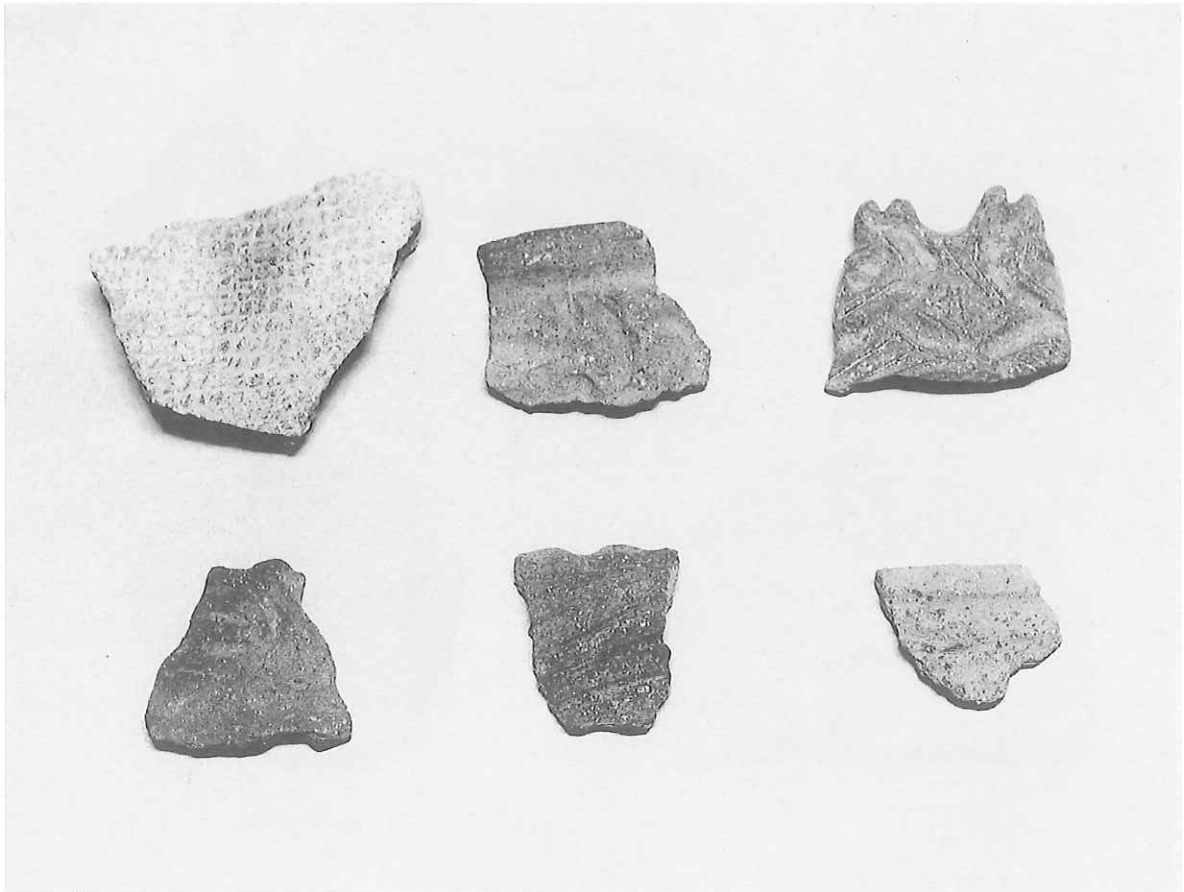
VII層土器 出土状況  
(西より)



SX-01 全景  
(西より)



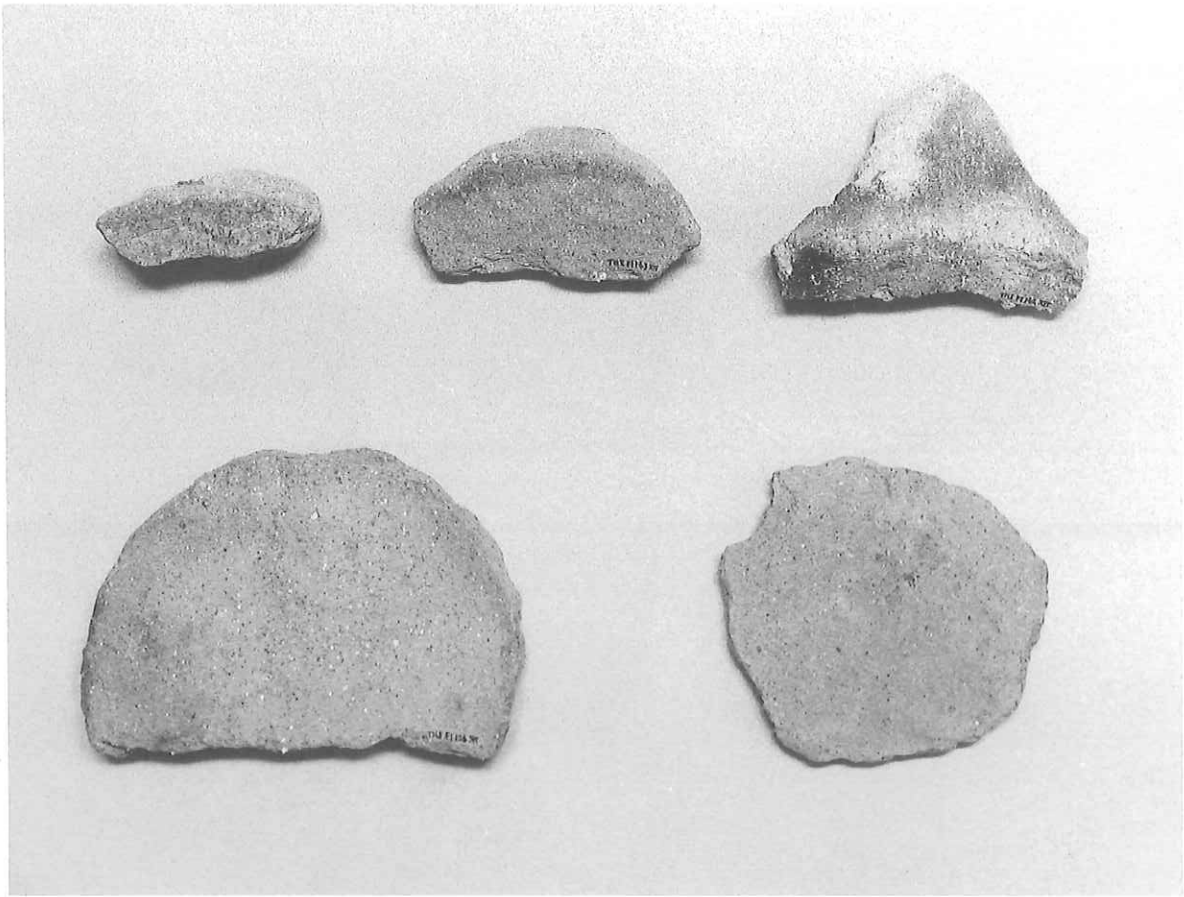
稲株痕、足跡 完掘状況  
(南より)



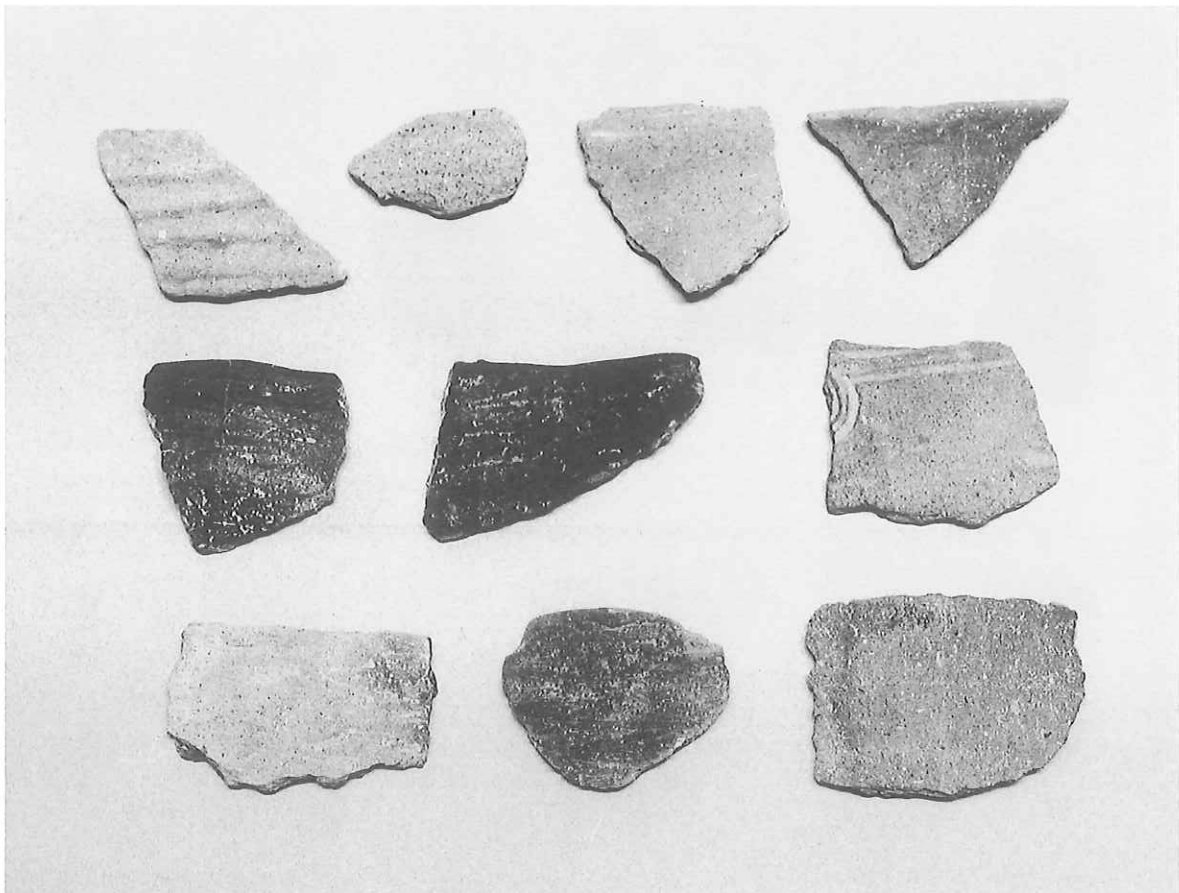
縄文土器



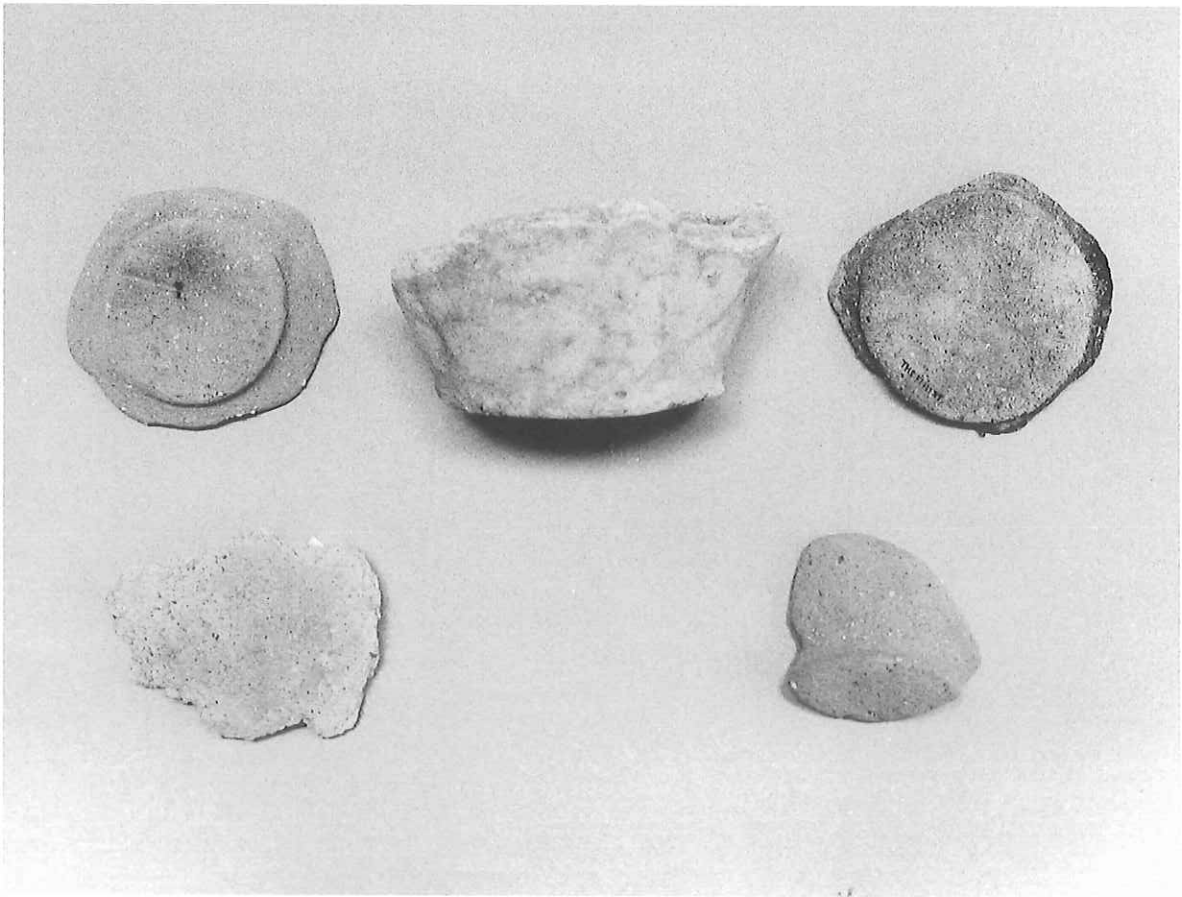
縄文土器



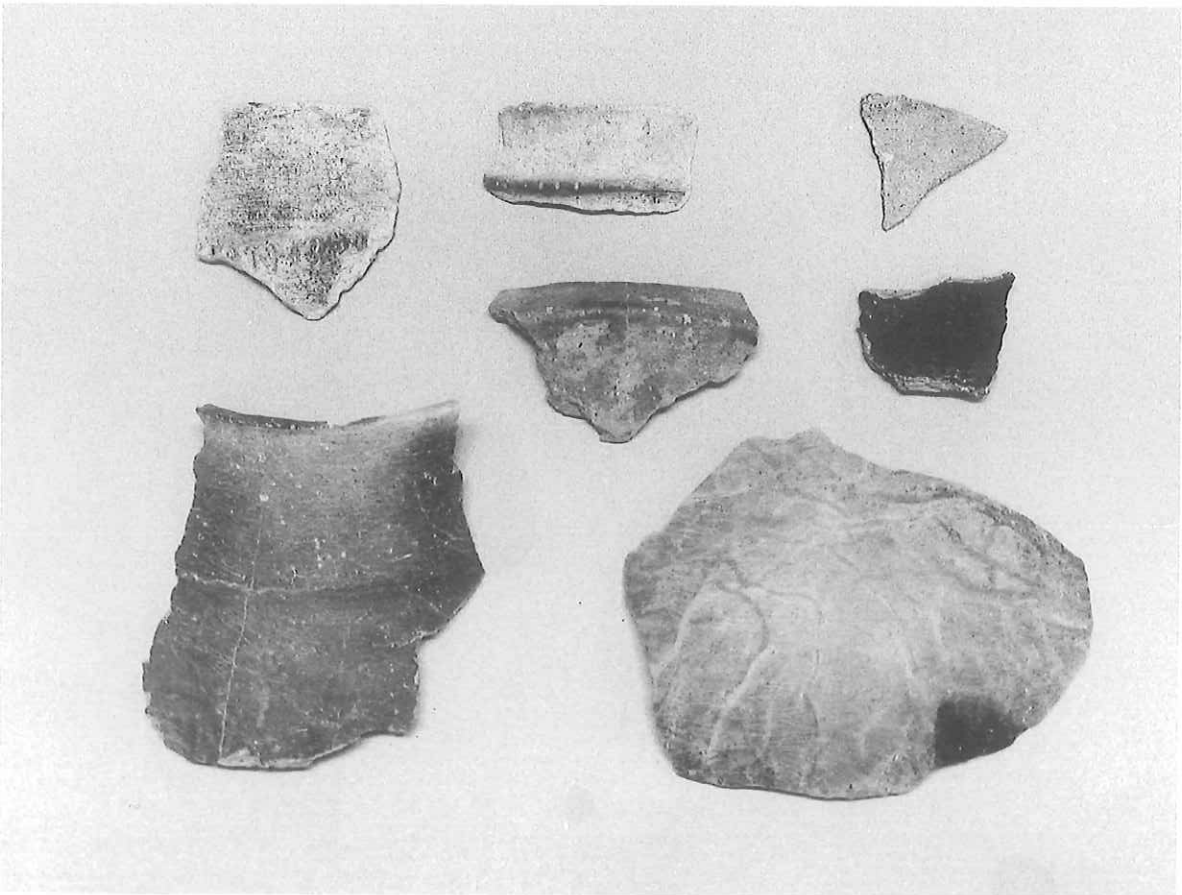
縄文土器



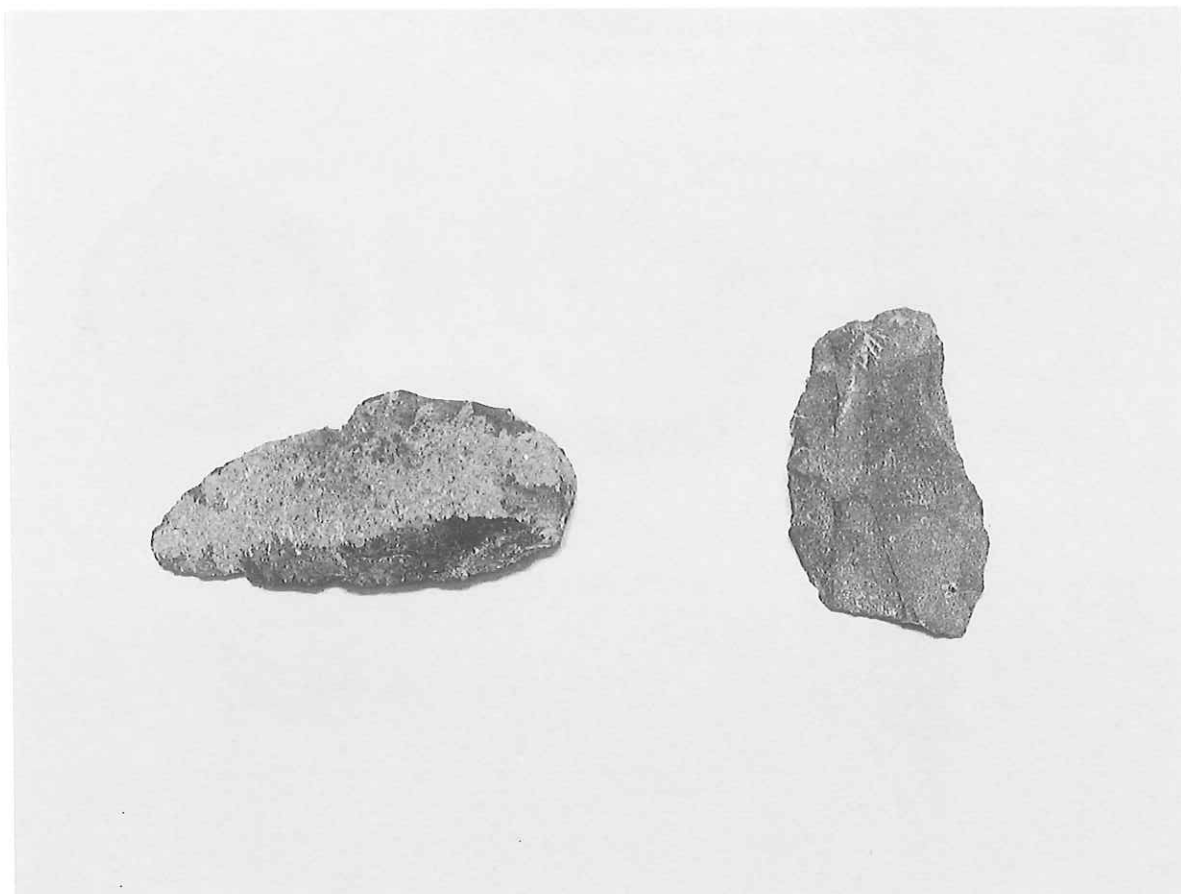
縄文土器



縄文土器



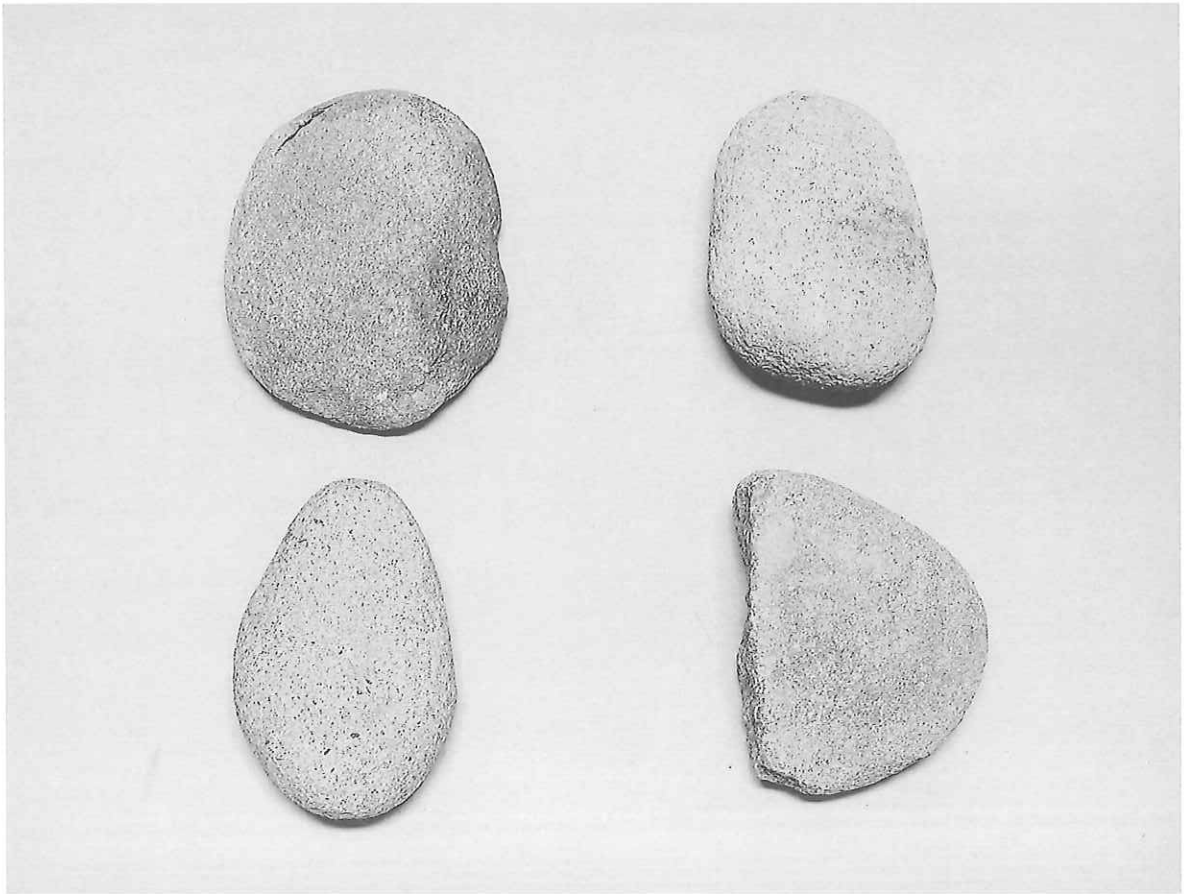
縄文土器



石匙、削器



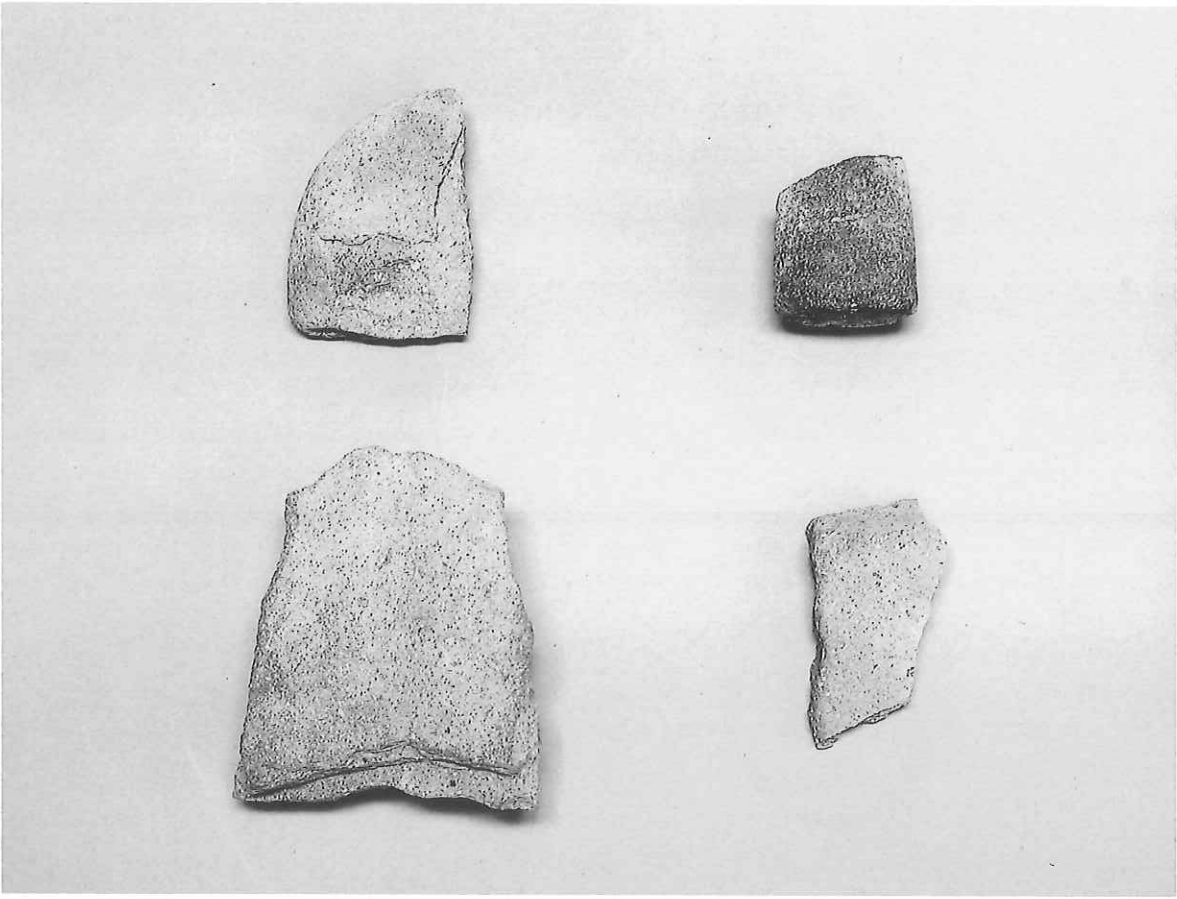
石皿



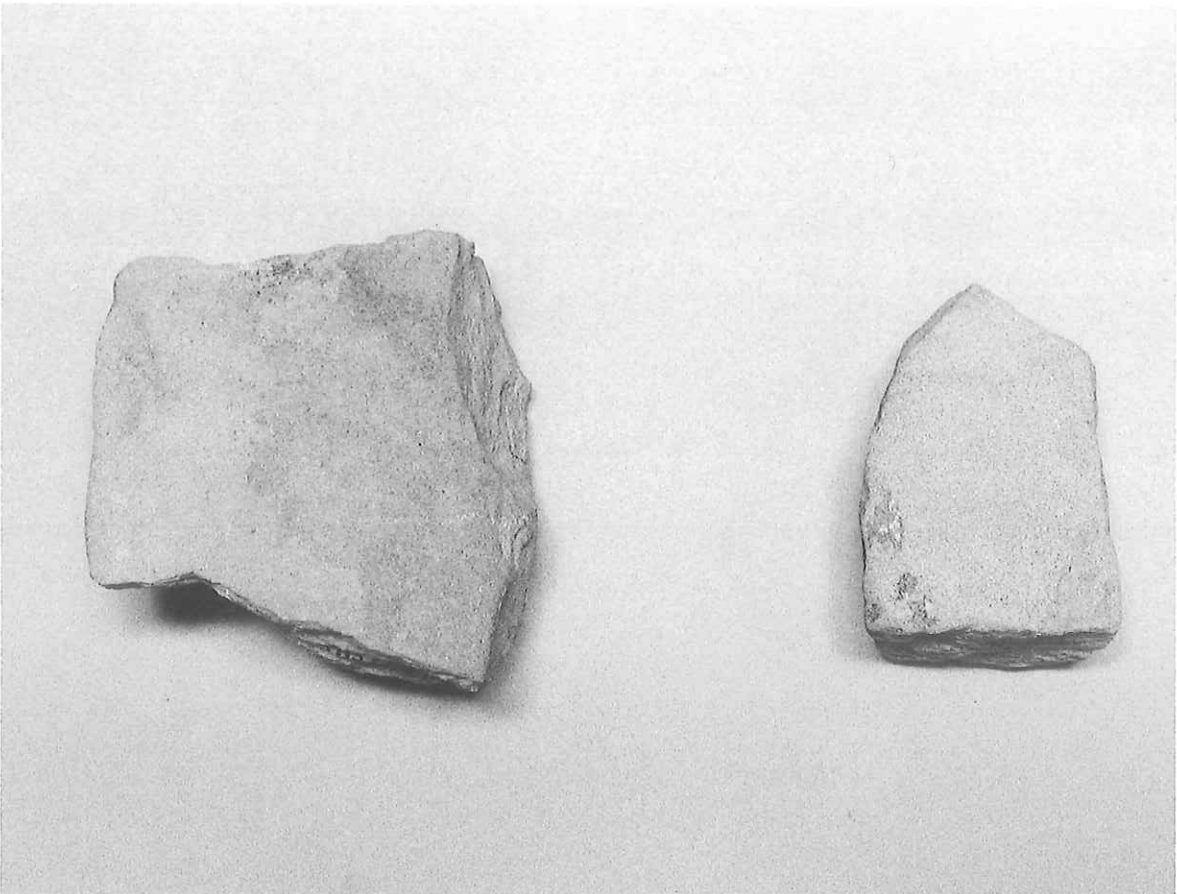
磨石



礫器

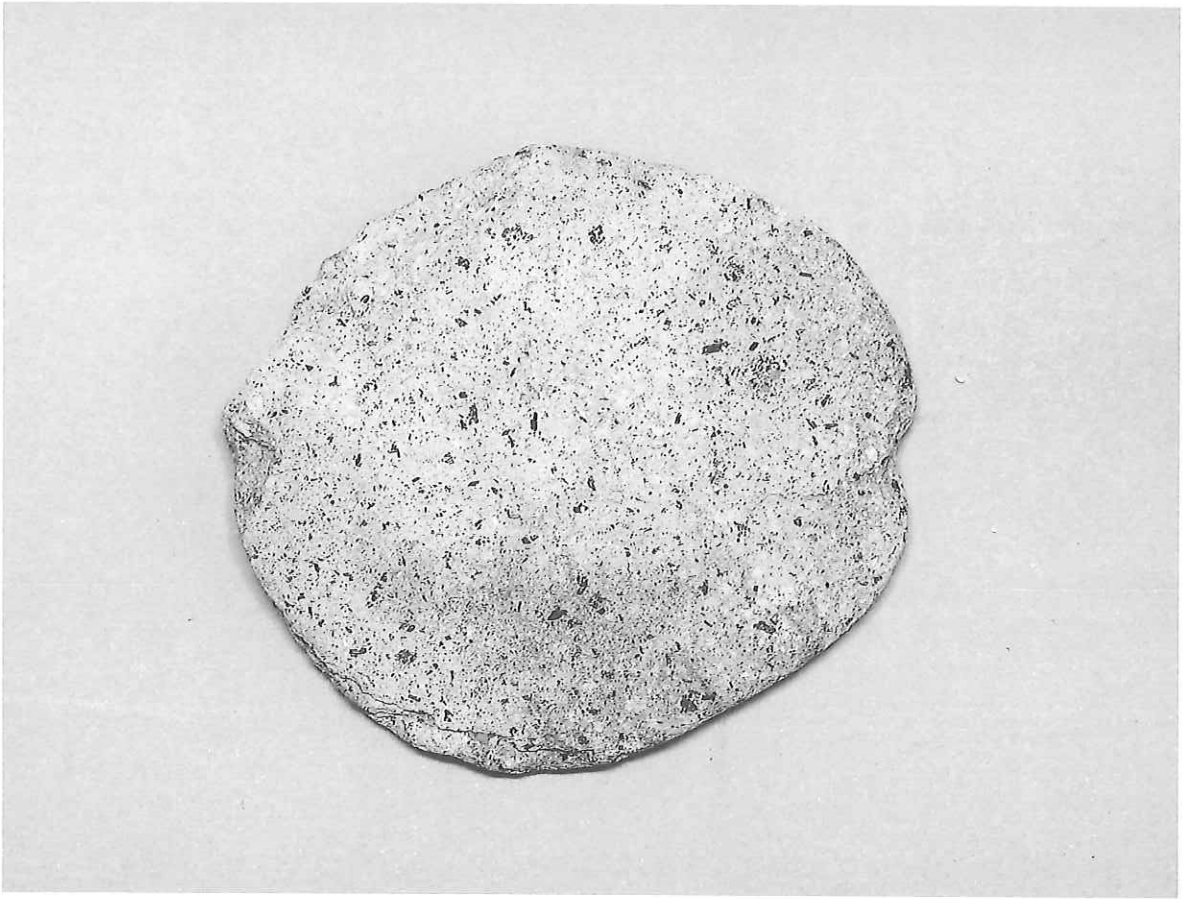


磨石、石皿

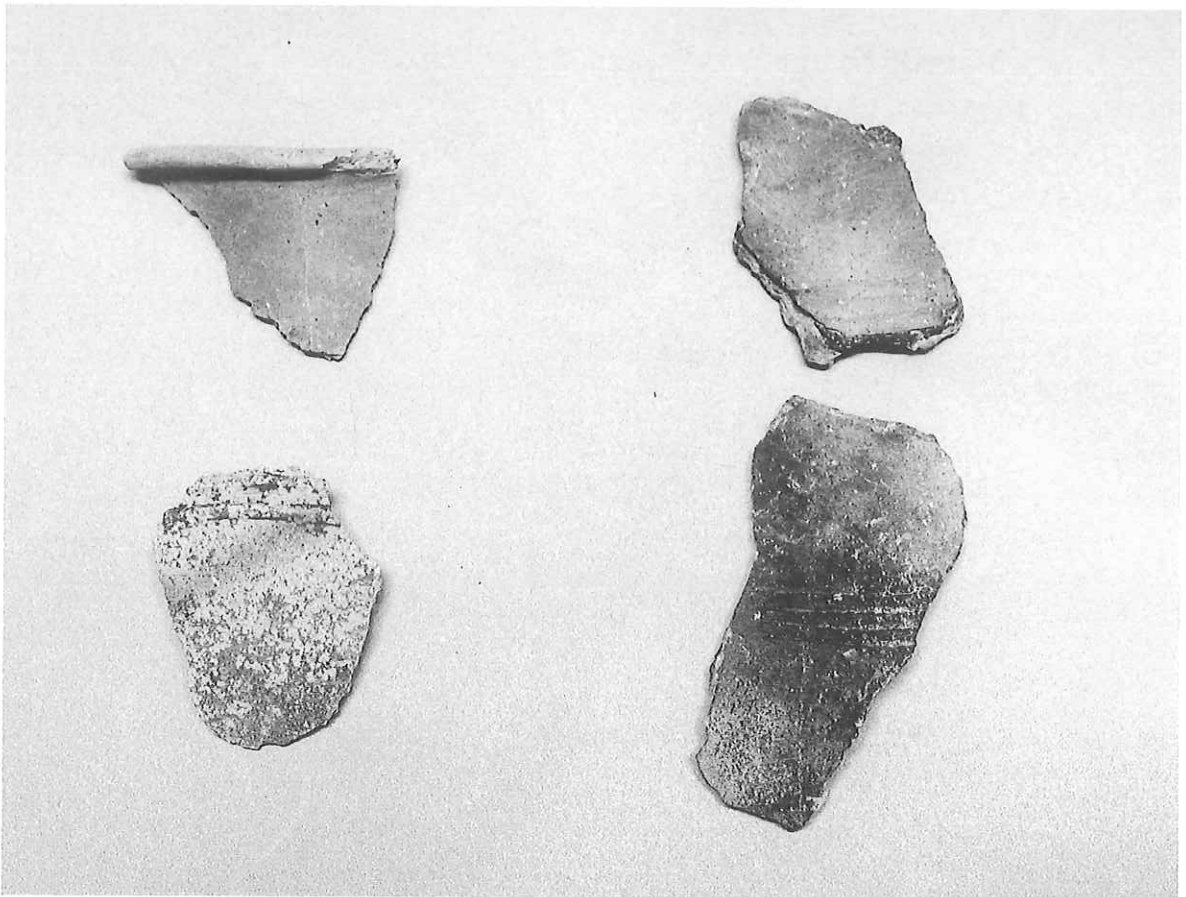


砥石





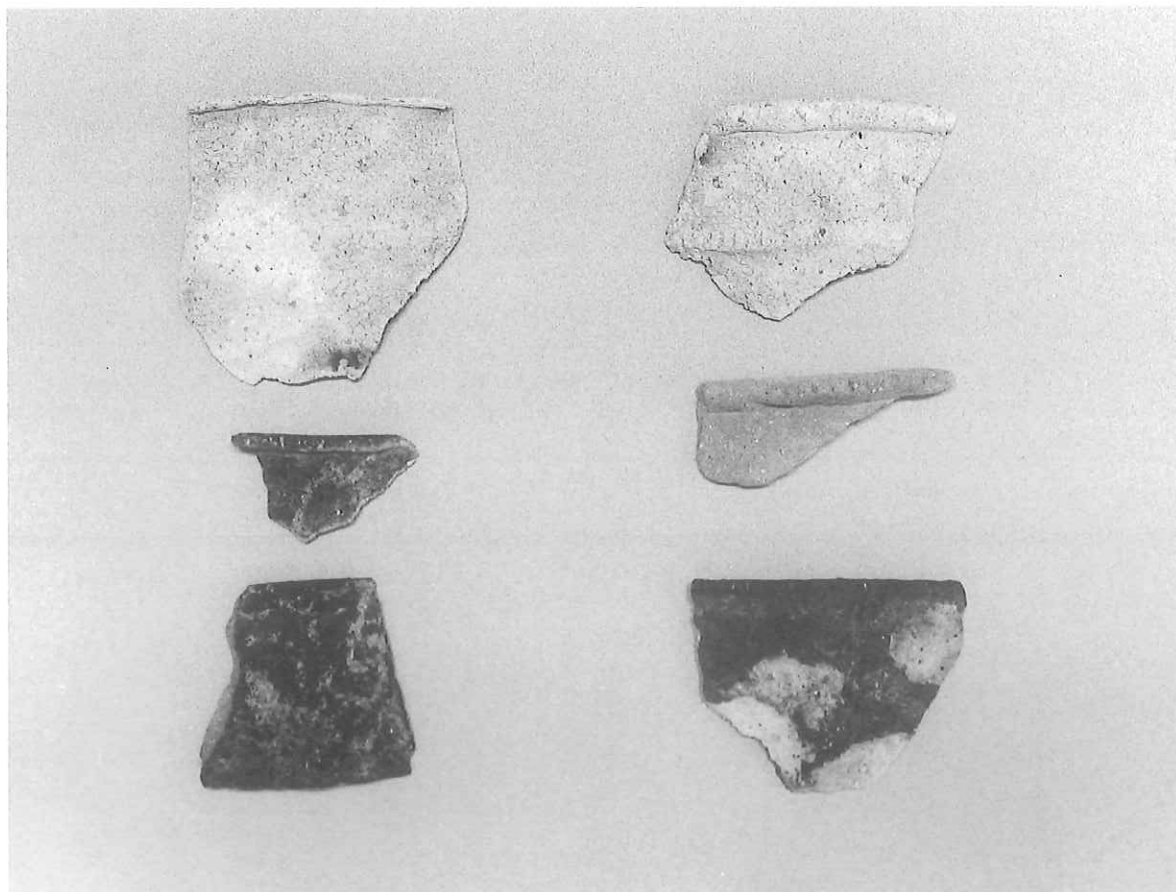
石锤



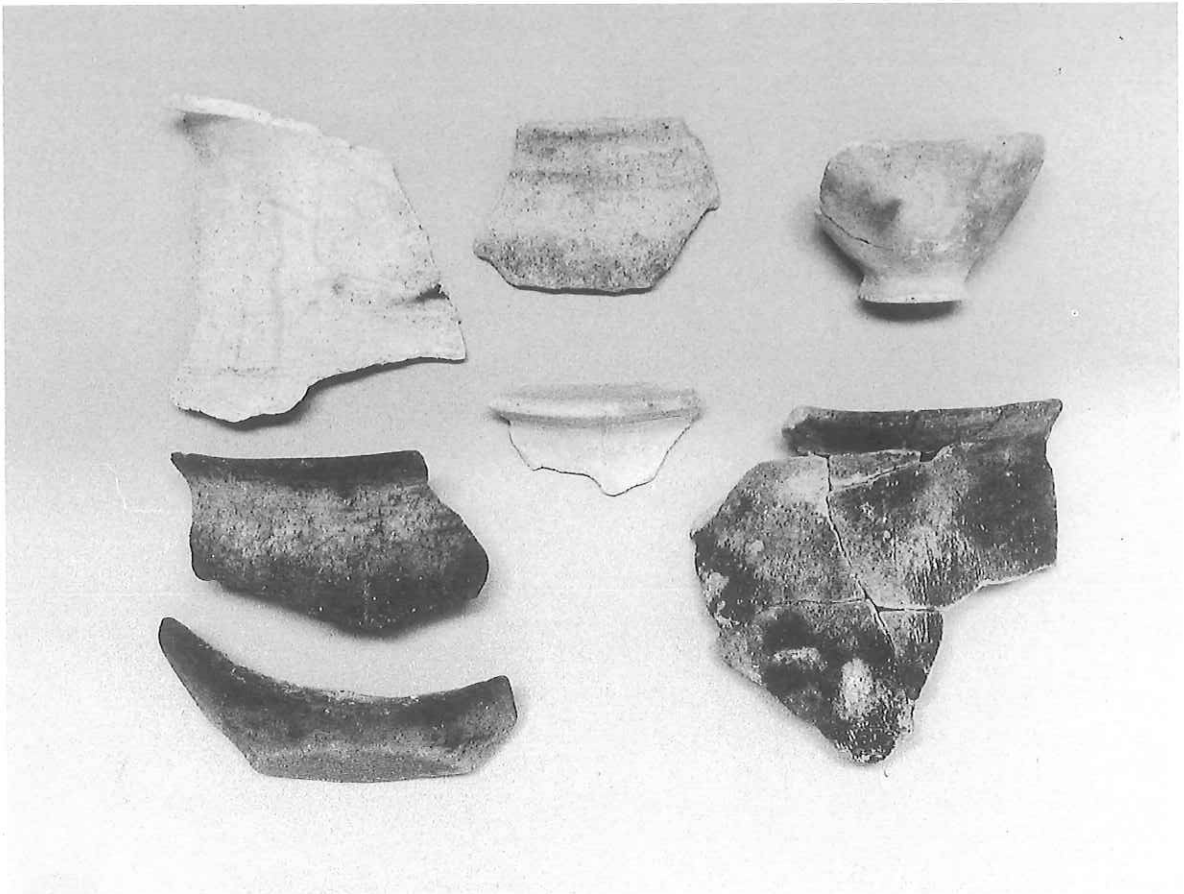
弥生土器



弥生土器



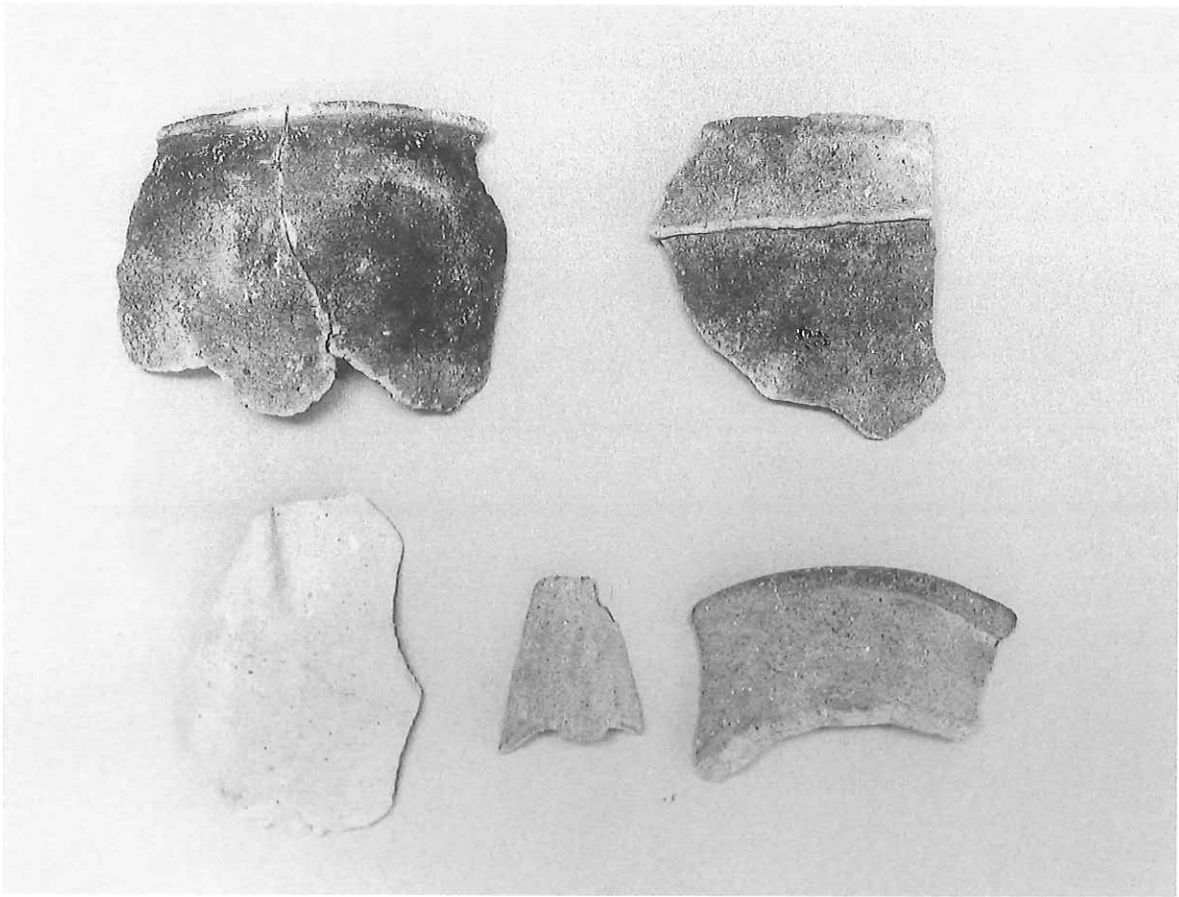
弥生土器



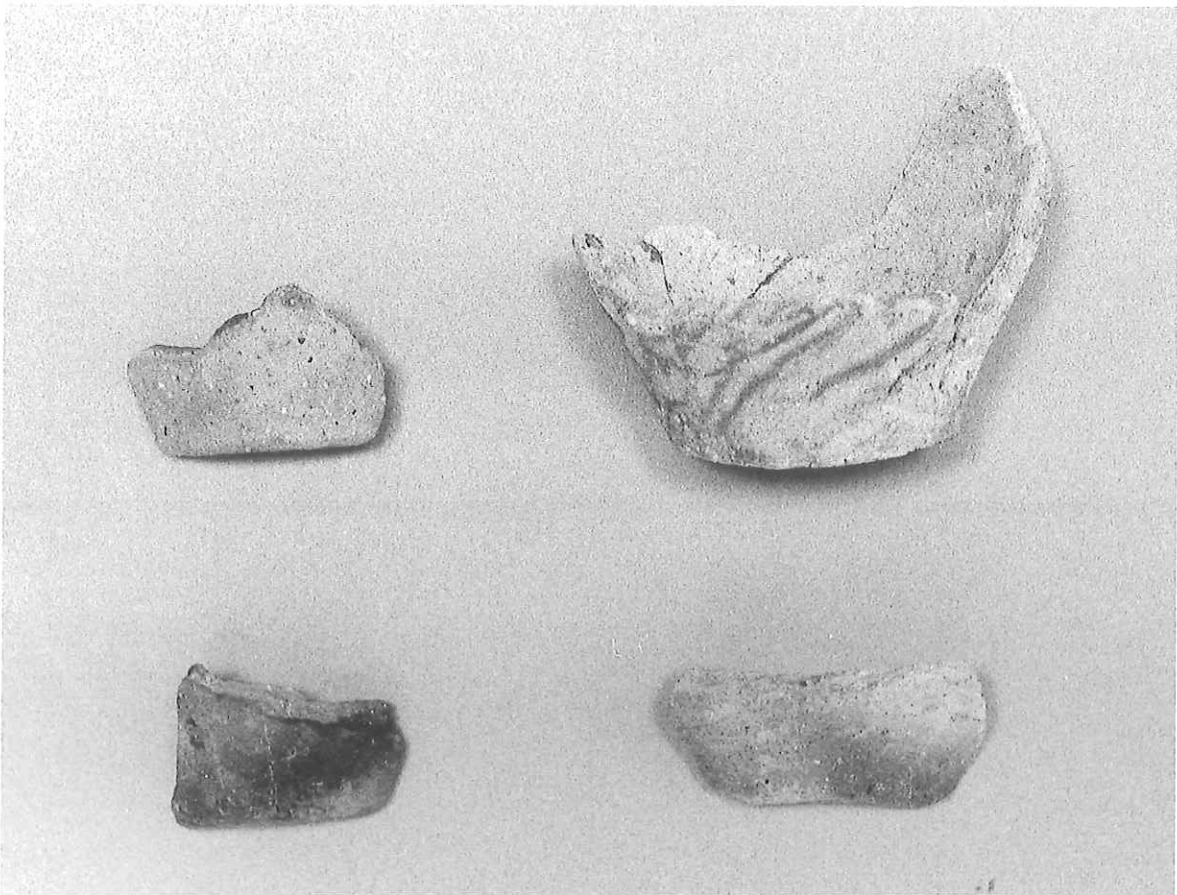
弥生土器



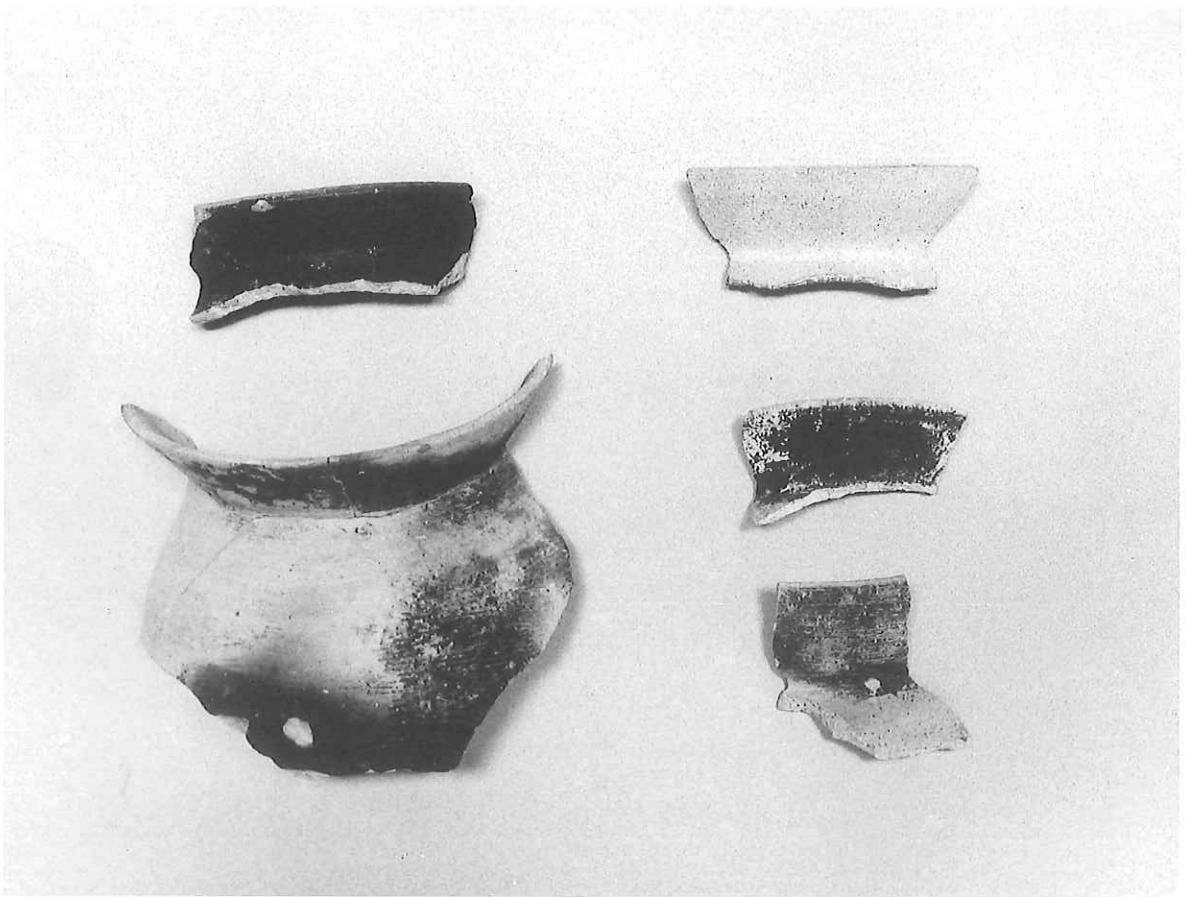
弥生土器



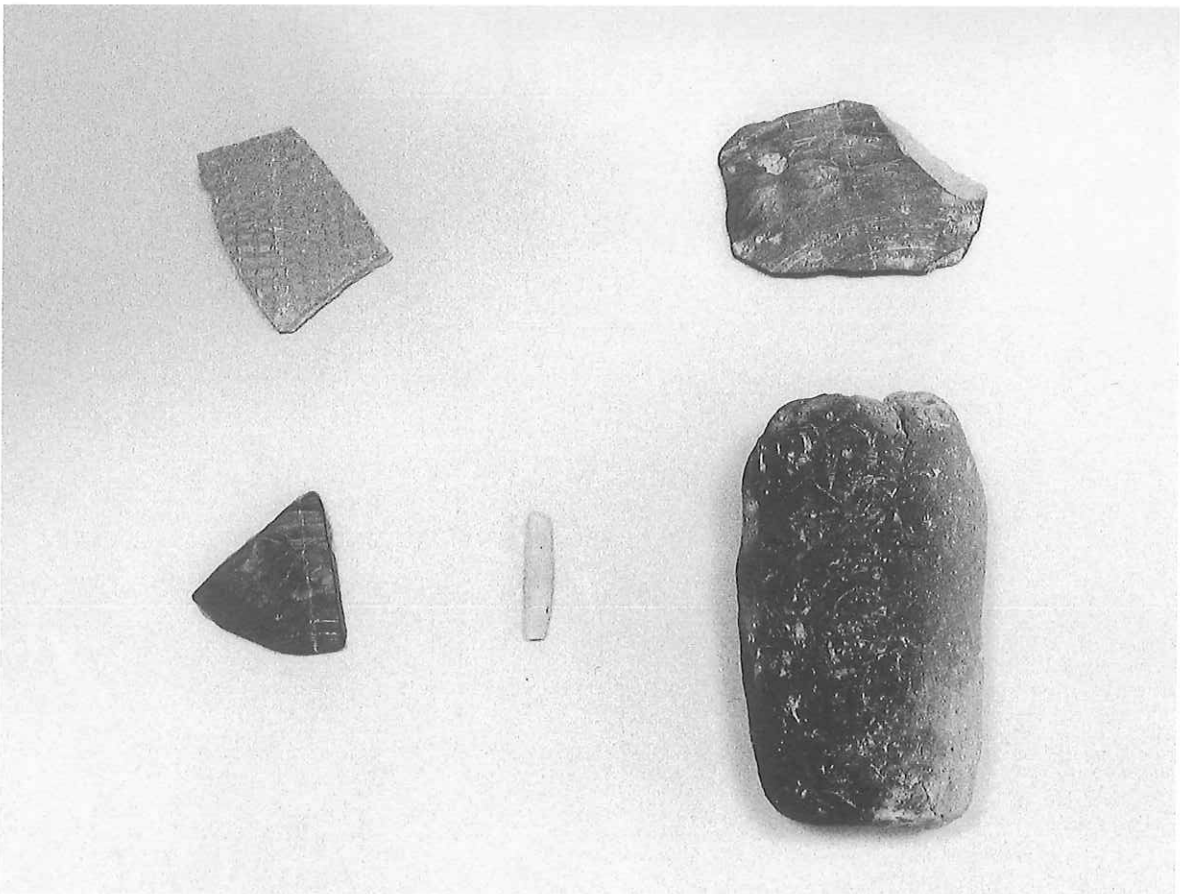
弥生土器



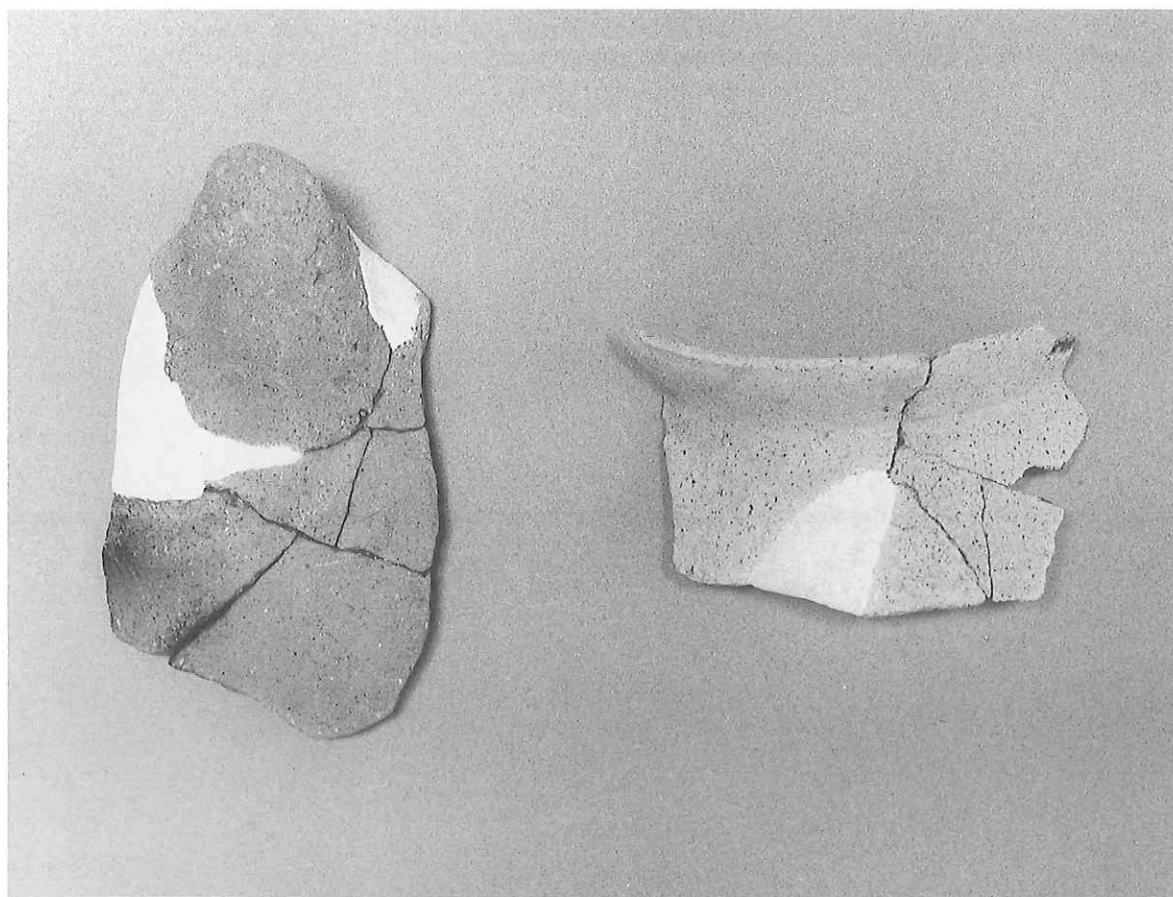
弥生土器、縄文土器



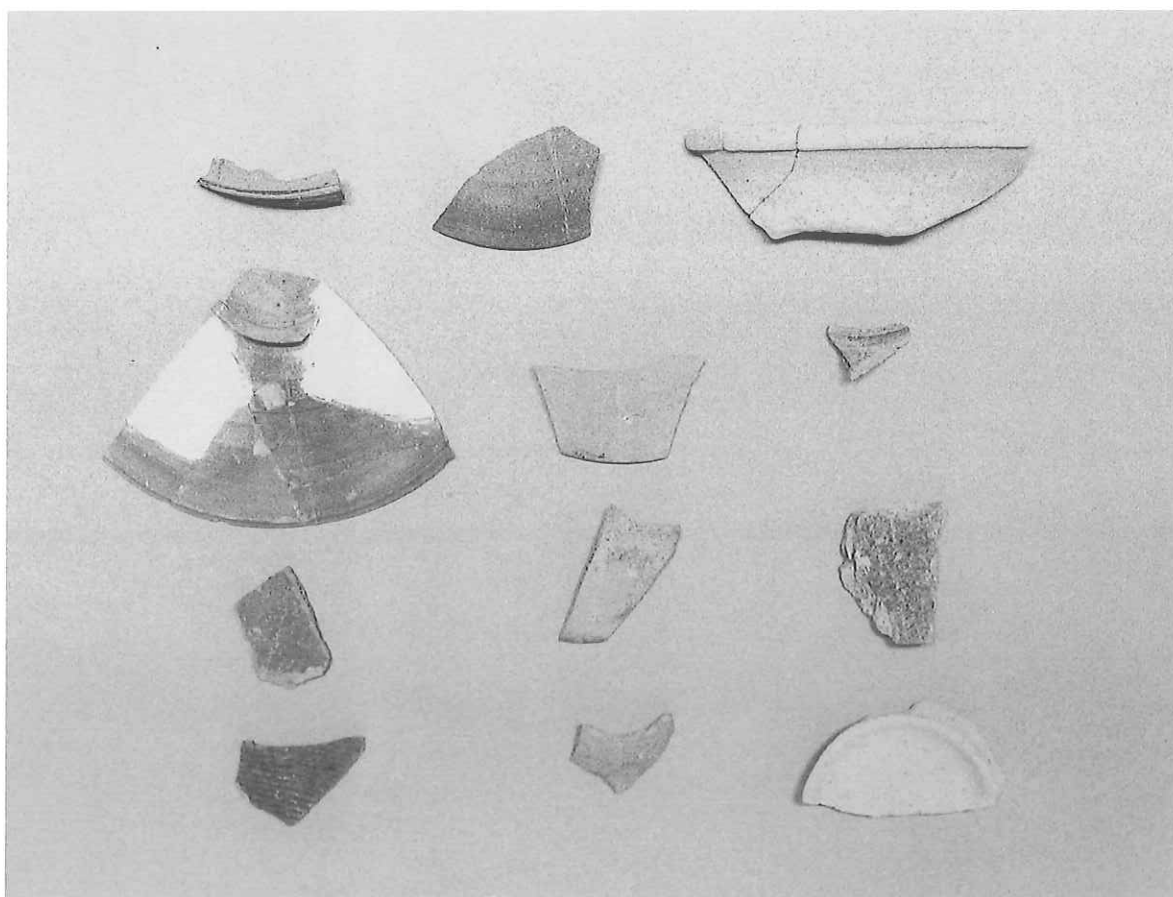
土師器



須恵器、黒色土器、土錘



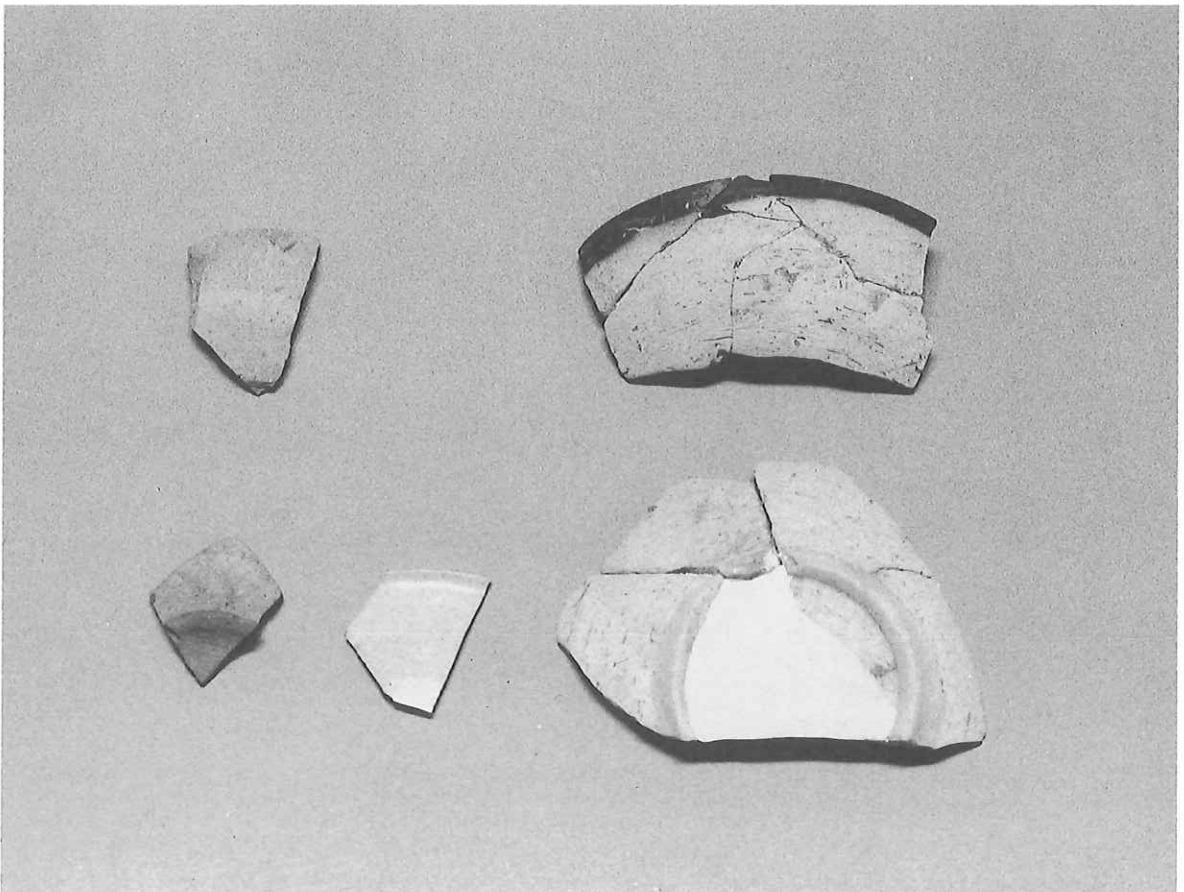
甗、土師器



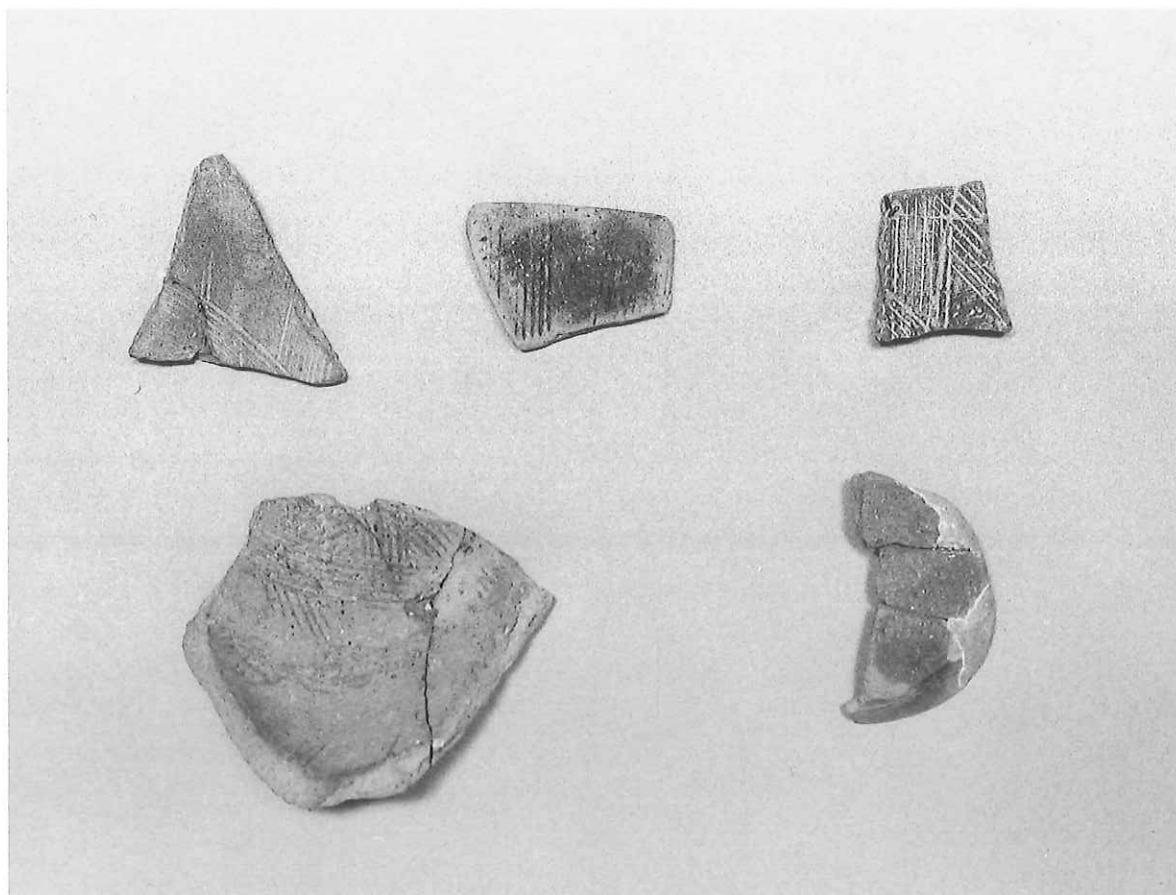
須恵器



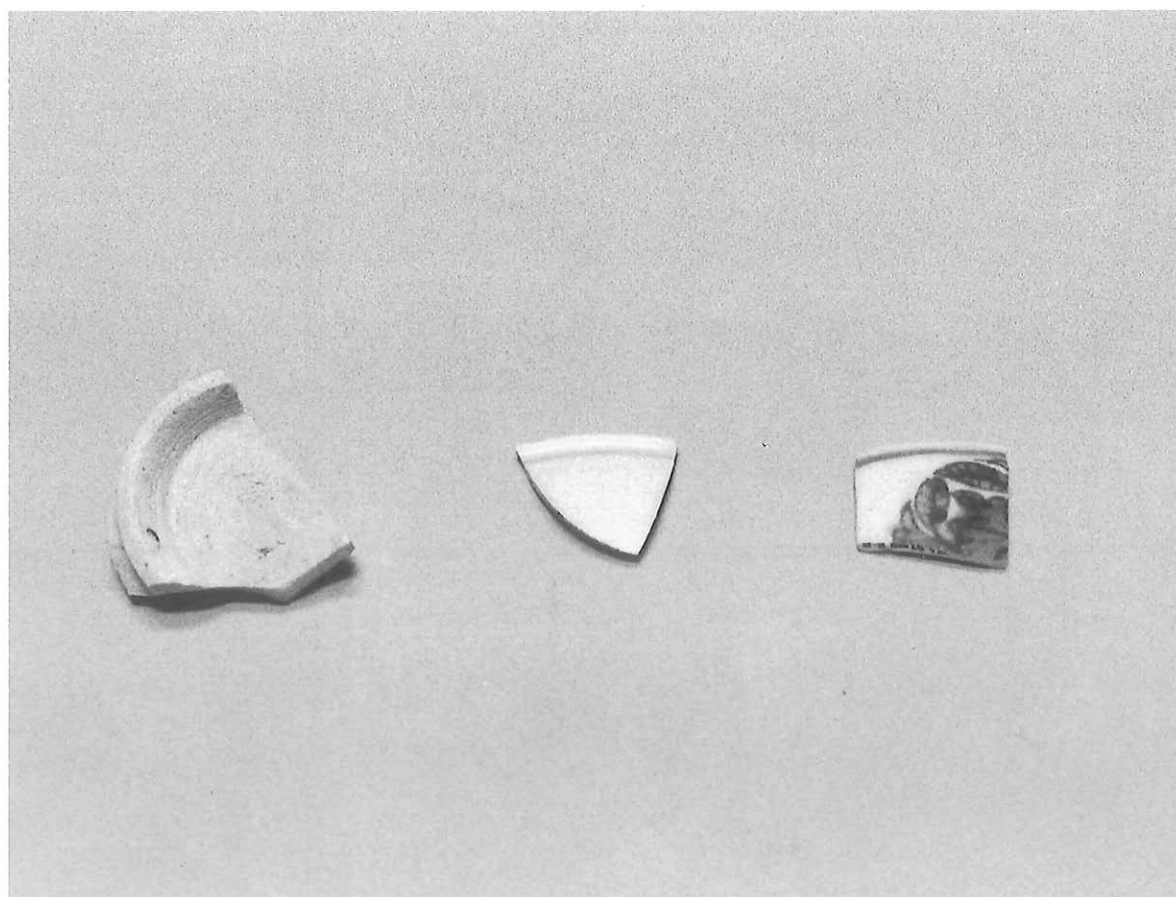
土師器



瓦器、白磁



須恵質土器、瓦質土器、土師器



青磁、染付



岱明町文化財調査報告 第1集  
玉名平野条里跡・下河原

発行年月日 平成16年3月31日

編集発行 岱明町教育委員会

〒869-0223 熊本県玉名郡岱明町中土 975  
TEL (0968) - 57 - 0135

印刷 有限会社 岱明印刷

〒869-0222 熊本県玉名郡岱明町野口 2281-2  
TEL (0968) - 57 - 0141

